す05-01-01

涼暮皐 セブンスターズの印刻使い1

新シリーズ！

この程度の迷宮は『挑む』って言うんじゃねぇ

『こなす』っていうんだよ

元最強の冒険者は再び伝説となる！

小説家になろうで大人気のダンジョン系王道ファンタジー！

HJ文庫
HOBBY JAPAN

涼暮 皐 すずくれこう

埼玉県在住。探偵を志し、名探偵が登場する本ばかり読み続けたところ人的ステータスが著しく偏る。結果として作家に。
あの秋の夕暮れ、物寂しい路地裏で迷子の犬と交わした約束を果たす。

四季童子 しきどうじ

ヘルマジスタン在住。黒いわんこがだらけている横で絵を描いてますよ。
燻製とか塩麹とか作ってて、実は凝り性なのかもと今更ながらに自覚してきた。

HJ文庫の最新情報はここから!
http://hobbyjapan.co.jp/hjbunko/

9784798610733

ISBN978-4-7986-1073-3

C0193 ¥619E

1920193006193

定価：本体619円＋税

伝説の冒険者集団《七星旅団》の六番目にして、魔力を制限する呪いを受け絶賛開店休業中の魔術師アスタ＝セイエル。彼は解呪手段を求め入学した魔術学院で選抜者試験に巻き込まれたのを切っ掛けに、再び戦いの表舞台に立つことを決意する。

── 最強の一角と謳われた印刻使い《紫煙の記述師》が紡ぐダンジョン系王道ファンタジー、ここに開幕！

涼暮 皐　作品

セブンスターズの印刻使い1

HJ文庫9月の新刊

NEW セブンスターズの印刻使い1	著／涼暮 皐
蒼鋼の冒涜者〈ブルースチール・ブラスフェマ〉2	著／榊 一郎
六畳間の侵略者!? 20	著／健速
六畳間の侵略者!? 20 ドラマCD付き特装版	著／健速

HJ
す05-01-01

涼暮皐

セブンスターズの印刻使い1

HJ文庫
HOBBY JAPAN

涼暮 皐 すずくれこう

埼玉県在住。探偵を志し、名探偵が登場する本ばかり読み続けたところ人的ステータスが著しく偏る。結果として作家に。
あの秋の夕暮れ、物寂しい路地裏で迷子の犬と交わした約束を果たす。

四季童子 しきどうじ

ヘルマジスタン在住。黒いわんこがだらけている横で絵を描いてますよ。
燻製とか塩麹とか作ってて、実は凝り性なのかもと今更ながらに自覚してきた。

カバーイラスト／四季童子　装丁／coil

9784798610733

ISBN978-4-7986-1073-3

C0193 ¥619E

1920193006193

定価：本体619円＋税

伝説の冒険者集団《七星旅団》の六番目にして、魔力を制限する呪いを受け絶賛開店休業中の魔術師アスタ＝セイエル。彼は解呪手段を求め入学した魔術学院で選抜者試験に巻き込まれたのを切っ掛けに、再び戦いの表舞台に立つことを決意する。

── 最強の一角と謳われた印刻使い《紫煙の記述師》が紡ぐダンジョン系王道ファンタジー、ここに開幕！

HOBBY JAPAN

涼暮 皐　作品

セブンスターズの印刻使い1

セブンスターズの印刻使い1

涼暮 皐

HJ文庫

セブンスターズの印刻使い

Rune Master of the SevenStars

1

「迷宮では何が起こるかわからない。
って言ったの、アンタだったと思うけど」

「なら、少なくともいちばん信頼
できる魔術師を引き入れておくに、
越したことはないでしょう」

レヴィ＝レヴィ＝ガードナー

オーステリア王立魔術学院第二学年
七席にして、学院長の孫娘。
学院で見せている性格は、優等生を取り
繕ったイメージ優先のキャラ作りで、
アスタの前でだけ時折素を見せる。

ピトス

⚜ピトス＝ウォーターハウス

王立魔術学院第二学年四傑のひとりで稀少な治癒魔術師。学院では主に補助系の魔術を習っているのだが、その知識と技術は、すでにして一流どころと遜色がない。

迷宮に挑むパーティメンバーは
癖も　癖もありそうで――

ウェリウス

⚜ウェリウス＝ギルヴァージル

第一学年四傑のひとりで元素魔術の天才。貴族の血を引いており、人当たりが良く、努力も怠らない完璧超人。

シャルロット

⚜シャルロット＝セイエル

第一学年四傑のひとりで、人体の魔術を使うことが出来る万能型。アスタのことを一方的に知っており、なにやら因縁がある様子。

「――行くぜ」
「――《忘》――！」
Laetare!
言葉とともに吐き出した紫煙を、
そのまま開戦の狼煙とする
魔力を滲ませた煙が、自ら文字の形を取って
暗い迷宮に漂った。
刻むルーンは大災を意味する字
その瞬間。
幾重にも重なる巨大な水塊が、
渦を巻いて魔獣に襲いかかった
アスタ
アスタ＝セイエル（一ノ瀬 明日多）
表向きは魔術学院の落ちこぼれだが、
元は私設のギルド「七星旅団（セブンスターズ）」の六番目『紫煙の記述師』。
呪いによって魔力の大半が制限されており、解呪の方法を探している。

セブンスターズの印刻使い1

涼暮 皐

HJ文庫
598

口絵・本文イラスト　四季童子

Lunc Master of the Seven Stars

contents ★★★★★★★

プロローグ ある宮廷の序 2

第一話 オーステリア魔術学院 009

第二話 オーステリア 103

第三話 印刻使い 168

第四章 後日談 237

プロローグ　ある書籍の序文

それは、この国で最も有名な冒険者集団の名前だ。

――七星旅団（セブンスターズ）。

たった七人だけで構成された魔術師のクラン。現代における最新の伝説となった、虹色の冒険者たち。

所属する全員が二つ名持ちであり、彼ら最大の功績とされる前人未到の大偉業――すなわち世に名高き五大迷宮が一角《ゲノムス宮》の完全踏破――は、今や戯曲として多くの詩人たちに謳われるまでとなっている。

最強のクラン。七星旅団（セブンスターズ）。その偉大にして高名な七人の魔術師に関して、しかし判明していることは極端に少ない。

彼ら彼女らがどこの誰なのか。いったい何を目的として活動していたのか。

前年の暮れに突然の解散が取り沙汰された現在も、その真実は依然として謎に包まれて

いる。名前、年齢、性別、出自、外見――かの旅団に所属する人までもがその一切を明かしていない。ただ戦場で彼らの姿を見たという魔術師たちの間でのみ、与えられた二つ名が会話の端に挙げられているだけなのだから。

――彼らを表舞台に登場させたのが、記憶に新しい《五大迷宮》攻略の功績であることは前述した。

歴史上、誰ひとりとして踏破する者のなかった五大迷宮。過去には魔術師百名超からなる大規模編成軍をも退けた、最大にして最深、そして最悪の魔窟。

その一角に数えられる《ゲノムス宮》を、たった七人だけで攻略したという伝説的偉業は、今をもってなお読者諸賢の記憶に新しいことと思う。

その功績だけで、七星旅団の名が王国中に知らしめられたことは言うまでもない。

彼らはその後、各地の戦場を転々とした。

王の要請によるものだろう。戦場で彼らを間近に見た兵士たちは、その実力に畏敬と畏怖とを抱かされたという。七人が七人、揃って戦略級と評された魔術師たちだ。

けれどその高名に反し、彼らの正体を知る人間は極端に少ない。その功績と、ただ戦場における活躍から命名された二つ名だけが巷間に膾炙している現状――筆者たる私が筆を取るに至った理由がそこにある。

そう、彼らは富を求めなかった。
彼らは名声を望まなかった。
七星が欲したのは、ただひとつ――自ら成し遂げるべき結果だけであったのだから。
そのなんと高潔なことか。なんと純粋なことか。
創作上の英雄譚としてもできすぎなほど、近年における彼らの活躍は著しい。私も魔術師の端くれとして、その正体に尽きぬ興味を抱かざるを得ないのだ。
その半数以上が正体不明の、七人の英雄。

一番目――《辰砂の錬成師》。
二番目――《超越》。
三番目――《全理学者》。
四番目――《万象の昏闇》。
五番目――《日向の狼藉者》。
六番目――《紫煙の記述師》。
七番目――《天災》メロ＝メテオヴェルヌ。

七星旅団（セブンスターズ）。

本書では、その隠された素顔について、いくつかの考察を重ねていきたい――。

――タークⅡマイルド著

『セブンスターズの謎』序文より抜粋。

第一話　オーステリア王立魔術学院

「――なんだコレ、おい……？」

呆れの声が口から漏れた。意識して発した言葉ではない。

目の前にあるこの本が、あまりにもふざけた記述をしていたために、思わず口をついて文句が零れ出てしまったのだ。

――あり得ない。ああもう本当にあり得ない。

いったい誰の許可があってこんな下らない本を書いたというのか。ていうか、そもそもまず誰がこんな頭の悪い本を買うというのだろう。

実際に買ってしまった俺が言うのも説得力に欠けるが、それでもあえて言わせてもらえるのであれば、こんな本、書く奴も買う奴もどうかしているとしか思えない。

よって判決――禁書指定だ今すぐ焚書しろ。

「……はあ」

狭い部屋の端へ、溜息まじりに本を投げる。埃と交互に積み重なった本の塔、そのいちばん上に見事着地。わずかに揺れるブックタワーを、意味もなく漫然と眺めていた。

序文を読むだけで頭痛に襲われる本なんて、俺もさすがに初めてだ。本気で燃やしてやりたいくらいだが、火事になっても困ると自らに言い聞かせる。

俺とて一応、魔術師の端くれではあるのだから。この部屋には魔術関係の歴史書や研究書も多い。火種には欠かないし、それなりの値段がした本を燃やすのももったいない。

仕方なく、俺は机の上に投げてあった煙草の箱を取り、その一本に火をつけた。

紫煙を肺に溜め込んで、息といっしょに大きく吐く。

「はあ……」

二度目の溜息。それと混ざって、気力までどんどん減っていくような気がした。

――それも、全て何もかもあの馬鹿姉貴が悪いのだが。俺の周りの厄介ごとは、実に八割までが姉貴の仕業だと信じている。最悪だ。

「……」

一本を吸い終え、その火を完全に揉み消した。煙草の始末は喫煙者が守るべき最低限の心得である。それができないなら吸うべきじゃない。

狭い下宿だ。板張りの壁は薄く、隣の部屋まで音を軽く通してしまう。床は踏むたびに

軋みを上げるし、扉からの隙間風も酷い。お世辞にもいい部屋とは言えなかった。

まあ学生の下宿なぞこんなものだろう。備えつけの粗末な寝台に向かい、投げてあった古い黒の外套を着込んでから、いそいそと部屋の外に出る。持ち物は煙草と燐寸、それと薄っぺらな財布だけ。

途中で洗面所に寄り鏡を確認する。少し灰色がかったぼさぼさの黒い乱髪に、死んだ魚みたいと評判な黒茶の瞳を持つ、見るからにうだつの上がらないダメ学生……それが自分だという事実に、なんとなく世界の厳しさを感じてしまう。

俺が下宿している部屋は、一軒の寂れた煙草屋の二階、その一階の階段すぐ前に位置している。店主の親父さんが、ほとんど道楽で開いている店らしく、この一年で客の姿を見た回数は数えるほどだ。裏通りという立地からしても、まともに稼ぐ気などないのだろう。

その割に部屋貸しの賃料で儲けようという気もないらしく、家賃はこれでお手頃価格。まあこんなほろ部屋で高い貸し賃など取れるわけもないだろうが、それにしたって格安だ。

俺の義姉と、この店の親父さんがどうも古くからの知り合いらしく、その伝手で部屋を貸してもらっているわけだ。狭く寂れたこの煙草屋を、俺はことのほか気に入っていた。

ひと回りどころか二回りは歳の離れた親父さんとも、今となっては気の置けない友人と言っていいくらいの関係が築けている。

階下へ降りると、親父さんが手持ち無沙汰に店番をしていた。薄さが目立ち始めた悲しい頭に、厳つくガラの悪い顔。この店が繁盛しない理由のひとつに、親父さんの外見が威圧的だという理由もあるのではないかと思えてしまう。

もっとも口は悪いが、話してみるとこれで案外、気のいいおっさんではあるのだが。街には知り合いも多いらしく、よく店を空けては、どこぞで飲み歩き回っている。

「――おう、アスタ。なんだ、おそらくは商品であろう煙草を平然と吸っていた親父さんが、顔を上げて俺に言った。

「あー。ちょっと学院に行ってくる」

「あん？　お前、今日は休みじゃなかったっけか」

本来ならそうだった。片眉を上げた親父さんに、肩を竦めて俺は答える。

「いろいろあって。ちょっと呼び出し食らってんだよね」

「はあ？　今度は何しやがった、オメー」

「普段から問題起こしてるみたいな言い方しないでほしいんだけど」

「そりゃ悪かったな。――で、何した？」

「話聞いてた？」

悪びれない親父さんに苦笑する。

※

まあ、なぜか嫌な気分にはならないのだが。これも人徳というのだろうか。
「でも実際、なんで呼び出されたんだか。本気で心当たりがないんだよね」
「なんだ、理由は聞いてねえのか」
「そうなんだよね。昨日、セルエからいきなり『明日、学院長室に来てー』って」
「なんでもいいけどな。早めに片つくようなら、店番代わってくれよ」
「手伝うほどやることなんだ、楽なモンだろ。その間は俺も出かけられるしな」
「なに、座ってりゃいいだろ、この店じゃ」
うわばみの親父さん。この街の酒場は全て庭とまで豪語する酒豪である。
まったく羨ましい人生を送っているものだ、などと未だ学生の俺は思うのだった。
「ま、酒もほどほどにねー。親父さん」
それだけ告げてから、煙草屋の玄関を外に出た。「うるせえよ」と笑う親父さんの言葉を背に聞いて、活気と喧噪に溢れた昼前の街へと繰り出していく。
空の模様は、いっそ腹立たしいくらいの快晴だった。

――オーステリア。

それがこの円形都市の名前であり、今の俺が住んでいる土地である。呼んで曰く、《魔術都市》ともあだ名されるくらいに。

王国内でも指折りの繁栄を誇るオーステリアは、特に魔術師というのも、この街は魔術に携わる者なら誰もが知る《二大施設》を有しているからだ。

そのひとつが、俺の通っている《オーステリア王立魔術学院》だ。休日にわざわざ家を空けたのも、その学院に用事があるからだった。

王国では最大規模の魔術師養成学校。国内の魔術研究における最高学府、その頂点。

魔術を座学と実践の両面から解剖しており、集まる学生は誰もが将来を嘱望された若きエリートたちである。要するに魔術の天才だけが入学できる学校だということ。当然、教師陣も高名な魔術研究者や、歴戦の魔術戦闘者が揃っている。

それ以上の環境は望めないだろう。

そんな歴史ある学院の末席へ自分が名を連ねているという事実に、俺は入学から一年が経った今も慣れていなかった。

魔術師。魔力というエネルギーを用い、術式によって様々な幻想を現実化させる存在。

その才能には先天的、遺伝的な資質が大きく関わるとされ、学生には貴族や名門魔術師

家系の出身者が多かった。もちろん全てではない。才能さえあれば誰にでも門戸を開くのがオーステリアという学院……なのだが、生まれという要素は魔術師にとって大きい。

基本的に、実力のある魔術師の子どもは、その才能を受け継いで生まれると言われていて、路傍の石にも等しいだろう。そこまでではなくとも、基本的に眼中にない。

そもそも入学の経緯から異例だ。それはあくまで例外だ。

俺は立場上、親なしということになっている。高貴な血筋の方々から見れば、俺なんて

ての在学生である義理の姉から紹介してもらう形で入学している。真っ当な入試ならば、俺は絶対に突破できなかっただろう。

まあ、かといって劣等感を抱くことはないし、逆に根拠のない優越感にも浸れない。

その程度の背景事情の違いで衝突するような奴は、そもそもオーステリアに入学できないからだ。魔術師の世界は、いっそ残酷なまでに平等を標榜する実力主義社会なのだから。

王族の肩書さえ通用しないというのだから面白い矛盾だろう。

貴族だろうが王族だろうが、そんな肩書は入学した瞬間に意味を失くす。王立だからこそ、

――ただ魔術師としての極みを目指すために。

この学院に入学する人間は皆、己が研鑽だけを目的としている。だからこそ、そんな目

的を持っていない俺は浮いてしまうわけだ。
妬みや嫉み、それに付随する派閥争いといったことがないわけじゃない。だが、それも社会的身分の高い人間が多く集まるがゆえの特徴、と言ってしまえばそれまで。
一応は、王国で最も優秀とされる学生が集う学院である。入学するときには年齢も十九になる年だし、子どもじみた諍いを繰り広げるよりは、少しでもそうとする人間のほうが圧倒的多数だった。賢い奴は繋がりを断つよりも、むしろ広げることのほうに労力を費やす。貴族的な確執とは、意外にも無縁な学院なのだった。
ともあれ、そんな学院があるからこそ、オーステリアは魔術師の街として有名になっていた。魔術学院はほかにもあるが、あらゆる意味でオーステリアはその頂点に立つ。
だがそれだけじゃない。この街にはもうひとつ、その知名度を上げる要因となるモノが存在している。
それが――《オーステリア迷宮》である。
この街は迷宮を有する、国内でも最大規模を誇る《冒険者》の都なのだ。

※

表門から学院の敷地に入り、まっすぐ正面のいちばん大きい校舎に向かう。目指す学院長室は、その一階に位置していた。

広い敷地を持つ学院の中でも、この本校舎が最も古く、そして美しいと言われている。その歴史は長く、一説には千年の昔まで遡るとさえ言われていた。まあ、それは与太話の類いとしても、実際この学院は外観からして荘厳だ。芸術なんてわからないが、それでも初めて見たときには、思わず息を止めてしまった。きっとこの校舎だけで、ひとつの美術品として通用することだろう。

長い廊下をひとりで歩く。静かだった。休日だけあって人影もまばら。特に学院長室のある本校舎一階付近には、基本的に学生が近づかない。時間が止まっているかのようだ。

なんて、そんなことを考えた瞬間に音が聞こえる。廊下の向かい側から、誰かが歩いてきたらしい。休日とはいえ、さすがに誰もいないということはなかったようだ。

初めは気にも留めなかった。だが考えてみれば、この付近にあるのは学院長室くらいだ。ならば挨拶くらいはしたほうがいいだろうか。そう思って顔を上げた。

その瞬間に――目が合った。

「――」

思わず息を呑む。言葉を失い、音が消え、時間そのものが凍りつく。

――人間じゃ、ない。

一瞬、本気でそう思った。

少女がいたというだけ。その完成された美しさたるや、逆に怖気さえ感じるほどだ。

透き通るような、白く美しい髪を持つ少女だった。

瞳は蒼。深く澄んだ双眸が、俺の瞳とぶつかって揺れる。最高級の宝石をそのまま嵌めた眼。それが俺を見据えた瞬間、露骨に動揺の気配に染まる。

――おや、と思った。なぜなら俺は、目の前の少女に見覚えがない。

学院にいる以上は学生だろう。見たところ同年代か少し下らいだろうし、まさか教師とは思えなかった。もちろん友人が少なく、顔を覚えていない限らない。ただでさえ俺は容貌ならば、さすがに忘れた相手なんて数えるほどだ。が、とはいえ、ここまで整ったつまり、まず間違いなく初対面。

にもかかわらず、少女は俺を見て明らかに狼狽した。俺を知っている反応だった。

「――なん、で……」

白い少女が言う。言ってしまってから気がついた、とでもいう風にすぐ口を噤むが、零

れた言葉は戻らない。

ちょうど学院長室の扉の前で、なぜか睨み合うことになる俺と見知らぬ学生。いったい何を驚かれているのか、俺にはさっぱりわからなかった。

彼女も彼女で、驚きを露わにしてしまったこと自体を恥じるように無表情を作る。無理に感情を押し殺したみたいな、仮面のような無表情だ。

「……えっと。そっちも学院長室に呼ばれてるのか？」

会話の起こらない時間が嫌で、ひとまず声をかけた。白い髪の少女は、蒼の瞳を透明にさせながら答える。なんらかの感情が、きっとまた殺されたのだろうと俺は思った。

「そう、だけど。ということは、そっちも？」

「そうなるね」

「……なんで？」

先程とはやや異なった響きの『なんで』。しかし、そう訊かれても困ってしまう。呼ばれた理由なんて俺も知らない。

首を傾け、視線を扉の側にやった。中に入ろう、という意思表示だ。

そのまま反応は待たずに扉をノック。「はい、どうぞ」という応答の声が聞こえてから、

「――失礼します」

中に入った。少女は、無言で後ろをついて来る。その視線が、明らかに俺の背中へと突き刺さっていることだけは、後ろを見なくてもわかっていた。非常に気まずい気分だ。

学院長室へ入ると、そこには思いのほか多くの顔が揃っていた。もちろん俺は誰が来るのかさえ知らされていなかったが、まあ、特に気にするまい。

中を見渡す。室内の人数は、俺と後ろの彼女を除いて五人。そのうちふたりは教員だから、学生として呼ばれたのは総計で五人になるようだ。もうひとりは、おそらく俺たちが最後だろう時間はぎりぎりだったから、

俺の顔を見たときの、それぞれの反応はまちまちだった。

素直に顔を綻ばせる者、驚きに目を見開く者、来るのが遅いと睨んでくる者、なぜだか愉快そうに口の端を上げる者、見透かすように微笑む者――。

その全てをひと通り眺めてから、俺は正面の机に座る、老齢の女性に声をかけた。

「おはようございます、学院長。アスタ・セイエルです」

「おはよう、アスタさん。よく来てくださいましたね」

朗らかに微笑む、白い頭の低い女性。彼女がこの部屋の、ひいてはこの学院自体の主であるガードナー学院長だ。現役の頃はやり手の魔術師だったと聞いているが、今では後進の育成を生涯最後の目的に掲げ、学院の長を引き受けている。

その事実がすでに彼女の実力を物語っているようなものだ。

街では最も高名な魔術師の家系だが、必ずしもオーステリアの学院長を務めるわけではなく、あくまで当人の実力だ。

い。この学院が見るのは名前ではなく、あくまで当人の実力だ。

「シャルロットさんも、おはようございます。申しわけありませんね、おふたりとも。急に呼び出してしまって」

物腰柔らかに告げる学院長へ、俺は首を横に振ることで応えた。と同時に、後ろの少女の名前を知る。……というか、名前だけなら知っていた。

単に、苗字が同じなのである。なるほど。向こうも俺を知っているわけだ。なんということもなかった。

「いえ」

白い髪の少女――シャルロットは端的に答える。そして、それきり無言に戻った。

「それで、学院長。これはいったい……？」

俺はさっそく本題に入る。呼び出されて来たはいいが、未だに用件がわからない。

てっきり説教でもされるのかと怯えていたのだが、面子を見る限り、どうやらそういう感じではないらしい。

というのも、並んでいる学生たちの顔が、同じ学年でも抜き出て優秀な学生のもので

揃っていたからだ。俺がシャルロットの名を知っていたのも、うに過ぎない。

「では全員揃いましたし、もう一度、説明から入りましょう。

「はい、学院長」

名を呼ばれ、学院長の傍らにいた女性が口を開く。

橙色に近い明るめの髪に灰色の瞳を持ち、その表情には優しげな女性教師。年齢は二十代中盤とまだまだ若いが、これでオースティリアの教員の中でさえ突出した実力を持つ魔術師なのだから、人は見かけによらないものだ。

セルエ＝マテノ。

この学院に勤務する魔術師のひとりで、俺にとっては以前からの友人である。義姉がこの学院に通っていた頃の後輩で、その関係からいろいろ世話になっていた。

セルエはこの場に集まった学生、五人全員の顔を見回すと、明るい笑みのまま告げる。

「……さて。ここにいる四名が、来月に行われる学院の魔術大会――《魔競祭》におけるシード権候補者、ということになりますー」

――俺を入れたら五人なんですけど？　などという突っ込みはしない。自分が含まれていないことくらいわかっている。

――セルエ先生」

それにしても、シード権、声をかけられた四人の学生に、動揺の色は見られなかった。れていたのだろう。俺を除いたこの四人は、要するに学年の成呼ばれたのはきっとそれがこの学院では、つまり最も有名な四人という意味でもあといっても実は四人のうちと二位で、後ろのシャルロッでは五番目に呼ばれた俺がともかく、実技における俺の成績は、決して褒められたものでは最下位だった。

――というか、ダントツの顔を知っているのはふたりだけ。そのふたりが学院の一位「ですが、まだ決定ではありません。学院の伝統として、シード権を得るためにはとある条件をクリアしてもらう必要があるんです。これは皆さんの先輩も含めての伝統ですから例外はありません。――魔競祭は、そうして続いてきましたからね」

セルエは続ける。しかし、確かに去年の魔競祭のトーナメントにシードのシステムはなかった気がする。ほとんどこの話も初耳だ。思い返してみれば、観ていなかったのだが。

ちなみに、この《魔競祭》という大会だが。これは学院で毎年行われている、学生同士

の魔術合戦をメインとした催しのことだ。スマートさの欠片もない脳筋丸出しの行事ながら、結果如何では将来の就職すら左右する辺り、意外と馬鹿にはできなかったりする。

なぜならば、基本的に排他主義的な学院において、例外的に外部の観覧が許された行事――言い換えれば、外の人間に実力を披露できる数少ないイベントであるからだ。

結局のところ、魔術師なんざ戦って強い奴が正義だということ。研究方面に専念するならばともかくとして、やはり魔術戦はいちばんわかりやすい実力の指標だ。

だからこそ、シード権というものの重要さが知れる。

一見、戦う回数が多いほうがアピールのチャンスが増える、と思えるだろう。だがそもそも魔術師は実力を外に出さないものだ。魔術師の戦いとは基本的に《初見殺し》の応酬であり、相手の手札を知っているのと知らないのでは、条件が大きく違ってくる。

ある者は高熱の火炎を操り、ある者は高速の魔弾を撃ち出す。普通の人間とは比べ物にならない攻撃力を持つのが魔術師という人種だが、その一方で防御力は意外に低い。

人間同士の決闘は、突き詰めれば先手必勝が原則だ。それは魔術師でも変わらない。

初見殺しの応酬と呼ばれるのはそれが理由だ。切り札を晒す機会が減ることの重要性を、わからない人間ならここには呼ばれまい。

「その条件というのが――オーステリア迷宮、その第十五層までの到達です」

あくまで笑みのセルエ。提示された条件は迷宮の突破。なるほど迷宮のあるオースティアで魔術の実力を測るのなら、これ以上に最適な基準もあるまい。

だがここで、初めて集められた面々の間にざわめきが巻き起こった。

それも当然だろう。

提示された条件は――はっきり言ってかなり厳しい。

「もちろん単独（ソロ）で挑（いど）めとは言いません。皆さんにはパーティを組んで、全員で第十五層までの踏破を目指してもらいます。期限は二週間。それまでに達成できなかった場合、今年はシード権なしということになりますね」

誰も答えない。セルエは返答を待たなかった。

「まあ、とはいえ別に参加できない、というわけではありませんから。実力だけで勝ち残る自信があるのなら、無理に挑戦（ちょうせん）する必要はありませんよ」

安い挑発（ちょうはつ）だ。いや、セルエにはそんなつもりさえないだろう。

だがそんなことを言われて引き下がるような奴が、この学院で上位に位置づけるはずがない。魔術師とは例外なく自我（じが）が強い連中であり、その傾向（けいこう）は実力者ほど顕著になる。

こうまで言われれば奮起するだろう。集められた四人の瞳は、それぞれに力強い輝（かがや）きを放っていた。

――そして、俺の場違い感もまた尋常ではなかった。

いや、なんで呼ばれたんだ、本当に。

「それでは、何か質問はありますか？」

全員（またしてもなぜか俺を含む）の顔を見回して、セルエは途端、すぐに手を挙げた学生がひとり――その男子学生を指名前を呼んだ。学生の積極性を喜んでいるみたいだ。

「はい、ウェリウス＝ギルヴァージルくん！」

呼ばれたのは、金色の髪に碧い瞳を持つ、驚くほど整った容ットの人間離れした美しさとは違う、強烈な魅力を纏った容貌の青年だった。シャルロだろう。さぞやおモテになることだろう。

顔も名前も知っていた。特に親しいわけじゃない、というかたが。それでもこの学院に、彼を知らない学生はいないだろう

なぜなら《ギルヴァージル家》といえば、国内でも有数の大社会は実力主義であり、だからこそ強い血統は権力を持つ。

そのひとつが彼の生家だ。ギルヴァージル家は古くから優秀いる家系だ。ただのひとりも例外なく、歴史に名を残す魔術師ばかりが名を連ねる血統書

つきの名門貴族――ウェリウスはその出身だった。

実際、前年度の総合順位では確か二位だったと記憶しているというところに、オーステリア学院の層の厚さが表れていると言えるだろう。

「――そのパーティとは、ここにいる四人で組まなければならないのでしょうか？」

ウェリウスが問うた。セルエは小首を傾げ、

「不満ですか？」

「まさか。むしろ、彼をして二位だと思います。こういう機会でもなければ、僕たちが組む機会なんてなかったでしょうから。僕が訊きたいのは、ここからさらに人数を増やすことも許されるのか、ということです」

「大丈夫ですよ。人数はいくら増やしても構いません。もちろん、ここにいるみんなとは組まない、というのも選択肢のひとつです」

同じパーティで迷宮に挑む以上、自身の手札は晒す必要がある。そうでなければ、危険な迷宮に潜ることなど不可能だ。

しかし一方、それは魔競祭の本番におけるマイナスに繋がってしまう。余程の実力差がない限り、手札の読まれた魔術師など脆いものだ。

要するに、その線引きも自分で考えろということだろう。魔術学院らしい。

「ただしひとつだけ。パーティに入れていいのは、あくまで《この学院に通う》《二回生の魔術師》だけです。本職の冒険者を雇ったりなどはしないように。この試験は、あくまで君たちの実力を証明するためのものなのですから」

「わかりました。ありがとうございます」

「ええ。それと、念のために付け加えておきますと、人数を増やせばその分、候補者も増えるということは理解しておいてください。いくら増やしてもいいですが、枠はあくまで四つだけです」

セルエは言う。加えて言えばオーステリア迷宮程度の規模の迷宮で、あまり人数を増やしすぎるのは逆によろしくない。《迷宮》というだけあって、狭い通路が入り組んだ構造をしているからだ。そんなところに大勢の人間が集まっては、魔術を満足に使えなくなってしまう。

「心得ておきます」

ウェリウスは優雅に腰を折って答えた。

動作のいちいちが気障な奴だ。これで様になっているのだから、さすがに大貴族様なのだろう。嵌まりすぎてて、嫌味だとさえ思えない。

「ほかに質問はありますか？」

重ねて確認したセルエに、ウェリウスはもう一、二の質問を投げた。

あるいは四人を代表し、全員で情報を共有するため、あえて訊ねているのかもしれない。

それくらいのことは普通にしそうだ。整ったそのかんばせに、常に笑みだけを張りつかせたウェリウス。勝手ながら、なんだかよからぬことを企んでいるように見えてしまう。

やがて質疑応答が終わると、それが本命の問いだったのかもしれない。彼はウェリウスは「では最後に」と加えた。

ともすると、それが本命の問いだったのかもしれない。彼はウェリウスは「では最後に」と言った。

「――どうしてこの場に、アスタ＝セイエルが呼ばれているのでしょうか？」

飛び出したのは、俺の名前だった。代わりに訊いてくれたのかな。

なんて無邪気な善意を信じるのは難しかった。ウェリウスの口調に、わずかな棘を感じたからだ。

家柄も実力も申し分なく――つまりプライドの高い男なのだろう。俺のような成績下位者が集まりに呼ばれていることそれ自体、我慢ならないのかもしれない。

ただその割に、彼がこちらへ向けてくる視線には、どこか好奇にも似た色が含まれているような気がする。いったい何を考えているのか。その本心はどこにあるのか……。

別に、俺だって好き好んで来たわけじゃない。帰れるものなら今すぐにだって帰りたい。

もちろん、それが許されないことには、この時点ですでに気づいていた。
というか、この部屋に入って、彼女の顔を見た瞬間にはもう。
俺は、全てを諦めていた。

「――それは私が呼んだからです、ギルヴァージルくん。話をいて、まず真っ先に誘うべき人間は彼だと判断しました」

凛とした声が高らかに響く。堂々とした口調の、堂々とした人間だった。ただその場にいるだけで、見る者を強く畏怖させんばかりの威圧感に、それは選ばれた人間のみが纏い得る高潔さを併せ持っている。そして美しい、亜麻色の髪が特徴的な女だった。それは違うという事実を知らしめるほどの存在感。言葉を尽くしてろ彼女の絶対性を損なってしまう暴挙だろう。

理知的な朱い瞳は、けれど剣呑で意志の強そうな輝きを帯びている。まるで焔だ。貴族のお嬢様然とした外見に反する、強い野心と好奇心が発露された煌々たる輝き。

――レヴィ＝ガードナー。

学院長の孫娘に当たる、当世きっての天才魔術師。

座学、実技の両面で、入学以来一度たりとも総合一位を落としたことがない――同年代においても圧倒的に図抜けた実力を持つ学生。それが彼女だったでさえなければ、すでに職業魔術師として一線で活動していてもおかしくない。天才と呼ばれる人間だけが集まったこの学院の中でさえ、さらに一段上の天才。

「ガードナーさん、君が……？」

いや、あるいは現役の魔術師と比較してさえ、彼女の実力は突出している。学院長の孫だからだろう。レヴィという誰もが認める天才が、俺のような、まあ控え目に表現して劣等生を迷宮攻略に誘ったと聞いて、ウェリウスは怪訝な表情を隠さなかった。

「ええ。何か問題でも？」

「問題がないとは言えないだろう？　君は、僕たちとは組まないというようなことを、ギルヴァージルくん。私自身、この機会をとても貴重に思っているのですから」

「そんなことはありませんよ」

「ならどうして。こう言ってはなんだが、彼の実技の成績は学年最下位じゃないか」

ほう、よく知っている。そう思ったが黙っていた。

俺から何を言わずとも、レヴィが勝手に答えるだろう。

「そう言われると思ったから、わざわざこの場に呼んでいただけるよう取り計らったのです」

レヴィはそう、自信に満ちた表情で微笑んだ。俺からすれば、抜け抜けと適当なことをまあよくも、という感じなのだが。彼女は猫を被っている。だが、それを指摘できる人間が、どうやらこの場にはいない様子だった。

――いっしょに迷宮へ行け、と言われるだろうことはわかっていた。普通気づく。しかし、それに俺が肯ずるかは別の問題であるはずだ。

彼女さえ――レヴィ＝ガードナーさえ絡まなければ、俺は断ることができただろう。だが彼女に呼ばれたのならば、俺はこの話を請けざるを得ない。

――そういう契約を、俺たちは交わしているのだから。

まあ、そもそもこのお嬢様が本気になった時点で、俺の退路は断たれてしまったようなものだったが。その気になれば、あの手この手で俺が関わるように仕向けてくるだろう、この女は。今のうちに諦めてしまうのが最上策だ。

やってくれたぜ、と思う。俺にメリットがひとつもない。が、こうして策もなく、のこのこ来てしまった時点で俺の負けだ。レヴィと俺の関係は、だいたいそういうものだった。

「彼の魔術師としての実力は、確かにお世辞にも高いとは言えません。ですが、こと迷宮

攻略に限って言えば違う。――私はこの学院に、アスタ＝セイエル以上の迷宮魔術師がいるとは思いません」

レヴィは言う。持ち上げられたものだが、その信頼を、俺は伝わっていることだろう。

と彼女にだって、俺の考えは伝わっていることだろう。

そして確実に笑っている。なんだかやけに背筋が痒い。

「彼にそれだけの能力があると？　言ってはなんだけど、実力さえ不幸じゃないのかな？」

て、連れられる側にとって

「もちろん、理解していま

「……なるほど。それをど

「もちろん迷宮で、と言い

以外の保証をつけます」

「保証……？」

「アスタ＝セイエルを推薦

よね、セルエ先生」

水を向けられ、セルエは

そうか、セルエもグルか

したのは、何も私だけではないということです。――そうです。……マジかよ。

小さく頷いた。

「ええ。私も迷ったんですが、本当は、アスタ……くんを入れること自体を反則扱いにしてしまいたいくらいだったので」

「……ずいぶんと言い切るものですね」本当だよ。「なぜそこまで？」訊ねるウェリウス。当然の疑問だ。俺は今、少なくとも迷宮攻略に関してならば、学生で最も上だと言われたに等しいのだから。

その答えを、セルエが言うのだ。言ってしまう。

「――アスタはもともと本職ですから」

まあ彼女は言うだろう。そして、アスタ以上の学生はいないでしょう。彼を入れたら間違いなく貴方たちは第十五層まで到達します。私にはその確信があります。ですが、彼もこの学院の二年生であることに違和感を覚えた。

――ふと、俺はその言葉に何かおかしい。だが、それが確信に変わるまで届かない。

「まあ、アスタの実力は私が保証しますから。安心してください」

セルエは笑みで言葉を切った。教師にこうまで言われてしまえば、ウェリウスもこれ以上の反論はできないだろう。どちらかと言えば反論してほしかったけれど。

しかしまあ、とんでもない状態なのか、知らないふたりじゃないだろうに。

実際、自分で言うのもなんだが、俺は迷宮でならそこそこ役に立つ。が、きっと同じくらい足も引っ張ることだろう。その自信も持っている。差し引き若干マイナスくらいか。

「保証も頂きましたので」

レヴィは笑う。優雅に、瀟洒に、高貴に。

だが、その笑みの意味するところが「してやったり」の感情であることを、この場では知っているとはいえ。俺を呼ぶにしたって、ほかにいくらでもやはり、俺だけが理解していた。よし。この女には、あとで食事でも奢らせよう。

正直言って、レヴィがここまで強引な手に訴えるとは思っていなかった。セルエにまで言わせるのは完全に予想外だった。彼女に言われては、世話になっている俺が断れないことを認めてもらっても構いませんよね？」

「彼のパーティへの加入を、レヴィの言葉は勝利宣言に等しかった。教師にお墨付きまでもらっておいて、断れる人間などこの場にはいないだろう方法があったと思う。

俺の加入が、決定したということでもある。

――ところで。
なぜ誰ひとりとして、俺の意見は訊こうとしないんだ。

※

話し合いが終わり、時間も少し過ぎて夕方。
俺はひとり、学院通りの近くに位置する大衆酒場を訪れていた。
レヴィと待ち合わせているからだ。
無論、何か甘い意味のある逢瀬ではない。これは単に、俺が彼女に文句を言うためだけの場として成立している。やってくれたな、と。そんな負け惜しみを告げるために。
もっとも誘ってきたのは彼女のほうからだった。悪いとは思っているのかもしれない。
俺が何かを言う前に、自分から食事を奢ると申し出てきた。
言い換えれば、何か話があるということ。
店に入ったとき、レヴィはすでに端の席で待っていた。その対面に腰かけて、俺は彼女を睨みつける。
「まったく。とんでもないことしてくれたな、レヴィ」

「仕方ないでしょ。私は絶対、次の大会で優勝するつもりなんだから」
被っていた猫を脱いだレヴィは、普段の優等生面からは想像もできないような別人に変わる。
礼儀正しい完璧な少女から、口と性格の悪い強気な女に。
「私が学院を成績一位で卒業する――そのためにできる全ての手伝いをするのが、あんたと結んだ契約でしょう？」
「まあ、それはその通りだけどな」
学院に所属している間は、可能な限りの手助けをレヴィに対して行う。
それが、俺とレヴィの契約。形のない口約束。それでも意味は持っている。そして問題なのは、果たして《できる限り》とはどこまでの範囲を指すのかという点だ。
「別に手伝う分には構わないんだよ。俺が訊きたいのは、どうしてここまで強引な手段に出たのかってことだ」
「――それはごめん」こちらをまっすぐ見据えて、レヴィは頭を下げる。「でも、必要なことだと思ったから」
謝るときですら、彼女は相手をまっすぐ見る。レヴィは恥じないし、後悔もしない。いっそ謝罪させた俺のほうが、ばつの悪い気分にさせられてしまう。

「よせ、謝るな。確かに契約の範疇だからな、負けたほうが悪い」
「……こうでもしないと、あんた絶対逃げると思ったから」
「いや別に逃げねえけど」
「逃げるでしょ」
「……」逃げるだろう。
好き好んで迷宮に入りたいなどとは微塵も思わない。
「それはともかくだ」話を誤魔化し、俺はテーブルに肘をついた。「お前なら、実力で十五層くらい突破できるだろ。別に俺なんかいなくたって」
先程は厳しい条件だと思った。だが、それはレヴィを除いた話だ。
彼女なら、なんならひとりだったとしても、オーステリア迷宮如き鼻歌まじりに突破することだろう。レヴィの実力は、学生という言葉の範疇に留まらない。
「迷宮では何が起こるかわからない。って言ったの、あんただったと思うけど」レヴィは苦笑しながら言った。「ならば、少なくともいちばん信頼できる魔術師を引き入れておくに、越したことはないでしょう」
「へえ。お前が俺を信頼してたとは意外だね」
「ヒトとして……じゃなくて魔術師としてはともかく、冒険者としてあんた以上を学院で

探すのは不可能よ。褒めてんだから、少しは素直に受け取った
「それで褒めてるつもりなら、まずは俺じゃなくて自分の人格を疑うんだな」
「あら。学院きっての優等生の人格を疑うなんて、アスタこそいね？　もう少し他人を信用できないと信じてたら？」
「してるさ。少なくともお前は、絶対に信用できないと信じてしいわ」
「そう。期待に応えられて嬉しいわ――地獄に落ちろ」
「ああ、そうかい。よくわかったよ――お前が落ちろ」
「ええ、わかってもらえて嬉しいわ――お前が落ちろ」
悪しざまに罵倒し合う俺たちだった。それも満面の笑みを作って。
隣の席で飲んでいた冒険者風の男たちが、ぎょっとした表情でこちらを見る。なんだか驚かせてしまったらしい。……そりゃそうか。
俺たちは特に反応をしないだろうと言えた。
まあ、これでおおむね普段通りだと言えた。
レヴィとの付き合いは、俺にとって《よくわからないもの》というのが本心だ。
男女の仲ではない。繰り返して言うが、そんな甘い関係で俺たちは決して繋がっていないだろうし、こちらとしても願い下げだ。
誰も俺が釣り合うとは思わない。

だが、ならば友人なのかと問われれば、そういうのとも少し違うと思う。ただの同級生ではない。知り合い程度というほどに薄くもない。もちろん魔術師として同じ志を抱いているわけでもなかった。相性としては、およそ最悪の部類だろう。言うなれば――そう、共犯者。

その表現が、今のところいちばんしっくりくるように思う。

「――ま、今日は私の奢りってことで。好きなだけ飲んでいいから」

レヴィの言葉に、「そうさせてもらおう」と遠慮なく答え、迷宮区に近く、よって冒険者たちの御用達であるこの酒場に客がよく集まった。さすがに騒ぎが起きるほど馬鹿な真似にがいいとは言えない場所だ。魔術師とは、その言葉のイメージほど賢い連中じゃない。

そんなところで、特に気にするでもなく酒を頼む学生ふたり。傍から見れば、なんだかお寒い組み合わせだろう。貴族の姫君と、お付きの下男とでも思われているのだろうか。

あるいはレヴィひとりなら、無謀にも声をかける男の数人はあったかもしれない。

その場合、どんな結末になるかといえば――まあ、推して知るべしと言ったところだ。

俺は持ち歩いていた煙草を外套から取り出し、火をつけて一服する。親父さんの店から貰ったもので、なかなか気に入っている銘柄だ。星の名を冠しているところもいい。

「……しかし迷宮ね。入るのは、かなり久し振りになるな」
吸わない相手の前では、基本的に喫煙しない主義の俺なのだ。
の前の女だった。こいつを相手に遠慮とかあり得ない。
そもそも周りの人間が、平気で喫煙しまくっている。こんな
肺に溜め込んだ煙を吐き出す。
浮かびゆく紫煙。それを言葉で追うように、言った。
「――んで、なんのつもりだよ？」
問いに、レヴィは薄く笑った。
「ま、そう訊くわよね」
「当たり前だろ。どれだけの付き合いだと思ってる」
「一年もないくらいでしょ」
「密度の話だ。いいから答えろ」
かつて、俺は冒険者として迷宮で生きていた。それ以外に生
それなりの実力はあったと思う。昨日名前を覚えた相手が、
世界で生き抜いてきたことを誇ることまではできずとも、運
けれど、今の俺はただの学生だ。冒険者は廃業してしまって
いる。

――ある問題を抱えた俺は、以前までの実力をほとんど失ってしまったからだ。

まあ大規模な魔術はほとんど使えなくなった俺でも、迷宮ではならばそこそこ役に立つだろう。アスタ＝セイエルは迷宮に特化した魔術師であり、より正確にいえば生存に特化した魔術師だったのだから。少なくともその面きっての戦いは不得手でも、図太い生命力、生き汚さには自信があった。

とはいえレヴィが、こうまでして俺を巻き込んでくる理由はわからない。

迷宮は魔窟だ。常に命の危険と隣り合わせになる。魔力への抵抗を持たない一般人ならば近づくだけで心身を侵され、そうでなくとも凶悪な魔物や物騒な罠が腐るほど存在する。

オーステリア迷宮自体は、そこまで危険度の高い部類ではないが。ましてその十五層までなら、レヴィが死ぬようなことなどあり得ないと言い切っていいだろう。彼女はそれくらいに強い魔術師だ。プライドも持っている。

だが俺を巻き込んだということは、言い換えれば俺を頼ったとも言えるのだから。挑戦する前から他人をアテにするなんて、そんな選択はレヴィらしくない。

「……あれか。ほかの三人が使えないとかか？」

問いに、レヴィは首を横へ振った。

「だったら初めから組まないし。私たちの学年がなんて呼ばれてるのか、知らないわけじゃ

ないでしょう？」

「百年に一度の当たり年――だっけか。レヴィにそう言わせるほどとはね」

「みんな充分、戦力になる。普通に考えれば、あんたよりもね」

「その比較は言う必要あった？」

「別に馬鹿にして言ったわけじゃないから。あんた、ぜんぜん普通じゃないでしょ」

「……あっそ」いまいち褒められている気がしない。「なら、なんで？」

「――勘」レヴィは断言し、それから苦笑した。「って言ったら、マジで勘なの？」

「今さら怒らねえけど……何、のよね……」

「なんとなく、嫌な予感がする」

真面目な顔で勘だと断言するレヴィだが、その時点で俺は疑うことをやめていた。

「なるほど。なら、信用する」

「……え、何いきなり。どうしたの？」

「俺はこれで、お前の勘のよさは信じてるんだよ」

レヴィは不愉快そうに顔をしかめた。だが俺に皮肉のつもりはないし、彼女もそれはわかっているだろう。

実際、彼女の勘は馬鹿にならない。統計的に当たりやすい、などという領域ではないの

だ。彼女の勘にはきっちりとした根拠がある。ただ、それを理屈では説明できないだけ。

一種の能力といってもいいかもしれない。この世界には、魔術という不可思議でさえ説明のつかない異常を持つ人間が確かに存在するのだから。理屈によらない直観力。ともすれば俺は、レヴィ自身よりも彼女の勘を信じていた。

「お前はガードナーだからな、この街のことなら、何かを感じることもあるか。それで、迷宮の攻略自体を取り止めるわけにはいかないのか？」

「それは無理ね。嫌な予感がするから諦めます、だなんて、レヴィ＝ガードナーに許される選択肢じゃないもの」

「あ、そ。優等生は大変なこって」

「混ぜ返さないで。わかってんでしょ、あんただって」

「……」俺は答えなかった。

彼女がそう言うのなら、俺から文句などひとつもない。

元より、そういう契約だ。

「そういうあんたこそ、いいのこのままで」

レヴィが言う。一瞬、なんのことかわからず首を傾げた俺に、

「――また《冒険者》に復帰するつもりはないのか、ってこと」

レヴィの言葉に一瞬、口を閉ざす。
そうか。……本命はむしろ、そっちだったのか。俺はようき込んだ理由に気がついた。
なんのことはない。迷宮に入ることをやめた俺を、再び引節介だということ。それが余計だとわかっているからこそ、……いや。そういう意味では、やはりそれも本命ではない。
つけだとしても、彼女は何も言わないのだ。対に善意だけで動いたりしない。
煙草の火を揉み消して、なんでもないことのように俺は言う。
「当分はな。――あいつら、そういう風に信頼している。以外とで、迷宮に挑む気は今のところない」
「……余計なお世話、だったかな」レヴィは視線を下げる。
「あんたほどの魔術師が、こんなところで腐ってるのを見るの、あんまり気分はよくないから。ついね」
「……かもね」
そう言われて、レヴィを責めることなどできない。俺はわざとらしく冗談めかして、
「やけに持ち上げるな、誰もいないところで。もう酔ったのか？」
苦い笑みを見せるレヴィ。どうにもやりづらい。
「そんな顔するなよ。いいんだって別に。つか、そもそもオーステリア程度の迷宮に潜る

ことを、俺は《挑む》とは呼ばない」

「オーステリア程度って……並の冒険者なら、熟練者でも十五層は命懸けでしょ？」

「ふっ。この俺を、並の冒険者と一緒にしないでもらいたいものだね」

「あっそ。なら《挑む》じゃなくて、なんて表現するわけ？」

「《こなす》」

真顔で言い切った俺に、レヴィは口元を押さえて苦笑する。

「私も他人のことは言えないけどさ。——あんたも充分、自信家よね」

まったくだ、と俺も笑った。もっとも並ではないとはつまり、並未満だという意味だ。

おおむね話が終わり、それからは食事に移った。

運ばれてきた杯を持ち、互いに「乾杯」と軽く合わせる。景気づけというより、いっそ自棄酒という気分だ。俺は杯を一気に空ける。

レヴィはわずかに苦笑すると、何も言わずに俺に続いた。

この程度の酒精で呑まれる俺たちではない。酒も飲めない魔術師なぞ云々——という格言があるくらいで、魔術師はなぜか全般的に酒に強かった。もちろん例外はいて、どうも魔力が関係しているらしいが。その辺りは詳しくないらしいが。その辺りは詳しくない。

ともあれ、そんなわけで、
までのものがある。迷宮があ
しか街のできあがりだ。オー
荒くれ者の冒険者たち。そ
――彼女が考えていること
全て明かしたわけではない。
けれどおそらく、俺が考え
周囲の騒ぎは耳に喧しい。
んて、どうせパターンは決ま
その頭の悪さが心地いい。
俺はもともと、そちら側の
たまに真面目を気取るとき
迷宮における魔物の数の増減
のが、冒険者という生き物の
今も耳を少し澄ませば、そ

魔術都市オーステリアの夜ともな
れば魔術師が集まり、魔術師が集
ステリアも、本を正せばそんな街
の喧騒を背景に、俺たちは無言で
なんて、きっと俺にはわからない
隠していることがたくさんある。
ていることは、彼女に筒抜けなの
けれど、決して嫌いな雰囲気では
っている。酒か、煙草か、女の話
住人だったのだから。
は、このところ名を上げてきた冒
なんかを語ってみたりする。雑談
流儀だった。
れなりの情報が入ってくる。

魔術都市オーステリアの夜ともなれば酒場の喧騒も凄まじい。迷宮があれば魔術師が集まり、魔術師が集まれば酒場ができる。いつしか街のできあがりだ。オーステリアも、本を正せばそんな街荒くれ者の冒険者たち。その喧騒を背景に、俺たちは無言で酒を進めた。

――彼女が考えていることなんて、きっと俺にはわからない。全て明かしたわけではない。たぶんレヴィも、本心を隠していることがたくさんある。

けれどおそらく、俺が考えていることは、彼女に筒抜けなのだろうと思った。

周囲の騒ぎは耳に喧しい。けれど、決して嫌いな雰囲気ではなかった。冒険者の話題なんて、どうせパターンは決まっている。酒か、煙草か、女の話か。

その頭の悪さが心地いい。

俺はもともと、そちら側の住人だったのだから。

たまに真面目を気取るときは、このところ名を上げてきた冒険者集団の名前や、近場の迷宮における魔物の数の増減なんかを語ってみたりする。雑談のが、冒険者という生き物の流儀だった。

今も耳を少し澄ませば、それなりの情報が入ってくる。

「知ってっか？　今度《銀色鼠（シルバーラット）》の奴らが、東の《タラス迷宮》の踏破（とうは）に挑戦するらしいぜ」「ああ、あいつら最近ノッてるよなあ……いいなあ、俺も入れてほしいもんだぜ」「お前は若いのに交じりてえだけだろ」「ばれたか」「つーか無理だと思うぜ？　奴ら、本隊のパーティは七人で固定してるらしいからな」「うわ、出たよ。最近多いよな、《七星旅団（セブンスターズ）》を真似る奴ら」「どうかね。奴らはむしろ超（こ）えるつもりらしいぜ？」「自分たちにできないはずがない』とか。そんなこと言ってたって噂（うわさ）があらぁ」「そらまた。あのクランの頭（かしら）って誰だっけか」「シルヴィアだろ。確か南方で騎士団長（しだんちょう）やってた女だ」「へえ。騎士様が一転して冒険者ねえ……何考えてんだか」「さあな。それこそ七星への対抗（たいこう）心（しん）とかじゃねえの。気の強そうな女だったしな」「なんだ、見たことあんのか。美人だったか？」「かなりな。でも俺ァ、ああいう気の強そうな女はあんまな……」「いやー、俺はむしろ、そういう気の強い女のほうがそそるけどな」「はっ、それでカミさんの尻（しり）に敷（し）かれてたら世話ねえぜ！」「いや、それは言うんじゃねえよ……」

――七星旅団（セブンスターズ）。伝説となった魔術師クラン。最強の冒険者チーム。

解散から時間を経（へ）た今も、冒険者たちはその名を自然と話題の俎上（そじょう）に乗せる。彼らもまた、夢を追う人間たちだから。その先に輝く星の名を、憧（あこが）れとともに口にする――。

そんな風に表現したのは、確か目の前の女だったか。彼らの下品な会話を漫然と聞き流していると、そのレヴィがふと口を開いた。

「……その古い外套、まだ着てるんだ？」

「貰い物なんだよ」確かに、仮にも女性と出かけるときの服装ではないだろうが。「それなりに愛着も湧いたから。捨てるに捨てられん」

「……女？」

「詮索すんじゃねえよ」話題を変える。「……で？　いつから潜るつもりでいる？」

さして興味もなかったのか、彼女もあっさりと答えた。

「もちろん、明日からでも、すぐに」

「了解。ほかの連中との調整は任せるぞ、さすがに繋がりないし」

「あんた、友達いないもんね……」

「放っとけ。初日の目標は？」

「とりあえずは五層かな。可能ならもう少し潜りたいけど」

「とりあえずで潜る層じゃねえぞ……まあいいけど。ほかの連中の腕にもよるが、連携の把握はどうする？　正直、十層までは行きたくないんだが」

「慎重ね」

「賢明と言え。むしろお前の自信が意外だよ」
「……どういうこと？」
「お前ならむしろ、ひとりで行くほうが簡単なくらいじゃねえレヴィは強い。この酒場にいる冒険者の中で、レヴィに勝てるくらいだ。もはや異常と言えるほどに、レヴィ＝ガードナーは、強い。
それでも、完成を超えた逸脱者には届かないにせよ。レヴィ魔術は結局、才能が全てを左右する。努力を、年月を、いくら重ねても凡人は天才に届かない。だから彼女の基準を、ほかの三人にまで適用できるとは思えなかった。
「ああ……なるほど。でもそれは大丈夫――あの三人、全員かなり強いから」
「……まあ、お前が言うなら信じるけど。そうだな、なら七日以内には終わらせよう」
「あれ。もしかして意外とやる気だったり？」
「言ってろ。俺だって忙しいんだよ、長々と時間かけてられないってだけだ」
鼻を鳴らして告げた俺に、レヴィは薄く、けれど美しく微笑した。
「――ん。期待してるわ、アスタ」

その笑みが珍しく、彼女本来の、作り物でない笑みだと知っているから。

俺は小さく頷いてから、彼女にこう答えるのだった。

「ああ。俺も期待してるよ」

「なんの話よ」

「とりあえずは――今日の払い返って、近くを通る店員に声をかけた。

それから答えも待たずに振り入るが――遅い。

察したレヴィが慌てて止め――この店でいちばん高い料理っ――」

「ちょっ、アスタまさか！」

「すみませーん！　店員さん、と。今日のところは、安酒に酔わせてもらうとする。

「調子に乗るなっ！」

乗らずに飲まずにいられるかと日会った三人のことを思い出

そんな、他愛もないやり取りを繰り広げる傍らで、俺は今

していた。

――己の意志を為せ。

それが魔術の根本理念。自分の意志を曲げるな。勝ち取れ。我を通せ。

魔術というのは、根本的にそういうものだ。自らの願望を具現化するための手段。魔術

を極めるということはあらゆる不可能を可能に変えるということ。つまりは全能。

魔術師の最終目標とは――神の領域に足を踏み入れることだった。

腕のある魔術師ほど、この根本理念に忠実だ。逆を言えば劣らないくらいの個性を持っているということだろう。今日だっても劣らないくらいの個性を持っていることだろう。今日だって……なんだか、厄介な事態に陥るような気がしてしまう。

俺の勘は、もちろんレヴィほどには当たらない。とはいえ人当たるものだ。こういうときだけは、俺の勘も的中する。

実際、事件は翌日すぐさま起きた。

※

明くる朝。俺は早くからレヴィに呼び出され、学院まで出向いてっきり迷宮の入り口辺りで待ち合わせるものと思っていたらしい。レヴィのことだ、きっと何かしらの考えはあると思うが……さて。

いずれにせよ、俺は役目を果たすだけだ。

何も考えずに登校した。

昨日の酒はもう抜けている。

待ち合わせの場所は、学院において《試術場》と呼ばれている区画だ。

術を試す、などと言えばいいが、実際には血の気の多い魔術師の卵が、どんぱち模擬戦を繰り広げる学院きっての危険地帯でもある。区画を区切る結界魔術のお陰で外部に影響が出ることはないのことはざらだ。

普段は当然、魔術の実践講義や試験などを行う場所として使われている。ただ申請さえすれば、こうして学生が借りることもできるわけだ。無暗に広い敷地の、およそ半分も、その内情は理解してもらえるだろう。

近くが試術場であることから、おそらく言うまでもないだろう。

いくつかに区切られた試術場のうち、待ち合わせの一画に着く。

早めに来たつもりだが、すでにふたり待っていた。

そのうちの片方が誰なのかは、おそらく言うまでもないだろう。

「――おはよう、アスタ。体調は平気？」

亜麻色の髪の若き女傑――レヴィ＝ガードナーが笑いながら首を傾けた。昨日の飲酒の影響など、まるで感じさせない振る舞いだ。

「おはよう、レヴィ。そうだな、気分以外は、おおむね好調ってところだ」

「つまり普段通りってことね。ん、なら問題なし」
「俺の話聞いてた？　お前の体調が心配になってくるけど」
「そうね。あんたに心配されるようじゃ、確かに不安にもなってくるわ」
朝も早くから皮肉の応酬を繰り広げる俺とレヴィ。
猫はさっそく脱ぎ捨てたらしい。隣に立っている少女が、ぽかんとした表情で俺たちのやり取りを見ていた。
意外、ではないのだろう。素顔を見せるということは、それなりに仲がいいということだが、お互い成績上位者として有名人だ。関わりがないほうが不自然だろう。
「昨日、顔は合わせてるけど」レヴィが言う。「念のため紹介しておくわね。こいつがアスタ＝セイエル。……ま、知らないってことはないでしょ」
レヴィの横にいた少女が、声を向けられ慌てて頭を下げた。
「は、はい。もちろん知ってます。えっと――初めまして、でいいですか？」
薄い栗色に近いセミショートの髪と、くりくりと丸い茶色の瞳が印象的な少女だ。かなり小さな体格で、知らなければ同級生とは気づかないかもしれない。
なんというか、小さな仔リスを彷彿させる少女だった。妙に庇護欲を掻き立てられるというか、意味もなく守ってあげたくなるというか。

いずれにせよ、魔術学院に
「話すのは初めてだし、まあ
セイエルです。以後よろしく
「は、はい！　よろしくお願
ぺこぺことお辞儀を繰り返す少女。
どこか小動物然とした態度で、ちらちらこちらを窺いながら
「――わ、わたしはピトス＝ウォーターハウスでしゅっ」
……思いっ切り噛んどる。
俺は気づいた。レヴィも気づいただろう。ふたり揃って、な
目の前で、ピトスが「はうわっ!?」となんだかあたふたして
と大丈夫なのだろうか、こいつは。
助け船を出すように、レヴィが苦笑しながら補足した。
「ま、アスタはともかく、ピトスの紹介はいらないかな。学年三位で、私のともだち……
そう、気の弱い子だけど、これで優秀な魔術師だから。迷宮で心配はいらない」

いんじゃないかな。どうもご紹介に与りました、アスタ＝
ございますっ！」
言った。

気の弱い子だけど、の前にが、突っ込むより先にピトスが言う。
「えっと……はい、すみません。ピトスといいます。儀式魔術科の二年で、主に補助系の魔術と、あとは治癒魔術の勉強をしています」
「……へえ」
落ち着きを取り戻したピトスの言葉に、俺は少しだけ驚いた。
――なにせ治癒魔術だ。なるほど、レヴィが信頼を見せるだけはある。
その練度は別として、基本的にはどの魔術も学ぼうとすれば習得できる。実際にはそう論上はそうだ。少なくとも、魔力さえ生まれ持っていれば。
そう上手くもいかないが、理だが基本には当然、例外もあるわけで。《治癒魔術》がそのひとつだった。
完全に才能に依存した能力で、生まれつき使えない人間では、たとえ一生修練しても絶対に使えないという特殊な魔術。その上で、才能だけでは絶対に使いこなすことができず、小さな切り傷を治す魔術でさえ数年の訓練と勉強がなければ習得できないという。
そんな超高難度魔術を学んでいる学生が、この学院にいるとは知らなかった。治癒魔術の一芸だけでも学院に入るには充分だが、それだけでは上位にまで上りつめられまい。
当然、それ以外の分野に関しても才能があったのだろう。
レヴィの友人というだけあって、確かに実力ある魔術師らしい。

「まあ、ともあれよろしく」
学年二位の有名人。とはいえ名前は割とうろ覚えだったのだが、言う必要はないだろう。
俺は手を差し出すに留めておく。
彼女は一瞬、きょとんとした表情で俺の手をまじまじと眺めていた。だがすぐに破顔すると、
「どうぞよろしくです、セイエルさんっ！」
「アスタでいいよ。同学年だしね」
「……では、アスタさんとお呼びしても？」
「いいけど」そこまで意気込むことだろうか。「こっちもピトスでいいか？」
「はい大丈夫ですっー」
「……」
とまあ、そんな感じで名前の交換は済んだ。繋いだ手を離して足を引くと、ピトスはなぜか、ずいっとこちらに詰め寄ってくる。
どうしてこちらに来る？狼狽える俺に、取り戻したはずの落ち着きはどこへ消えたのやら、彼女は勢いきってこう問うた。
「あ、あの！　アスタさんにお訊ねしたいのですがっ！」

「え？　あ、はい。なんすか？」
「その……不躾なのですが、アスタさんはもしかして、レヴィさんとお付き合いされているのですか!?」
「いや違うから」
俺ではなく、なぜかレヴィが答えていた。いやまあ確かに違うけど。
「ピトス……いくらなんでも、言っていいことと悪いことがあると思うんだけど」
頭痛がするとばかりに頭を押さえるレヴィ。……この女。
「そうだね。俺もそう思うよ。お前な」俺だってお前なんか願い下げだ。「だいたいこのお嬢様が、色恋なんかに精を出すと思う？」
「そうなんですか？　いきなりパーティにお呼びするくらいだから、てっきり」
意外にも、と言ったら失礼かもしれないが、ぐいぐいと訊いてくるピトスだった。そういうことに興味のあるお年頃なのだろうか。……いや、同い年だけど。
返答に困った俺に代わり、助け船を出すようにレヴィ。
「そんな理由で呼ばないから。きちんと役に立つから連れてきたの」
「そうなんですか……すみません、変な邪推をしてしまって。アスタさんも」
「あ、いや。別に構わないけど

慣れていると言えば慣れている誤解だし、そういう確認は必要以上は、相応にクレバーな思考をしていると思っていい。たぶんまあ、色恋沙汰に興味があるのも嘘ではないだろうが。俺はとクラスの有名人であるレヴィは、善意悪意を問わず様々な噂につんて最たるものだろう。渓ましいとはまったく思えないけれど。

――ともあれ。

まあ、そんな感じで、俺は新しい友人と交流を深めた。

それこそが、レヴィの目的なのだと思い込んで。

学院は、魔術を学ぶ場であるのと同時に、人材交流の場でもある。将来有望な魔術師同士が、互いの未来のために、学生時代からコネを作っておくのは、ある意味で当たり前の話だった。人脈作りでもいいし、なんならそれは結婚相手を探す、ということにも繋がる。

魔術師ほど血を重んじる者もいないからだ。

学院長室でレヴィたちが言っていた『貴重な機会』という言葉は、そういう背景を含んでいる。この学院で上位にいるということは、将来的に王国の未来を担う人材であること

と同義だ。お互い顔を繋いでおくことには大きな意味がある。
そしてそれ以上に、互いに信用できない魔術師同士が迷宮に潜るなど、自殺行為にも等しいのだから。私情で仲間は選べない、けれど信頼できない仲間を理屈だけで選ぶことも できない。別に感情論ではなく単純な事実として、連携が取れたほうが危険が少ないに決まっている。レヴィはそれをわかっていて、俺が集団に溶け込めるよう考えていた。
……と。このときの俺はそう考えていたのに。
それだけのはずが、なかったのだろう。
「――来たわね」
ふと、レヴィが言った。見れば試術場の入り口に、ふたり分の人影がある。
揃って見覚えのある顔だ。男女がひとりずつ。昨日、学院長室で顔を合わせたばかりなのだ。忘れているはずもない。
その片方が、来るなり俺を指差した。
金糸の髪に碧玉の眼。ヒトの上に立つ者のみが持ち得る風格を纏った貴族の青年。
ウェリウス＝ギルヴァージが。
俺に向かって指を突きつけ、堂々たる宣戦布告をした。

「――アスタ＝セイエル。君に、模擬戦を申し込む」

その申し出の意味がわからず、思わず俺はこう言った。

すなわち、「……は？」と。

いうか、間が悪かったというか、考え得る限り最悪の反応だったろう。間が抜けていると

案の定、ウェリウスの視線が硬さを増した。

「どうかしたのかい、アスタ＝セイエル。もしかして不満なのかな」

「いや、不満っていうか。いきなり模擬戦とか言われても」

「いきなり……？」ウェリウスは怪訝そうにレヴィを見た。「話を聞いていないのかい？」

なるほど。その一瞬で理解した。

今さらの話だが、やはり下手人はこの女だったか。

「ちょっと。……おい、レヴィ」

――顔を貸せ、と視線で告げて彼女に近づく。

彼女はやはり悪びれるでもなく、「何？」と笑顔で小首を傾げる。

そんなレヴィに顔を近づけ、俺は小声で糾弾した。

「何、じゃねえんだよ。どういうことだ、聞いてねえぞ」

「そうでしょうね。言ってなかったもの」
あっさりと言ってくれるレヴィであった。
まあ、こいつの考えはわかっている。大方、ここでわだかまりを解消しておこうという腹だろう。考えるだけなら勝手だが、俺になんの相談もなくコトを進めるのはやめてもらいたいものだ。あと殴り合えばわかり合えるという体育会系の思考もご免被る。
「お前な……」
「お互いの実力を知る、いい機会でしょ。魔術師は手札を隠すものだけど、冒険者は必ずしもそうじゃない」
「まあ、そりゃそうだが……」
レヴィの言っていることは正しい。
この国において《冒険者》という言葉は、そのまま《迷宮攻略者》を指している。そして迷宮攻略者は基本的に集団を組むものであり、その場合、お互いがどんな魔術を使えるのか把握しておくことは至極当然の戦略だ。やらないほうがあり得ない。
とはいえ、
「だからって、別に戦って把握する必要はないだろ。口で言えば済む話だ」
「それじゃ納得できないってことでしょ。――それに、これはアスタ。あんたも同じ」

「……」

「アスタが信用を得ることと、この場に訪れたもうひとりの少女――シャルロットを見だから。そのためには、この方法がいちばん手っ取り早いってわけ」

「……本当にそれだけか？」

「さあ。どう思う？」

どうもこうも。俺はちらりと、彼女がいちばん、俺に思うところがありそうだ。る。わだかまりと言うのなら、

「……わかったよ」

諦めて俺は諸手を挙げた。

レヴィを上回ったことなんてなかった。結局いつも通り、彼女の実際、ウェリウスの信用を最低限は勝ち取っておく必要があるだろ」

「オーケー。受けりゃいいんだろ」

「別に勝てとまでは言わないわよ？　むしろ可能なら、いい感じのほうが都合いいと思うし」

「信用がどうこう言ったその口で、今度は八百長しろってか？」

「そんなこと言ってないけど」

「そうだな。言ってない。今のは流せ」
　というか仮に言われたところで、《いい感じのところで上手く負ける》なんて器用な真似、できるわけもないのだが。もう一度言うが、俺の実技の成績は学年最下位である。
　――ウェリウスはきっと強い。その実力なんて俺は知らないが、学院で実績を残しているという結果がそのことを証明している。何よりレヴィがそう言っている。
　百年にひとりレベルの天才が、何を間違ったか一年のうちに集まった……などと言われているこの学年の、最上位にいる大天才。その第一位が認める、第二位の男。
　レヴィとの密談を終え、俺はウェリウスに向き直る。
　目の前でこそこそと話し込んだのだ。ただでさえ悪い心証が、さらに下がったことだろう。あんまり、貴族には睨まれたくないのだが……。
「――悪かった。聞いてなかったからちょっと戸惑ったけど。その模擬戦、受けるよ」
「そうか。まあ受けるならいいさ。準備してくれ」
「別にいいよ。特にやることもない」
「……わかった。では、さっそく始めようか」
　制服をはためかせるように振り返り、ウェリウスは俺から距離を取る。魔術の模擬戦はお互い少し離れた位置から始めるものだが、しかしまあ動きがいちいち気障っぽい奴だ。

ここまでくるともう、わざとやっているとしか思えない。

実際、たぶんそうだ。事実として紛れもなく貴族なのだから、振る舞いには気を払っているべきことだろう。様にもなっている。

聞いた話、ずいぶんと人気者であるようだし。格差が広すぎて嫉妬さえできない。

試術場の中央で、俺とウェリウスは向かい合うように立つ。

互いに無手だ。中には得物を持つ魔術師もいるが、どうやら俺とウェリウスの戦いは、あくまで魔術合戦の形になりそうだった。

審判役はレヴィが引き受けた。観客はピトスとシャルロット。片や興味に輝いた瞳で、片や透徹した無垢な瞳で。その信頼を勝ち取るために、俺は魔術を披露する。

ほかの視線は存在しないも同然だ。試術場を覆う結界魔術の効果で、内部の出来事が外へ影響を及ぼすことはない。

だから――あとはもう、戦うだけだ。

「――アスタ＝セイエル」

ウェリウスが、俺の名前を呼んだ。試合前にエールの交換、という名の挑発でもするつもりだろうか。

魔術師という人種は意外に目立ちたがりが多く、公開試合における戦闘前の罵り合いは、

それだけでひとつの見世物になっていた。
　とはいえ、ただの模擬戦で付き合う理由もない。俺は軽く肩を竦めて、
「いちいちフルネームで呼ばなくてもいいぞ」
「ならアスタと。――アスタ、僕はね、どうにも君が気に食わない」
「……そら、またいきなりだ。直截的な発言に思わず苦笑する。好かれているつもりはなかったが、まさかこうまで嫌われているとも考えていなかった。
「なんでかって、理由は教えてくれるのか？」
「僕はガードナーさんを信用している」
　いきなり話が変わった。思わず面食らう俺に、彼は続ける。
「その彼女が信頼しているんだ。だから君も、きっと実力のある魔術師なんだろう」
「……意外な評価だ」
　てっきり馬鹿にされているのだと思っていたのだが、どうやらそうでもないらしい。
　ほかでもないあのレヴィ＝ガードナーが、私情でパーティを選ぶはずがないと知っているからだろう。もちろん、そのわけだが、それは俺から言うことじゃない。だから、《実力》にもいろいろな形があり訊きたいのは別の部分だった。

「でも、ならなんで俺が気に食わないと？」
「もし君が、彼女の信頼通りの魔術師だというのなら。つまり君は、学院で実力を隠していたということになるからだ」
「……」
「僕は、そういう欺瞞や怠惰が許せない性質でね」
なぜか前髪を撫で上げてウェリウスは言う。
――ごめん。俺にはそこで格好つける理由がわからない。
「君が本当に僕らの仲間としてやるというのなら――僕に、その力を見せてくれないかな」
笑顔のウェリウス。挑発するというよりは、諭しているかのような。
に溢れた立ち姿は、まるで物語の中の英雄のようですらある。その自信
「……お前、そうやって格好つけないと絶対に喋れないの？」
「それも、貴族の責務でね」
ちょっと視線を逸らすウェリウスだった。本当に意図的にやっていた……。さすがに、貴族ともなれば苦労も多いのか。まあ、その割には結構ノリノリにも見えたけど。
ともあれ、とウェリウスは仕切り直す。

「学院にまで隠していたその実力、見せてもらおうか」
「……勘違いしてるみたいだから言っておくけど。俺は試験でたりともない」
「何……？」
怪訝に眉を顰めるウェリウスだったが、これは嘘じゃない。
学院の試験結果は、紛うことなく俺の実力だ。
「それでも、見せろっつーなら見せるけど。期待外れでも怒らないでくれよ」
「それも含めて、確かめさせてもらおうか。――元冒険者なんだろう？」
「一応ね」
「本職だったと言うんだ。あの七星旅団並みとは言わないにせよ、せめて僕に比肩するくらいの実力は見せてほしいものだと思うよ」
言うなり、ウェリウスは右腕を、掌がこちらに向く形で伸ばした。
魔術師に特有の構えだ。上げられた手に魔力が集中していくのが感じられる。
「……まったく。どいつもこいつも、迷宮と聞けばすぐ七星の名前を出すもんだ」
「比べられるのは不満かな？」
「別に」

告げて、俺もまた体内で魔力を練り始める。
いつでも戦える準備は整った。それを見てとって、レヴィが開始の宣言をする。
「準備はいいみたいね。――では、始めっ！」
その言葉を皮切りにして。巨大な火球が、こちらへとまっすぐに飛んできた。
挨拶代わりの一撃――。
そう評すには、いささか威力の込められすぎた強襲だった。
「ぬおぅわあっ!?」
思い切り情けない悲鳴を上げながら、咄嗟に横へ跳んで回避する。
地面が剥き出しの試術場で、外套を汚しながら転がる俺。二人の女の子が観衆の中で、まったく格好のつかない展開から模擬戦は始まった。
「……驚いたよ」
無様な俺を遠巻きに見て、追撃するでもなくウェリウスが言う。
皮肉じみた発言だが、このザマでは否定もできやしない。
「悪かったな。いきなり不意打ちとは予想外だった」
「馬鹿にしたわけじゃないさ」ウェリウスは目を見開いて呟く。「てっきり魔術で相殺するか、もしくは防御するものだと思っていたからね。けれど、まさか普通に躱されるとは

考えてなかった。身体能力は、それなりに高いみたいだね」
「いや、だからお前、俺の実技の成績知ってんだろ？　あんなうならもっといい成績取ってるっつーの」
「まあ、いくら運動に優れていても、この学院ではさすがに評して、君はそちらのタイプなのかな？」
あくまで優雅に、悠然と――何より上から物を言うウェリウス。
俺は「は」と吐き捨てて笑う。そっちがその気なら、こっちもうちょい考えてから物を「ぜんぜん違えよ。さっきからお前の推測は全部間違ってる。言ったらどうだ」
さきほどの考えなどこへやら。俺はウェリウスを挑発にかかる。
受けるウェリウスは、むしろ嬉しげに唇を歪めて答えた。
「耳が痛いね。だが僕も魔術師だ。言葉より、行動で示すほうが合っている――！」
言葉と同時、ウェリウスが軽く腕を振るう。その動きに指揮されるかのように、空気が強く響きを発した。
それは目に映らない大気の振動。魔術の形成を伝える余波だ。
悟った。回避するべく、俺はさらに横へと跳ぶ。
攻撃の前兆を感覚だけで

直後、それまで俺の立っていた地面が、ざくっと刃物を振り落とされたように抉れた。

――風の魔術だ。

目に見えない空気の刃を創り出し、悟られるよりも先に相手を刻む。殺傷能力の高い、実戦主義的な魔術――机の前に座っているだけの人間では、なかなか使えない術式だ。

「悪いけど、休む暇を与えるつもりはないよ」

ウェリウスはさらに魔術を連射した。こういった魔術は総称して《魔弾》と呼ばれ、魔術師の最も基本的な戦闘技術だ。基本であるがゆえに、躱すだけならそこまで難しくない。

しかしウェリウスのそれはレベルが高い。中には風の攻撃以外にも、先ほどの火球までも含まれていた。二属性を同時に操るとは、地味に難しい技術をさも当然のようにやってくれるものだ――。

「――っ!?」

などと暢気に評している余裕もなく。俺は迫り来る不可視の攻撃を、魔力感知だけで回避していく。魔術である以上は魔力を必要とし、そして魔術師なればそれを感じ取れる。ある程度の予測と勘と本能で、攻撃を避けることは不可能じゃなかった。

体勢を低く保ち、ほとんど地面を転げまわるように無様な格好で、それでも俺は攻撃を回避し続けた。なんらかの魔術で防ぐなり、相殺するなりできれば楽なのだが。防御力に

欠ける俺は、走り回るのが唯一の選択肢だ。とはいえ――それにしても。

「攻撃の殺傷性が高すぎませんかねえ！　これ模擬戦だろうが」

顔の真横を抜けていった火球に、嫌な汗をかきながら俺は叫んだ。

「それを全て避けている君には言われたくないな。まあ、そうでなければ面白くない」

「くそ、レヴィみてえなこと言いやがって、お前も脳筋の類かよ！　意外!!」

「知らないのかい？　意外性に富んでいる男のほうが、女性からは支持されると聞く」

「嫌味か！　なんだ、喧嘩売ってんのかテメエ!!」

「売っているだろう」

「ああ、そうだったなあ！」

アホなやり取りを繰り広げては、その瞬間に魔弾が俺を射貫くだろう。相応の怪我は覚悟しなければならない。

――それにしても、さすがに学年次席というだけはあった。

ウェリウスが使っている魔術は、大別して《元素魔術》と呼ばれる種類のものだ。魔術としては最も一般的なタイプで、学院にも元素魔術科がひとつの学科として存在している。

火や水、風や地といった自身に適応する《属性》を操り、現実世界に干渉する魔術。扱いが簡単で習熟に時間がかからず、何より高い攻撃力を持たせやすいことから、もっぱら

戦うことを目的とする魔術師がよく用いる。実際、戦闘系の魔術師は、その多くが元素魔術の使い手だ。特に冒険者に好まれている。

もちろん欠点もないではなく、たとえば自身の持つ属性と異なる魔術を使うことが、ほとんど不可能なことは元素魔術師の大きな弱点だろう。

魔術師の属性は生まれつき決まっている。たいていはひとつで、たとえば属性が《火》の魔術師は、火属性以外の元素魔術を使うことができない。それは戦闘時における対応力の低さを意味し、たとえば迷宮で火や熱に耐性を持つ魔物と相対した場合、火属性の元素魔術しか使えない魔術師は苦戦を余儀なくされるだろう。《火の元素魔術》で可能なことは《火を創り、操ること》にほぼ終始するからだ。もちろん特別な魔術効果を持たせる技法も存在はしているが、その難易度は比較にもならないほど上がってしまう。

元素魔術師は、行使可能な魔術の幅が限られているのが弱点だ。

とはいえ、やはり例外はあるわけで。ひとりの魔術師が、必ずしも単一の適性しか持たないわけではない。

現に目の前のウェリウスは、火と風、ふたつの元素魔術を操って見せている。これだけで対応力は、単純に考えて倍だ。決して数は多くないが、中には三つ以上の属性に適性を持つ魔術師だっている。

それがウェリウスでないなどと、今の時点で断言することはできなかった。

この時点では、まだ切り札を切るような段階じゃないはずだ。

ウェリウスだって――無論、俺だって。切れる札くらい、隠している。

もちろん、それは必ずしも俺の有利を意味しない。元素魔術師は十の術師を、百の魔物を完封せしめる。

単一の技能を磨きやすいという利点でもあるのだから。ひとつの対応力の狭さは、翻せば単純にして強靭。それが、元素魔術師の戦闘方法だった。

――ただ元素を操る。

それだけで、一流の元素魔術師に特化しやすいということ。

「……こうまで避けるとはね」

魔弾の連射を止め、ウェリウスは呆れたように呟いた。俺は軽く肩を揺らして、

「なんだよ、弾切れか？」

「まさか。でも、このままだと君を捉えるのは難しそうだ」

余裕の表情でウェリウスは答える。

実際、こちらからはまだ一度も攻撃できていないのだ。持久戦になればいずれ敗北する。

どちらが優勢かと言うのなら、明らかにウェリウスのほうだった。

威力から速度、連射性、魔力の燃費に至るまで、ウェリウスの魔弾は間違いなく一流だ。

正直、ここまでのモノだとは思っていなかった。自然の力は十全にそれを支配している。この完成度、レヴィにも匹敵するかしいのだ。普通の魔術師なら——ここまでの練度を持ってて何が学生だ。この実力なら、こうも連発すればあっさり息より明らかに強い。その上まるで全力を出していないと見えるなるほど、レヴィが信頼するわけだ。ふたり揃って、学生のこれが才能の差だというのなら、世の魔術師は堪ったものじ

「まったく、天才ばっかで泣けてくるね……」

ぼやく俺に、ウェリウスは苦笑して答えた。

「仕留められていない以上、皮肉にしか聞こえないな」

「いや、仕留めるって何？　殺す気？」

「おっと」

「おっとじゃねえよ。こええよ」

「いずれにせよ、全て躱しておいて言うことじゃないだろう。それも魔術さえ使わずに」

「これから迷宮に行くってこと覚えてる？　消費は極力抑えるべきだろうが」

「実はちょっと楽しくなってね。今日はもう迷宮は諦めていいかもしれない」
「本末転倒すぎるだろ……」
「いずれにせよ、そろそろ本気を見せてもらいたいな。それともまだ舐められているんだろうか？」
「舐めてねえよ」――今は、もう。
どこか愉快気に宣うウェリウスに、俺は告げることにした。
その勘違いを正す言葉を。
「――現に、魔術はもう使ってる」
言うが早いか、俺は片手を地面に突き、そこから魔力を放出。
今の俺に使える貴重な魔力を惜しみなく、ではなく盛大に惜しみながら、ほんのちょっとだけ地面に流し込んでいく。
正確には、そこに描いた《印刻》へ向けて。
「魔術――いつの間に？」
はっと目を見開くも、ウェリウスの反応は迅速だった。咄嗟に攻撃の手を止め、周囲の状況を窺っている。
地面に、仄かな光が浮かんでいた。

魔力光だ。それは地面に形を、記号を描く。魔術の意味を為す文字を。
術式の成立を見て取って、ウェリウスが初めて焦りを見せながら叫びを上げた。
「これは――」
「そう」俺は笑う。「――印刻だ」
瞬間、俺は地に描いた文字の意味を、魔術として起動する。
――記したルーンは《氷》と《野牛》。
何も、ただ転げ回って魔弾を避けていたわけじゃない。回避しながら、土の地面に足で、文字を記していたのだ。
印が現実に意味を刻み、見る間に地面を凍らせていく。まるで氷原が広がっていくかのように、ウェリウスへと向けて魔術が走る。
刹那、ウェリウスは足元へと火を放った。地面を走るように進む火炎が、俺の創り出した氷と激突する。氷が自分へ届いては、動きを阻害されてしまうと悟ったのだろう。《氷》のルーンには《停滞》の意味もある。ウェリウスはそれを知らないだろうが、勘と経験から直感したらしい。――本当に、こいつは学生の割に戦い慣れすぎている。
火の勢いに、氷は瞬く間に溶かされ始めていた。《野牛》の文字による強化を加味してなお、俺は出力でウェリウスに届かない。魔力が足りないせいだ。

けれど、それでいい。そこに隙さえ生まれれば充分だ。相手の攻撃を防ぐための、あくまで対処としての魔術。意識はどうしても、氷が迫り来る足下に限定されるだろう。

その間に俺は、あらかじめ靴に刻んであった印刻を再起動する。ルーン魔術の利点は、書いてさえおけばいつでも発動できることだ。

「――《駿馬（エワズ）》Ehwaz！」

単純に加速の効果を発揮するこのルーンは、俺が最も多用する術式のひとつだった。《駿馬（エワズ）》で強化された脚力に頼り、俺は一気にウェリウスへと肉薄した。氷の地面を滑るように、加速を極めて距離を詰める。

一方のウェリウスは、俺から距離を取るように後ろへ飛び退った。さすがに速い。魔術師である以上、その身体能力は魔力で常に底上げされている。

だが《駿馬（エワズ）》の速度には及ばない。魔力の常時強化程度では、加速に特化した術式がもたらす俊足には敵わない。瞬くほどの時間で、俺はウェリウスへと肉薄する――、直前で、突如として目の前の地面が隆起し、壁に変わってこちらの移動を阻害した。

――地属性まで使えんのかよ。

三重属性と来た。知らず失笑してしまう。天才というのも馬鹿らしい才能だ。

それでも、ただで負けてやるつもりはない。

壁がせり上がるよりもなお速く。俺は、それを飛び越えて上を取る。強化された脚力は、跳躍にも役立ってくれる。

対するウェリウスもまた、していたらしい。攻撃の準備ができていた。しかも魔力の練り技術が、当たり前にできるからこそ、ウェリウスは隙なく強いのだろう。

果たして。ウェリウスの魔弾が放たれる。

圧縮された水の弾丸。それが異常に速い。当たり前のこれで四つ目――四元素複合適性など、世界中を探したとこのだろう。

――最後まで。本当に笑わせてくれるものだ。

空中の俺に、ウェリウスの攻撃を回避するすべはない。眼前まともに受ければ気絶は免れまい。場合によっては、骨にひびまで迫り来た水の弾丸は、

そんな魔弾を――、

俺は、正面から素手で殴りくらい入るだろう。

つけた。

「――そこまでっ！」

声が響く。審判役のレヴィの静止だった。それを認識するよりも先に、俺もウェリウスも動きは止めていた。――決着がついていたからだ。

俺の右拳は、ウェリウスの顔前で止まっている。殴り抜く直前の形だった。

一方、ウェリウスの右の掌も、俺の鳩尾の前に当てられている。今すぐにでも魔術を放てる状態なのだろう。

互いが互いに、確実に一撃を与えられる体勢。

模擬戦の終結としては、まあ、この辺りが落としどころだろう。

「……すごい」

という、溜息にも似た声が聞こえた。横目に見ると、そこには感嘆を零すピトスの姿。

驚愕と感心が合わさって、その感情が溢れたという様子だ。

それを聞いたところで、こちらも硬直からようやく解かれる。俺は腕を下ろし、ウェリウスもまた外套についた土埃を手で払った。

そして、俺へと向けて晴れやかな笑みを見せてくる。――やっぱりか。

「――引き分け、かな。まさか、ここまで追い詰められるとは思わなかったよ」

そう微笑むウェリウスに、俺は顔を歪めて答える。

「何それ皮肉？　どう考えても俺の負けだろうが」

「……」

微笑を湛えたまま、ウェリウスは何も言わない。やっぱり気づいていたらしい。それで何も言わないのだから、この貴族様も存外、いい性格をしている。

「どういうことですか……？」

代わるように訊ねたピトスに、答えたのはレヴィだった。

「そうね。アスタの負けだわ。このまま互いに攻撃を放ったらダメージを受けるのはアスタのほうだけだもの」

――ま、そういうことだった。

ただのグーパンチだった俺に対し、ウェリウスは魔術を準備していた。

どちらの威力が高いかなど、検討するまでもないだろう。仮にしても、返す攻撃で俺が負ける。勝敗など一目瞭然だ。

「僕としては、まるで勝ったつもりになれないんだけど。爽やかにそう微笑して、ウェリウスは俺に握手を求めてくるなんかキラキラした目でこちらを見ているピトスに押されて、俺は盛大に顔を歪めたが、結局それを受けるほかなかった。

「それにしても、印刻魔術しか使えない君と互角か、もしくは……いや、僕もまだまだ修

行が足りないってことかな。

「ちょっと待て」

なんか笑顔で纏めにかかるウェリウスを押し留める。

聞き逃せない発言があったので。

「――お前、なぜ俺が印刻しか使えないと知っている？」

この模擬戦において、確かに俺は印刻しか使わなかった。だが術を使わなかったのか、それとも使えなかったのかまではわからないはずだ。

「おっと。今のは失言だったね」

あくまで笑みを絶やさないウェリウス。だがそれで大方の事情は察したのだということまで。

ざと気づかせるために言ったのだということまで。

ウェリウスの言葉は事実だ。俺は、印刻以外の魔術を一切扱えなかったからだ。――そしてその事実を知る人間は限られている。

以上の事実から導き出される答えはひとつだ。

「――初めから仕込みか、この茶番は」

「茶番ってコトはないでしょう。いい試合だったわよ」

苦笑して言うレヴィだが、その言葉に信頼性など皆無だった。……やってくれる。

要するに、レヴィとウェリウスは初めから繋がっていたということなのだろう。模擬戦を持ちかけるよう言ったのも、全てレヴィが漏らしたのだ。

さすがに、学院長室に集まる以前から繋がっていたというこそれも今となっては怪しいもとらしいほどに敵対的だったのだ。学院長室でのウェリウスは……遠回しなことをするもの。この男、俺の前ではずっと演技をしていたらしい。

「ったく、無駄なことさせられたもんだ。貴族に目をつけられ「でも、そういう割には、普通に模擬戦受けたわよね？　充分意地悪く微笑むレヴィに閉口する。いや、だって、それは。言い訳を考えだすより前に、レヴィはばっさりと俺のことを「結局、あんたも魔術師ってことよねー」

「……一応言っとくけど、あんまり吹聴して回んないでくれよ聞こえなかった振りをして、釘を刺すようにウェリウスへ告誤魔化しだ。実際はさして困らない。ウェリウスは腹の立つ「もちろん。ギルヴァージルの名に懸けて、このことは終生の秘密にしておくと誓おう」

「……いや別に、そこまで重い宣言しなくてもいいけど……」
まあ黙っててくれるのなら構わない。これからチームを組むし、そうなれば俺が印刻しか使えないことは伝えざるを得まい。
そしてその二択なら、レヴィは必ず前者を選ぶ。
「そういうわけだから、ピトスも黙っててくれると助かる」
「はいっ、もちろんですっ！」
「ん、ありがとう」
こくこくと頷くピトスに苦笑。それから俺はもうひとり、先ほどからずっと沈黙を保ち続けている、最後の仲間へと振り返った。
「――あんたも、それでいいか？」
「……」シャルロットは無言で首肯する。
その顔に表情はない。ただ、やはり無理に押し殺しているかのような様子だ。ちょっとよくない。少なくともこのまま迷宮に潜ろうとは思えなかった。
「――さて、お互いに交流も深めたところで」
仕切り直すようにレヴィが言う。なんて白々しいセリフだろうか。

「一度、解散にしましょうか。一刻後に、今度は管理局――迷宮区の入り口に再集合。それで構わないかしら？」

「今日は疲れたから明日にしない？」俺が言い、

「わかった、じゃあ一刻後に、また」ウェリウスが言った。

レヴィはウェリウスにだけ頷きを返し、俺の言葉を黙殺してしまう。別に、冗談というわけでもなかったのだが。

「――アスタも、またあとで会おう。印刻は応用力の高い魔術だと聞いている。迷宮では頼りにさせてもらうよ」

嫌味なく笑うウェリウス。嫌な奴に見えたのは演技だったわけだが、素の笑顔だと、それはそれで今度は厭らしく見えてくる。いずれにしろ性格は悪そうだった。

「……つーかお前、印刻魔術まで知ってるのか？　珍しいな」

「いや、ほとんど知らないよ。文献で少し読んだくらいさ。見るのも初めてだよ、アスタ」

「なんか、お前から親しげにアスタとか呼ばれると、ちょいムカつくな」

「手厳しいね。初めの挑発のことを言っているなら許してほしいな」

「……いや、まあ別にいいけど。でもあれだ」

「なんだい？」

わずかに首を傾げたウェリ
「――俺、お前のこと普通に
ウェリウスは、なぜか嬉し
意味がまったくわからない
「それじゃ、私も準備があ
レヴィもまた手を振って言
「あー、はいはい。わかりま
「……わかってるなら、任せ
「――」本当に。
どこまで見抜いているのだ
「――ねえピトス、ちょっと
「あ、はい。大丈夫ですよ、
「ありがとう。それじゃ、ち
「はい！」
頷くと、ピトスはとたと
「……なんか用か？」

ウスに、俺は言い切る。
苦手だわ」
そうに微笑んで立ち去った。
。
から先に行くわ。あとでね、アス
う。俺は恨みがましく視線を送り
したー」
るわ」
ろう、こいつは。
手伝ってほしいことがあるんだけ
レヴィさん」
ょっといっしょに来てくれる？」
と、なぜか俺のほうに近づいてく
る。

「いえ、なんていうか、すごかったです。強いんですね、アスタさん。びっくりしました」
「まあ普通に負けたんだけどね」
「そもそもウェリウスさんと戦いになる魔術師なんて、学年にもほとんどいませんよ」
「たまたまだって。印刻使いなんて絶滅危惧種だからね、ウェリウスにも知識がなかったから誤魔化せただけだ。こういう初見殺しは、二度目は通用しない」
別に遠慮や韜晦で言うわけじゃない。それは本心だし、そして純然たる事実だった。
そして、別に手を抜いたわけでもないのに、その初見殺しで初見負けしているのだからもはや救えない。……本当に、弱くなってしまったものだ。
――現代魔術学において、印刻はほとんど廃れたに等しい技術だった。
そもそもルーン文字というモノ自体、本来は《占い》に使うものだ。戦闘には根本的に向いていない。それ以外に選択肢がなかったから、使わざるを得なかったというだけで。
その理由は単純で――印刻は、遅い。
魔術の発動に際し、書く、という工程が絶対に必要だという性質上、印刻魔術は速度の面で、ほかの魔術にどうしても一歩劣ってしまう。殺し合いにおいては致命的だ。
加えて言えば、印刻魔術はそれ自体の難易度が異常に高く、それが発動の遅さに拍車を

かけているのが痛い。

巧遅より拙速。戦いにおいて、それは当然の理だ。時間をかけて難しい魔術を練る暇があるのなら、雑でも素早い魔術を撃ったほうが遥かにマシだろう。

逆を言えば、元素魔術は簡単であるからこそ戦闘に用いられることが多いわけだ。大した理論を学ばずとも、感覚だけである程度使えてしまう。

「……あの。お訊きしてもいいですか？」

俺を見上げるピトスが、ふとそんな風に訊いてきた。なんだかデジャヴュだ。

「いいけど。今度は何？」

「印刻しか使えない、って言うのは……？」

訊きづらそうに言うピトスに、「ああ」と俺はあっさり答えた。

「言葉通りだよ。火属性の元素魔術師が水の魔術は使えないのと同じ。俺は、印刻を扱う以外の魔術適性が何ひとつないんだ」

普通なら、そんなことはあり得ない。魔術にはいろいろと種類があるが、そのどれかが使えない、ということは起こり得なかった。少なくとも可能性としては。

もちろん、属性の適性はある。火が使えても水は使えない、ということはよくある話だ。だがそれでも何かひとつの元素魔術には適性があるわけで、元素魔術それ自

体が使えない、なんて人間は基本的に存在していない。俺だって《水》の二重適性を持っている。割と珍しい組み合わせだ。

ただ、そもそも元素魔術それ自体の適性がない、という世界的にも希少な例外が俺というだけで。世に魔術は様々あり、そのどれを選ぶのかは個々の魔術師が自分で決めることだが――初めから可能性がゼロとは笑ってしまう。希少性で言うなら、ウェリウスの四重適性も奇跡みたいな例外だが、どうして同じ希少でもこうまで方向性が反対なのやら。

それを今さら、嘆くつもりはないけれど。

「だから、学院の成績が低くなってしまうんですね……印刻以外使えないから」

「そういうことだね」

学院の単位は、基本的に《特定の魔術を使えるようになる》ことが取得の条件だ。俺にとっては致命的、というかもう殺されたも同然の仕組みである。

一応、座学では割と上位の成績を取っているし、セルエの計らいもあって、学院側はかなり俺に融通を利かせてくれている。学院長も理解のある人だ。実技で取れない点数を、俺は実践ならぬ実戦で挽回していた。なんだか矛盾している気もするが、事実だ。

戦いにおいては、大規模で難しい魔術を時間かけて構築するより、簡単で小規模な魔術

を速攻でぶち当てるほうがいい。そして、この事実は案外、経験
その点、俺はこれでも元冒険者だ。実戦経験ならば多いほうだ
あるいは、こうして迷宮攻略のメンバーに抜擢された理由も、
りにできるように」といった配慮が込められているのかもしれな
面倒だけれど、それ以上にありがたい話だと思う。
才能には恵まれなかった俺だが、機会と周囲の人間には恵まれ
「すみません、言いづらいことを訊いてしまって」
「いや、別にそんなことないけど……」
「――ありがとう、ございました」
ピトスが頭を下げる。その口調と態度がなんだかとても真剣で
が逆に不思議――というか不自然に思えてしまう。
どうにも、言葉の裏に何か言外の意図が込められているという
俺はピトス越しに、その向こうにいるレヴィに視線を送った。
さく頷く。つまりは、まあ――わからん。
わからんが、俺にわからなくてもレヴィがわかっているならそ
「……まあ、またあとで」

「はいっ。失礼しますね、アスタさん」
それだけ言うと、ピトスは頭を上げてレヴィの元に駆けていく。
ふたりの姿を、俺は試術場の中から見送った。
……さて。
これで、この場には俺とシャルロットのふたりきりになった。
俺は視線を、最後に残った少女に向ける。
「お前はどうするんだ？　まだ帰らないのか」
「……」
少女は答えない。ただ無言でこちらを見ている。
無表情だった。何を考えているのかまったく読めない。
本当に人形みたいだ。透き通るような白い長髪も、水晶みたいな蒼い瞳も。どこか作り物めいていて現実感がない。
わけではない。どこか獰猛な獣をも思わせる雰囲気を、張り詰めたように纏っていた。
「……なんか言ってくれよ」
対応に困ってしまう。せめて会話にくらいは応じてほしいのだが。
レヴィがこれ見よがしにピトスを連れて行ったのは、こいつと話をしろ、という無言の

要求だったのだから。

「お前、俺のこと知ってたのか？」

「……」

「あの。ねえ、聞いてる？　おい」

「……」

「……そうだ、お前の魔術も見せてくれないか？　ほら、これから迷宮に入るなら、互いに何ができるのか把握しておく必要もあるし――」

「――そんなに見たい？　おい――」

言葉に、今度は返答があった。不意を衝かれ、咄嗟に返答がない。

「なら、見せてあげようか――」

ようやくの返答。その表情は笑みだ。シャルロットは笑っている。

酷薄（こくはく）な――まるで凍りついた炎（ほのお）のような瞳で。

確かに、答えを返してくれた。

――ただし、その返答は言葉によるものではなく。

突然に飛来した、魔術による返答だった。

「――《防御（Eth Waz）》ッー」

その瞬間、俺は反射的に所持していた護符のひとつを起動した。呪言に反応して、常に外套に隠している防御用の魔術の道具――そこに刻まれた《防御》の文字が――現実世界に干渉を開始する。不可視の防壁を作り出し、攻撃魔術を防御するため。

反射で作った防壁が、突如として飛来した火球を防ぐのが見えた。ぐっ、と魔力が身体から溢れていく感覚。それは痛みを伴って、俺の肉体を内側から傷つけている。

目の前で弾ける火の勢いが、俺の髪や外套を揺らした。熱量と焦りに汗が噴き出る。

「……なんのつもりだ」

そう訊ねた。当たり前だ。もし今の攻撃が直撃していたら、う。魔術師は魔力に抵抗があるが、だからといって無防備に受模擬戦とも違う。今の魔術は、完全なる不意打ちだったのだなかった。

返答を待つ俺に、彼女はぼつり、呟くようにこう答える。

「……やっぱり、防げるんだ」

透明な声。いや違う、それはどこか無理に色を消し去った声だ。拒絶の意志が込められた言葉。

それを聞いて俺は冷静になる。思わず舌打ちを零すほどには。

そう――冷静じゃなかったのは俺であり、決して目の前の彼女ではなかったのだ。

「今の魔術、さっきの模擬戦で彼が最初に使ったのと、同じ威力にしたつもりだけど」

「……」

「やっぱり防げるんだね。しかもただの防御じゃない、術式に干渉して、魔術そのものを相殺してる」

見抜かれていた。というよりも、よく見ている。いろいろな意味で。

簡単に言うものだが、見た魔術と完全に同じ規模の魔術を再現する、というのは存外に難しい技術だ。どころか普通はできない。

ただ同じ魔術を使うだけなら簡単だろう。火に適性を持つ元素魔術師なら、むしろ火の魔術が使えて当然だとさえ言える。

だが、一度放たれた魔術と完全に同一の形、規模、威力、速度を再現するのは非常に難しい。たとえるなら、大量の水を目分量で測るようなものだからだ。だいたいこの程度、

ということが感覚でわかった。
魔術という技術自体が、実に大雑把な魔術だということも関係する。
そう、魔術とは感覚だ。そして同時に理論でもあるから難しい。計算し尽くされた術式を、本人の感覚によって再現するという矛盾。魔術はそれを本質的に孕んでいる。
「……なんだよ。お前までも、ぴったり正確な量だけ掬い出すのか？」
これはさすがにレヴィも、俺と模擬戦しないとダメだって言う気か？」
だが、問いにシャルロットは首を横へ振った。
「まさか。そんな意味のない、確認だよ」
「……なら、どういうつもりだよ」
「ただの確認だよ。――なんの意味もない、確認」
「……」
「それがどうかした？」
どうかしたか、と問われれば確実にどうかしているだろう。けれど何も答えられない。
俺は言葉を失っていた。彼女の纏う雰囲気に、安易な言葉を返せなかった。あのとき、学院長室の前で会ったときから、彼女がずっと俺に隠していた感情。その正体に、俺はこのとき、ようやく思い至ったのだから。

――そう、これは敵意だ。

彼女は今、俺に敵意を向けている。これと比べれば、ウェリシャルロットが言う。否定する余地さえなかった。彼女は俺ど児戯にも等しい。勘違いをしておきたいんだけど」

「確認ついでに、ひとつ訊いシャルロットが言う。否と言える空気ではない。だが肯定もできなかった。

「――その魔術、いったいどこで、って……」

「どこで学んだの？」

「ああ、訊き方が悪いか。なら訂正する。――いったい、誰から魔術を教わったの？」

「――――」

「答えて。ああ、いや、答えられないならそれでもいいけど」

「……お前、いったい誰だ？」

そう訊ねた。名前は知っているのに、それでも思わず訊ねてしまった。質問に質問で返さざるを得ないほど、その問いは俺の急所を突いている。

――知られているのだろうか。俺が、いったい誰から魔術を学んだのかということを。

彼女は問いに、瞳の色を焦がしていく。

どこか熱を持った双眸。レヴィにさえ匹敵する炎の気配を伴って。

「誰だなんて、そんなことを今さら訊くんだ？　自分は偽名を嘘ばっかりついているくせに、みんなに使ってるくせに、いいよ、名乗ってあげる」

「……お前……」

「ま、わたしもヒトのコトは言えないけど。いいよ、名乗って。彼女は、自らの名を口にする。

「わたしはシャルロット＝セイエル」

知っている。同じ苗字なのだ、意識せずとも覚えてしまう。

だが、もし同じなのが、それだけではなかったら。俺の苗字が偽名であるのと同じように、彼女の苗字も偽名なのだとすれば――。

いや、待て。そもそも、彼女は、俺が偽名だということを知っている？

この事実を学生で知っているのはレヴィくらいだ。けれどレヴィがそれを明かしたとは思えない。あのレヴィが、それに、彼女の線引きを間違うわけがない。

「お前……」

言葉が淀む。そんな俺を前にして、シャルロットは、最後の一撃を振り被った。

「あなたに魔術を教えたのは、アーサー＝クリスファウストなんでしょう？」

――息が、止まった。その秘密。そのひとつを握られてしまっていた。

その名前は、けれど誰もが知っている。なぜなら彼は偉大な魔法使いにして、最悪の反逆者なのだから。その名前は確かに致命傷だ。俺が持つ歴史にただ三名だけしか存在していない、魔術師としての最高位階《魔法使い》の位を持つ男。

そして――俺の、魔術の師匠。

セイエルとは、あの男が好んで名乗っていた偽名のひとつだ。

俺は単に、それを借りていたに過ぎない。ということは、シャルロットもまた、それを知っていたから《セイエル》の偽名を使ったのだろう。

俺がルーンしか扱えない、なんて情報とは比較にもならない。このことはレヴィにさえ教えていない秘密なのだから。あの男との繋がりを知られてはことすらあり得る。王国全土に名を轟かせるお尋ね者の弟子なのだから、最悪の場合、幽閉される

そして、それを知っているということは。

「……お前、は――」

「そう」少女は小さく頷いた。「セイエルは偽名。貴方がこの学院にいるって知ったから、あえて名乗ることにしただけ。――私も、名前は隠さなくちゃいけなかったから」

そこで初めて、シャルロットは少しだけ愉快そうに口角を歪ませてみせる。

まるで、そのことを告げられるのが、楽しみで仕方なかったかのように。ずっとそれを言う機会を窺っていたかのように。

彼女は――その名を口にする。

「――わたしの本名は、シャルロット＝クリスファウスト」

「クリスファウスト、だと……？」

「ええ。貴方の師である魔法使いは、わたしの実の父親。あなたにとっては妹弟子、ってことになるのかな」

弟子であり――だから、あの様子だと、本当に知らなかったみたいだね」

「……っ」

「その様子だと、本当に知らなかったみたいだね」

知るわけがない。この世界における、《魔法使い（イプシシマス）》という称号（しょうごう）の意味を知ればこそ。

世界にたった三人だけの、魔法使い（イプシシマス）の位にある大魔術師に、娘（むすめ）が存在していたなんて。

その事実が、どれほど大きな価値を持つ秘密であることか。

……いや。そんなことはこの際どうでもいい。重要なのはその部分じゃない。世間に知

られれば大問題になるだろう奴じゃない。

問題なのは。

目の前の少女が――ある意味では俺にとって致命的とさえ言える秘密を握っている彼女が――俺に対して敵意を抱(いだ)いているということだ。

「――シャルって呼んでよ。よろしくね、お義兄(にい)ちゃん」

凄惨(せいさん)で、凄烈(せいれつ)で、凄然とした微笑みで。シャルは俺へと微笑みかける。

――それが、妹弟子との出会いだった。

第一話　オーステリア迷宮

ある男の話をしよう。
そいつは名をアスタプレイアスといい。
そう呼ばれるより前は――一ノ瀬明日多という名前だった。

※

――俺はこの世界の人間ではない。
なんて主張をしたら、俺はきっと脳味噌が瘴気に汚染されたんだと疑われるだろう。
だから、この話はほとんどしたことがない。別に取り立てて隠したいわけじゃなかったが、かといって言い触らす意味も理由も特に思いつかない。隠すようにも言われていた。
知っている人間は、ごくわずかに限られる。
その数少ないうちのひとりが、魔術師アーサー＝クリストファウストだ。

全部で十一段階に分けられる魔術師の位階において最上位。超越者、自己自身者などとも呼ばれる逸脱の果て。あらゆる魔術師の頂に立つ存在。

――《魔法使い（イプシンマス）》。

クラン《七星旅団（セブンスターズ）》が冒険者の伝説ならば、魔法使いは魔術師にとって神話の領域だ。

その実力はおそらく、旅団の七人が全員で向かってなお及ばないレベルだろう。

魔法使いを擁するということは、その国が戦略兵器を得たということに等しい。

たとえるなら、核兵器みたいなものだった。

かつて、俺は地球という惑星で暮らしていた。

日本という国の、ごく一般的な家庭に生まれた一ノ瀬明日多は、ある日突然、なんの前触れもなく異世界に放り出されてしまう。

戦う能力どころか、働くための技能さえ満足に持たないただのガキが、異世界でひとり生き延びることなど不可能だ。まして魔術などという未知の脅威に晒されてはなおさら。

当たり前に行き場をなくし、当然に死にかけた《明日多》は、はずれど死の寸前で――妙なふたりに拾われた。

その一方が、のちに《明日多》の師となるアーサー＝クリスファウストであり。

その弟子で、のちに《明日多》の義姉となるマイア＝プレイアスだった。

自身を最強の魔術師と名乗る謎の男と、その押し掛け弟子で

そのふたりから、《明日多》は魔術を学んだ。乏しい才能を

か自身を守れるだけの実力を得て。

そして同時に、その過程で、掛け替えのない仲間をも得ること

一ノ瀬明日多は、アスタ＝プレイアスになり――。

※

試術場での模擬戦が終わってから、だいたい二時間後。俺は

口となる建物まで足を運んでいた。

正確には、ずっとこの場所で待っていた。

「……」

何本目かになる煙草を揉み消す。まったく味がしなかった。

気分は最悪のひと言。吐き出す紫煙といっしょに精神力まで

救いがない。

試術場での模擬戦が終わってから、だいたい二時間後。俺は

口となる建物まで足を運んでいた。

正確には、ずっとこの場所で待っていた。

「……」

何本目かになる煙草を揉み消す。まったく味がしなかった。

気分は最悪のひと言。吐き出す紫煙といっしょに精神力まで

救いがない。

あのあと、シャルとは二、三の言葉を交わした。
というより、俺が一方的に聞かされていた。
「一応、挨拶だけしておこうかと思って。同じパーティになれば、俺になど声をかけなかったもそうするから」
彼女は言った。そうでなければ普通にしてよ。わたしは言わないからさ。みんなの前では
「まあ、別に仲よくやろうとも言わんばかりに。
彼女の言葉が耳に入ってこない。それでも、ただ言われるがままに頷いていた。
「迷宮には慣れてるんでしょ、貴方は。わたしはほとんど入ったことないからさ。兄弟子として、格好いいトコ見せてくれると嬉しいな。——それじゃあね、お義兄ちゃん」
言うだけ言って、返事を待たずにシャルは去って行く。その背中を追うことなんてできなかった。そもそも何を言うべきなのかもわからない。
彼女の言葉が本心なのかさえわからないし、だから俺も、どうするべきなのかがわからない。
何も——何ひとつわからないでいた。
「……あー。駄目だ。俺らしくない」
ぼやくように呟いて、がしがしと頭を掻き乱す。

考えてみれば、俺がシャルを相手に遠慮しなければならないはずだ。確かにまあ面食らったが、だからなんだという話である。

無論、俺が魔法使いに師事していた過去は隠し通してもらわなければならない。奴もまた同じ立場である以上、安易にバラすような真似はしないだろうが。

――ほかの魔法使いならよりにもよって、ウチの自慢にもなるだろうに。

事実、誰にも知られたくはない。それはシャルだって同じのはずだ。たぶん。

「ったく、いったいなんの師匠は絶賛指名手配中の賞金首ときたものだ。関係者だなんて本当にただの挨拶のつもりだったのかね、あの女は……

何もかもが判然としないままなのだろうか。そもそもどこまで知っているのか。

だ。そういう精神攻撃なのかとさえ思ってしまう。今までの一年間で、まったく接触して来なかった理由も不明

というか、あのクソジジイに娘がいるなんて聞いていない。事に嵌まったものだが。

だろうか。

あのクソッタレの師匠とは、実に二年近く行動を共にした。

上、娘は完全に放ったらかしだったということになる。

引っかかるのは、彼女が意図的に黙ってやがったのその俺が知らないという以妹弟子と言ったところだ。姉弟子ではない。ということは、マ

イアや俺よりあとに師事したということになるのだろうか。

……娘なのに？　時系列が合わないというか、何か奇妙な引っ掛かりがある。

セルエと一度、話がしたかったら、今この街で頼れるのはセルエだけだ。義姉とは連絡がつかないからな。

「本当、やってられんぜ……」

望み薄とは思うけれど。とりあえず、何もしないよりはマシだ。

シャルに弱みを握られ、別の弱みをレヴィに握られ。どうして俺は、こんなにも嬉しくない板挟みの中で生きなければならないのだろう。

この世界に神様がいるのかもしれない。

「――待たせたみたいね」

と。噂をすれば、ではないが、そこでようやくレヴィが姿を現した。後ろにはピトスと揃い踏みだ。俺は壁から背を離し、連れ立って歩く四人の最後尾に回った。

「んじゃ、行くか」

かぶりを振って意識を切り替える。これから迷宮に潜る以上、いつまでも過ぎたことを気にしてはいられない。

先頭をレヴィにして、五人でぞろぞろと建物の中に入った。
豪華な、煉瓦造りの建築物。俗に《組合会館》とも呼ばれる建物だ。
その運営母体は、正式名称を《迷宮管理組合》といい、その名の通り、迷宮に入る冒険者の管理を一手に担う王家直属の組織である。
冒険者に必須である迷宮立ち入り許可証の発行から、役立つ種々の道具の販売、宿泊施設や酒場の運営、果ては緊急事態に対処する専属魔術師の詰め合い所までが設置された、まさに冒険者のための施設。
国内にある迷宮の全てに支部が置かれており、その受付を経由しなければ迷宮に入ることはできないのだ。建物が、迷宮の入り口の正面を隠すように建てられているからだ。
もっとも、ここまで規模の大きい管理局は稀な部類だ。基本的には、場所だけあって無人ということのほうが多い。
俺たちは入り口正面に位置する、迷宮受付に向かう。
担当者にそれぞれの《許可証》を提示して、立ち入りの許可を貰うためだ。
この許可証は、迷宮で採れる《魔晶》と呼ばれる宝玉の埋め込まれた金属板で作られており、それ自体に高度な魔術がかけられた一種の魔術道具――魔具だ。冒険者の身元と実力を証明するとともに、いざというときの命綱にもなる優れものである。

当然、偽造は不可能だ。古代の技法を用いた魔術で許可証にかけられている術式自体が古代の技法を用いた魔術であり、だから迷宮由来の魔術な魔術によって創り出されたものであり、だから迷宮由来の魔術切干渉できない。それこそ、魔法使いクラスでもない限り。

この許可証に刻まれたランク次第で、立ち入りが認められなろん迷宮内では、怪我をしようが死んでしまおうが、何が起このだが、かといってそんな危険地帯に弱い魔術師をわざわざ入順番に並んで、俺たちは受付へと許可証を提示する。俺の番になって許可証を見せると、受付の担当者である女性はこの反応を見られたくないから、俺はわざわざ最後尾に並ん

「――結構です。どうぞお気をつけて」

やがて、担当の女性はそう言った。仕事だけあって、さすが及はしない。俺は真顔で、先を行く四人と合流した。

気づいているのは、初めから知っているレヴィくらいのもの少し気になってシャルを見やると、こちらは先ほどからずっとが彼女の《普通》であり、ほかの人間がいる場でそれを崩すつもりはないようだ。

押し殺したような無表情で、黙々とレヴィたちの後ろを歩いている。
奥の間に設置された、巨大な石板に五人で乗る。これに乗ると転移――いわゆる瞬間移動の術式が刻まれており、対になるもうひとつの石版まで一瞬でワープできる。
これもまた、現代では再現不可能な古代技術の産物である。
上に乗り、代表してレヴィが起動のための魔力を入れる。
仄かに光を発し始めた。淡い白色の燐光が、俺たちの周囲を幻想的に包んでいく。
そして、視界が白に塗り潰された。
魔術による転移独特の浮遊感を味わいながら、俺たちは迷宮の入り口へと辿り着く。冒険者だけが感じることになる感覚だ。転移魔術を使える魔術師は、現代にいないのだから。
何回経験しても慣れない感覚だ。瞬間、足元の幾何学的な陣に襲われながら、俺たちは迷宮の内部へと足を踏み入れる。

――オーステリア迷宮区。
既踏破迷宮。全三十層。地下施設型。踏破難度は中級相当。致死性の罠はなし――。
そこまで危険度の高い迷宮ではないが、とはいえ油断は禁物だ。どんなに弱い魔物の攻撃であろうと、まともに食らえばヒトは死ぬ。
俺たちの目標は第十五層への到達。この迷宮全体の半分を進むことになる。

ちなみに、コンスタントに中層まで突破できるパーティは、ンと見做されるレベルである。こちらの実力を見越して、学院上げていた。いくらなんでも学生に言い渡す課題じゃない。さて。厄介なことにならなければいいのだが。

※

――そもそも迷宮とは何か。

魔物がいて、罠があって、その奥に宝が隠されている――なんて、そんな建造物が普通に存在するわけは当然ないだろう。

ロールプレイングゲームたものだと考えるのが普通ではないのだから。あらゆる迷宮はその《誰か》を、特定の個人にまで限定することは難しい。

迷宮の成立は、どれほど新しいものでも千年以上の昔に遡る学で主流とされている結論だからだ。

遥か太古の時代、現代とは比較にもならないほどの力を持っていたとされる当時の魔術

師たち――それは賢者と呼ばれる者であったり、あるいは勇者であったりした――が秘術の限りを尽くして造り出した魔術的要塞。あるいは結界、工房、研究室、宝物庫……その名残が、現在における迷宮の起源だとされている。

そう、迷宮とは初めから迷宮として造られたものではなかった。

占代の魔術師たちが造り出した魔術的建造物――要するに《結界魔術》が、術者の死後、遺された魔力の暴走によって迷宮へと進化、したものなのだ。

結界に遺された濃密すぎるほどの魔力。それは年月を経て次第に濃度を増し、その場の環境を超自然的なものへと変化させる。経年劣化し、瘴気と化した魔力はそのまま周囲の環境さえ変質させ、結界の内部は時代を重ねるごとに魔境へと変貌を遂げていく。

結界そのものが、時間とともに迷宮へ変貌してしまうわけだ。

その変遷はオーステリア迷宮で数百年ほど、かの《五大迷宮》は千年クラスだと言われている。これは、かつての結界が迷宮に変わってからの期間であり、成立はやはり最低でも千年前だ。

古い迷宮ほど深く長く、そして危険な場所に変わっていく。

そして魔物とは、迷宮内の瘴気から自然発生的に生まれ落ちる、通常の生態系から外れた魔術的な擬似生命のことだ。

歪め、捻じ曲げられ、行き場をなくした魔力は瘴気と化す。
そして瘴気は魔物を生み出す。迷宮に魔物が存在しているのは、迷宮の奥へ進めば進むほど、誂えたかのように魔物が強力、深部ほど瘴気の質と密度が上昇していくからにほかならない。
ほど、強く凶悪な魔物が生まれるのは道理である。
そして魔物は、その身体の維持にもまた魔力を必要とする。
に、必要とする魔力（エネルギー）の量は強い魔物は、基本的に自らが生まれ落ちた階層から移動することがないのだ。魔力の少ないほうに進めば自らの身体を維持できないし、かといって魔力の多いほうに向かっては自らよりさらに強力な魔物に餌とされてしまう。
奥に行くほど魔物が強いという現象は、このために起きているものだった。

※

俺たち五人は、隊列を組んで迷宮を進んだ。
といっても別に特別な戦路は基本的に狭いため、ほかの選択肢などそもそもない。
だ。オーステリア迷宮の通まっすぐ一列に並んだだけ

先頭は俺が引き受けていた。五人の中で最も迷宮に慣れている、という理由からレヴィに推薦されたのだ。まあ、彼女が提案しなければ自分から言い出していたため、そこに別段の不満はない。むしろ先頭以外を歩かされそうになったらどうしようかと思っていた。

「君がいちばん、迷宮に慣れているだろうからね。当然、君にがいいのだろう。いいさ」とはウェリウスの指示を出してもらうほうが実際、魔力量的に最も不安のある俺は、手より口を出すほうだった。

そんな会話を経て、暫定的にリーダーを引き受けることになった。並ぶ順番は俺が勝手に決めた。隊列のことに話を戻そうヴィを選んだ。基礎的な魔術の技能と身体能力に優れ、かつ俺まず前から二番目にはレとの連携が最も上手くいくことが主な理由だ。腰に小刀を提げている彼女は、実のところ近接戦闘も得意だった。あらゆる面で弱点がない。

三人目にはピトス。彼女は、前後どちらから敵が現れても援護に回れい（らしい）ことからこの位置だ。中央に立ち、治癒魔術を使える彼女線でもあった。最も安全な位置にいてもらうべきだろう。

は、いざというときの生命持つこの男は、言い換えれば殿はウェリウスが自ら引き受けた。最低でも四属性に適性をばそれらの属性に対応する魔物への感知能力が高いということでもある。基本的な索敵は

俺が引き受けるが、さらにダメ押しとして後方からの敵襲に備えてもらった。遠距離火力に優れていることも鑑みている。

というわけで、余ったシャルが必然的に四番目となった。「大抵のことはひと通りこなせる」という自己申告を信用した形と言い換えてもいいが、俺としては、単純に自分から離れた位置に立ってくれたことを安堵していた。あるいはそれも、彼女の意図通りなのかもしれないが。なんというか、なんとなく気まずいのだ。

ともあれ、あえて言わせてもらおう。

正直、この布陣にはもうほとんど隙がない。いっそ完璧と言ってもいいくらいだ。

魔術学院のエリート揃いという豪華すぎるメンバー（俺除く）。中でもレヴィとウェリウスの実力は抜きん出ており、本職の冒険者と比較してさえ勝るほどだ。

――これ、なんなら普通に完全踏破まで狙えるんじゃないの？

そう慢心してしまうくらいだったが、もちろんそんなことをするつもりなど俺には毛頭ない。今はむしろ、レヴィがそれを言い出さないか戦々恐々としている。

あえて弱点をあげつらうなら、即席パーティゆえの連携訓練の少なさか。だが、それはここで論じるべきことじゃない。そもそもその穴を埋めるために来ているのだから。

今日の目的は攻略ではなく、あくまでも訓練だ。そこは徹底したい。

したかった、のだが。
――ひとつ問題が生じていた。
「いたぞ。前、角を曲がった先に三体」
索敵の結果を報告する。こういった感知系の魔術は得意だった。
「わかった」
と呟いてレヴィが駆け出していく。使う魔術は、もはや魔術とさえ呼べないほど単純な身体強化のみ。それだけで、行き遭う魔物を全て小刀の錆に変えていくレヴィ。矢のように魔物へ接近しては、片手の一閃で軽々と屠っていく。
第一層の魔物如き、もはや彼女にとっては敵ですらなかった。
そう、それが問題だった。
味方があまりにも強すぎるのだ。
さすがは普通魔術科のエース。その面目躍如といったところだが、今回ばかりはちょっと具合が悪い。まるで訓練にならないからだ。来た意味がない。
俺の仕事はといえば、索敵のほかには、レヴィが殺した魔物が落とす《魔晶》を、ちまちま拾っていくことくらいだった。

ちなみに、この《魔晶》が通常の冒険者における収入の大半を占めるものだ。

魔力それ自体が結晶化したという、魔術学的には《架空物質》と呼ばれる鉱石の一種。

基本的には《魔力を溜める》か、《溜めた魔力を外に出す》かという二種の機能しか持たない、いわば使い捨ての電池であり、様々な道具を作り出すことができた。

それ自体が物質化した魔力であるという特性から、魔術が使えずとも魔術の効果を発揮できる優れもの。誰が使っても同じ効果という普遍性があり、おまけに迷宮でごろごろ手に入るため値段もそこそこに安価。いいこと尽くしである。

唯一の難点は、人間の魔力を注ぐことができないこと——つまり使い捨てであることくらいのもので、これだってむしろ、そのお陰で冒険者はメシを食えると言える以上、もはや文句のつけどころもなかった。

魔晶の加工で稼ぐ《錬金魔術師》なんて、今や魔術師志望者の進路として特に人気な職種のひとつだ。売れっ子の錬金魔術師は、地球で言うところの冷蔵庫や簡易コンロに似た道具さえ製作できるというのだから、その利便性は語るまでもないだろう。

無論、魔晶それ自体はともかく、その加工品ともなると値はそれなりに張るのだが。

その魔晶を拾って歩いた。これらは迷宮から帰ったあとで、管理局が換金してくれる。

大した額ではない。そもそも別に稼ぎに来たわけでもないけど、まあ、拾えるものは

拾っておこう。

※

なんのイベントもないまま、第二層へ下りる階段まで辿り着いた。すでに完全踏破済み――つまり完全に地図化されている迷宮なら、魔術師なんて進路は選ぶべきではない。もっともこの第一層ですら、普通の人間では入ることさえ難しい。先にも述べた通り、迷宮には瘴気と化すほど濃い魔力が満ちている。そして重要なのが――魔力は基本的に、人体にとって毒だという点だ。

もちろん、単なる魔力ならば一般人でも扱えるほど毒素が低いが、なんというか、言うなれば《即座に健康へ被害が出るレベルではありません》といった感じだろうか。

けれど、瘴気と呼べるまでに至った魔力では話も別である。ひと呼吸で人体を侵し、耐性のない人間ならば数分のうちに死へと至らしめる。一層ならばまだしも、十層にもなれば一瞬で肌が融け出すほどだ。体内の魔力を操れる魔術師だ

からこそ、癘気による汚染を防ぐことができるのだ。
毒を以て毒を制す――。
その格言を地で行くのが、迷宮魔術師という冒険者だった。
「……なんか張り合いないわね。迷宮ってこんなに楽なところだっけ」
あの真面目で厳しいレヴィの口から、そんな言葉が出てしまう。
無理もないことだとは思うが、それでも少し驚いた。俺は釘を刺すように、
「下に潜ればそうも言ってられないぞ。油断は禁物、ってヤツだ」
「そうね。ありがとう、アスタ」
あっさりと笑うレヴィだった。これは釣られたかもしれない。
あえて言ってみせることで、メンバーの緊張感を保とうとしたのだろう。俺が苦言を呈するところまで含めて、彼女の作戦通りだったらしい。
……本当に面倒な女である。
まあ、とはいえ楽な層でいつまでも燻っているわけにはいかないのも事実だ。安全であるに越したことはないが、戦闘にさえならないのでは訓練のしようもない。
五層を越えれば、俺たちも本腰を入れる必要が出てくるだろうが。

「……仕方ない。使うか、近道」
しばし考えてから俺は言った。
本当なら今日は五層程度までででやめておく予定だったのだが
「近道……ですか？」
首を傾げたピトスに、軽く頷いて答える。
「ああ。七層まで飛ばせる近道が、この近くにある」
「そんなものがあるんですか？　地図には載ってませんけど……」
そもそも、基本的には一層一層下りていくのが迷宮という場所である。
だが、何事にも例外というものはあるわけで。
「結構あるものだよ、抜け道。でも、そういう情報を管理局は販売品の地図に載せない」
「どうしてです？」
「冒険者のランク判定に響くから」
歴戦の冒険者にとっては、常識といってもいい情報である。
扉を竦めて俺は言った。
どの階層まで進むことができたか。
――どの迷宮において、
これは冒険者の実力を示す上で最も使われる指標のひとつだ。
事実、許可証に埋め込まれた魔晶は、周囲の魔力濃度を記録することで持ち主の実力を

判定している。
だから、この手の使える情報は、そうそう一般には膾炙しないものだった。冒険者にとっては、情報さえひとつの商売道具だ。それが命を繋ぐとなれば価値は計り知れない。
「慣れた冒険者なら先駆者から教わったり、あるいは情報を買ったりするけど。そういう横の繋がりなしに、偶然で見つけるのはかなり難しい」
「へえぇ……詳しいんですねえ」
感心したように言うピトスに、俺は苦笑して首を振った。
「一応、元本職だから」
触らすと嫌われるけどね。伊達に酒場に行っていない、ということだ。「まあ、あまり言いそれで、その抜け道とやらはどこにあるんだい？」
訊ねてきたウェリウスに頷きを返し、先導して歩き出す。
抜け道までは、数分も歩けば辿り着いた。
「――ここだ」
俺は視線で抜け道の場所を示した。なんの変哲もない、通路の途中のただの壁である。
しばしあってから、小首を傾げてピトスが言った。
「……行き止まりですよ、アスタさん？」

「そうだね、見た目はただの壁だ」
思惑通りの反応に、少し笑って俺は答えた。
レヴィが肩を竦めて言う。
「普通に見えるようには設置されてないってことでしょう？」
「その通りだね。時間もない、開けようか」
迷宮の攻略には時間制限がついている。当然ながら死亡事故もあり得る場所において、《ただ帰ってこない》のか、それとも《帰ってくることができない状況》なのかの判断は外部からだと難しい。
そのために設けられた制限だ。規定の時刻を過ぎても戻ってこない場合、管理局によって救助のための魔術師隊が派遣される。場合によっては、次回以降の立ち入りが制限されることもあるのだ。迷宮に挑む資格なし、と。
冒険者たちがどこにいるのかだけは、許可証によって把握できる。そのまま発信機としての役割を果たすからだ。許可証は、あらゆる意味で冒険者にとって命綱である。
今回の制限時間は二刻——地球で言うところの約四時間に当たる。本来なら数日以上の長い期間をかけて潜る迷宮攻略において、この程度の時間はお試し程度でしかない。
冒険者にも二種類がいる。

攻略を目指す者と、日々の稼ぎを求める者。まあ、どちらも全力を賭して行う《攻略》とでは装備も期間も大きく変わってくる。今回は、ちょっとした稼ぎに行く程度の準備しかしていない。

当然、制限時間のうち約半分は帰路に費やす計算になるため、実際の冒険に当てられる時間は二時間程度といったところだ。

現在までで、使った時間はまだ二十分そこそこ。

攻略に使える時間は充分残っているが、急ぐに越したことはないだろう。

「そんじゃ――開けるぜ」

そう告げて、俺は片手の指を行き止まりの壁に当てた。

指先に魔力を集中させる。その表れである無色の光が、人差し指の先で輝きを放っていた。

一定間隔で設置された魔力灯を除けば、この迷宮に光源はない。地下へ地下へと進んでいく仄暗い迷宮の中では、魔力の光も頼りになる。

「――――」

俺は魔力を灯した指で壁面をなぞる。

直後、壁に刻まれていた魔術陣が反応する。石造りの壁面に円形の紋様が浮かび上がっ

て、魔術式が起動した。

魔力というエネルギーを得た術式に従い、壁はまるでSF小説の扉のように、重い音を立てながら床の下へと沈んでいく。印刻使いという職業柄、術式の把握はそれなりに得意な分野だった。かつては師に連れられ、幾度となく迷宮に潜っていた経験もあり、この手の小技は慣れたものだ。

……地球のゲームで言うなら、たぶん《盗賊》とか辺りの立ち回りなのだろう。本職はあくまで《魔術師》だというのに。どうにもそんな感じがしない。

やがて、壁の奥に隠されていた階段が姿を現す。

隠し通路には当然、明かりになるものがない。まるで奈落へと続いているかのような、暗く重苦しい雰囲気の階段が下へ下へと続いている。澱のように淀む瘴気が、生暖かい風となって頬を撫でていた。

俺は後ろを振り返らずに、少し声音を落として告げる。

「――レヴィ、明かり頼む」

「了解。……アスタ、どうかした？」

「――」わからない。「何か違和感がある。ピトスとシャルも、できれば光を作っておいてくれ。何人かで分けて保持してたほうがいい」

中央の三人にそう頼んだ。
周囲を旋回するように、ふよふよと浮かぶ光の玉。冒険者ならばほぼ習得必須と言っていい術式だ。剥き出しの魔力をそのまま用いているため、頼りないよりは遥かにマシだろう。
魔物の気配はない。なさすぎると言ってもいいくらいだ。
「……この先の通路を下りれば七層だ。魔物も強くなってくるってのに、気をつけろよ」
俺は言う。殿のウェリウスが訊き返すように、
「罠の類いは、警戒しなくてもいいのかな」
「ああ。この手の隠し通路は大抵、わざわざ罠なんて仕掛けないだろう」
な。持ち主が自分で通る道にもっとも年月を経て、今ではいわば生きた魔術結界であり、その作り手が死んでなお変化を続けている。
とは魔物の蔓延る通路となってしまっているということだろう。迷宮
「なるほど。一気に三十層まで降りられないのは、盗難対策といったところかな」
興味深いとばかりに推測を深めるウェリウスに苦笑を返す。
「かもしれないけどな。その辺りは、魔術史学の教授にでも訊いてくれ。あの授業、あれで結構面白いぞ。――そろそろ行くか」

告げてから歩き出す。広さ自体は廊下とそう変わらない。
階段はまっすぐ続いていた。魔力がある以上、魔物はいると思うべきだろう。
「罠がないとは言ったが、ら、普通に数出てくるだろうし。用心はしておいてくれ」
振り返らずにそう告げる。もっとも、誰も油断はしていないが。
通常の順路を取らずに、あえて誰も使わないような道を選んだのが気を引き締めたようだ。
れない。逆にそれで、全員——だが、結論から言おう。その警戒には意味がなかった。
魔物が、まったく現れなかったのだ。

※

迷宮攻略開始から、およそ三十分強が経過した頃。
俺たちは、第十層まで辿り着いていた。いや、辿り着いてしまったというべきか。
速度としては驚異的だ。五人の中には存在してい

ない。どこかべったりと重苦しい沈黙だけが、俺たちを包み込んでいる。

「……なんだか、かなり広くなりましたね」

その静寂を突き破るように、一変した周囲の光景を見てピトスがそう小さく零した。

言葉の通り、十層に入ってからの通路はかなり広さを増している。

裕で余るほどの幅に、高さも身長を数倍してなお足りないほどというより広間に近い規模にまで変わっているのだ。

「瘴気が濃ければ濃いほど、周囲の環境は変わっていく……」

呟いたのはレヴィだ。迷宮が生きた結界と呼ばれる所以である。

「そして、ひとつの階層の規模が大きくなるということは、現れる魔物も巨大で強力なものが増え始める、ということ……なんだけど」

「大型の魔物どころか、小型の魔物すらまったく現れないね」

ウェリウス。余裕の笑みは健在だが、どこか考え込むような表情がまったく現れなくなっている。

そう、それがおかしい。一層を越えてからというもの、魔物は絶対にあり得ない。

魔物は、迷宮の瘴気によって自然発生的に現れる。つまり、いくら冒険者が魔物を狩ろうと、倒された次から魔物は現れるはずなのだ。空間の瘴気量が飽和するまで、魔物の発

生はなくならない。そのサイクルは、ほとんど無限と言ってよかった。

「アスタはどう思う？」

レヴィに水を向けられ、俺はしばし考え込んでから答える。

「……何かあるな。それは間違いない。正直、嫌な予感がする」

「というと？」

「魔物に遭ってないだけじゃない。冒険者にすら一回も出会ってないだろう」

オーステリアほどの迷宮なら、日に百近い冒険者が潜ることもあるはずだ。その一切を見かけすらしないというのは間違いなかった。

悪い予感は得てして当たる――まして俺だけではなく、レヴィまで同じ感覚を抱いているというのなら。

「この層には、確か大広間があったわね」と、レヴィが言った。

「とりあえず、そこまでは行ってみることにしましょう。いずれは越える壁だし――」

そうでなくとも、オーステリアの長たる《ガードナー》の血を引く彼女が、この問題を放置できるはずもなかった。

「いいのか？　広い部屋には当然、相応の魔物がいるものだ」

ゲームでたとえるところの、ボスモンスターとでも言うべきか。迷宮ではところどころ

に、その空間の瘴気を一身に集めた大型で強力な魔物が発生するという性質があった。

確かにいずれは越える壁だが、それが初日の今日でなければならない理由はない。

「もちろん、みんなが戻るってどうする？　とレヴィは問うというなら考えるけど――」

帰ろうと言い出す者は、この中にひとりもいなかった。

俺は頷き、告げる。

「――わかった。中だけ見てみることにしよう」

警戒は怠らない。常に周囲を探っている。印刻魔術のいちばん の利点は、文字を石や魔晶に刻むことで即席の魔術的道具を創り出せることにある。一度作れば、あとは魔力を注ぐだけで発動するそれは、今の俺にとって重要な命綱だ。

――その魔具が警鐘を鳴らしたのは、十層の大部屋の前に立ったときだった。

重厚な、どこか威圧感さえ纏う石造りの巨大な扉。いかにも大物がいます、といった風情だ。天井までそびえるそれは、普通に腕力で開けるとなると自動で開いてくれる。

魔力が通っているため、触れれば自動で開いてくれる。

「魔物がいるな。一体。まあ、たぶん番人だろう」

俺は言う。いて当たり前なのだが、なぜかそのことに安堵してしまうくらいの気分だ。

「中、見てみるの？」

ふと口を開いたのは、それまで黙っていたシャルだった。相変わらず感情を押し殺したかのような、無色の瞳でこちらを見詰めている。

俺はレヴィに視線を向けた。暫定上、パーティのリーダー役を担っている俺だが、最終的な判断は彼女に任せるべきだろう。十層の魔物程度ならば、余裕で勝てるだろうという皮算用もある。

「……入りましょう」結局、レヴィはそう決めたようだった。「なぜ魔物が少ないのかまではわからないけれど、逆を言えばチャンスとも取れる。ほとんど消耗のない状態で戦えるのなら、それに越したことはないでしょ？」

「そうだね。案外、今日だけで楽に十五層まで辿り着けるかもしれない」受けたのはウェリウスだ。「もし勝てないようなら、逃げればいいだけの話でもあるし」

軽く言うようでいて、その瞳には自信と警戒の両方が浮かんでいるようだった。

「……」一瞬、俺はウェリウスの様子を探る眼で見てしまう。

――そう。不思議があるというのなら、俺には仲間である彼らのことだって、充分に不思議に感じられている。あるいは不審だと言い換えてもいい。

なんというか、あまりにも自然体すぎるのだ。レヴィはともかく、シャルやピトスたち

だって気負う様子がない。ウェリウスに至っては余裕さえ感じられる佇まいだ。

それはおかしい。なぜならレヴィはともかく、ほかの三人は、いくら成績上位とはいえただの学生でしかないはずなのだから。普通ならもう少し緊張していてもおかしくないのだから。

――いや、していないほうがおかしい。

なんと言うのだろう。修羅場慣れしているというか、どうも《戦い》というものの空気に慣れている感じがするのだ。この程度の迷宮、脅威でもなんでもないかのように。

その事実を、どうしてか俺は頼り甲斐があるのだとは見られないだろう。

「……アスタ？」

と、黙り込んでいたからだろう。レヴィに声をかけられ、俺は誤魔化しのために頷く。

「いや。全員、異論がないならいい。――入ってみるか」

「撤退の指示は？」

「俺が出そう。もちろん、勝てそうならそのまま突破も考える。前衛は俺とレヴィ、ウェリウスとシャルには後衛を頼む。ピトスは俺たちのカバーに入ってくれ」

大雑把な指示。実際、普通に考えれば問題のない布陣だろう。

――普通に考えれば。

普通じゃないから問題なのだ。扉に軽く手を触れ、魔力が自そうして部屋に入った瞬間、俺は反射的に叫んでいた。

「――《巨人(ギガース)》ッ!!」

反応は、後ろの四人も迅速だった。雷の意も持つ《巨人》のルーン印刻、それが為した雷撃の槍を追うように、レヴィがナイフを抜き放ち駆ける。その身体を淡く包む光は、ピトスが構築した付加魔術だろう。その背後でシャルが詠唱に入り、その後事態にも備えられるよう腕に魔力を集めている。

そして。目の前には、バケモノがいた。

歪な、見ているだけで精神を抉られる不快なヒトガタ。二足ヒトと呼ぶ者はいないだろう。数多の生物を強引に混ぜ合わせた醜い肉の塊として存在していた。炎で焼け爛れた幾人かの人間を、ぐちゃぐちゃに混ぜて創ったかのようなカタチを自立するそれを、けれどしている。

その胸の中心を、俺が撃ち出した雷の槍が貫いた。肌が焼け焦げ、心臓の位置に大きな空洞がぽっかりと開く。だが怪物の胸は穴が開くと同時に再生し始め、ずぶずぶと気味の悪い音を立てながら見る間に元の形へと戻っていく。

――自動再生。生半可な攻撃では、この怪物を殺すことはできないらしい。

だが、再生に必要な一瞬の隙でレヴィには充分だ。穴が再生するより速く怪物に肉薄したレヴィが、その首を一刀の下に斬り落とした。ずぶり、という肉の沈み込む音も束の間、怪物の首はあっさりと胴体と別れを果たした。

俺は同時に叫びを上げる。

「下がれ、レヴィ!!」

その声が届くよりも先に、レヴィは怪物から距離を取っていた。目の前のソレが、首を落としたくらいで死ぬとは彼女も考えていなかったのだろう。首を落とした速度そのままに、彼女はそのまま怪物の後ろへと駆けていく。俺もまた距離を詰めながら、背後の三人に指示を出す。

「儀式魔術だ！　大技で全身消し飛ばせ!!」

肉体を再生する魔物ならば、再生さえ許さない高火力で殺し尽くすのが王道だ。俺は懐から護符を取り出し、先ほどのように投げて叫ぶ。

「――《氷》！」

投擲した自作の魔具が、発声に呼応して魔術に変わる。それは高密度の冷気となって、怪物の胴体を凍らせていった。氷とは即ち停止であり、動きを止める概念だ。

だが胴体を凍らせることができても、斬り飛ばされた首のほうはまだ生きていた。宙を舞った首が、その視線だけでこちらを見据えている。首だけで宙に浮いていたのだ。

――ぞっとした。

生首の口が開かれる。そこに集う魔力の密度は、確実に攻撃の気配を伝えていた。

その背後に立つレヴィと、その一瞬、わずかに視線が交錯する。彼女の視線が俺を貫き、俺の双眸に彼女が映る。それだけで、言葉は必要としなかった。

直後、目の前に、目には見えない魔力の塊が現れる。それは戦闘用術式の一種だが、その防御による防御壁だ。最も単純なピトスが創り出した、魔術得意だというピトスの言葉に偽りは見られないようだった。

その向こう側で、レヴィが――凍りついた胴体に向かって走り寄る。首の対処は俺が、胴の対処はレヴィが。言葉なく交わされた分担の通り、互いの全てに信頼を寄せる。

そして。レヴィが――凍りついた胴体を蹴り飛ばした。

魔力で強化された身体能力は、それだけで砲弾にも等しいほどだ。痛烈な勢いをそこから繰り出される蹴りの威全身に受けて、怪物の胴体が粉々に砕け散る。

一拍の間。それを塗り潰すかのように、生首の口が何かを呟く。魔術だ。たとえ胴体が砕かれようと、生首の側は生きていた。

詠唱によって成立した術式が、無色の魔弾となってこちらに向けられる。その数は優に十を超え、その威力は一発でヒトを貫いて余りある。

目の前の防御壁。それをもってしても、防げるのは五、六発が限度だろう。俺は無言で防御壁に手を触れる。ピトスの創り出した術式を、上から指で軽く撫でた。

「――《財産》」

ルーンを用いて、他人の魔術そのものを強引に書き換える、力ならば、相手の攻撃を利用する術式に変えてしまえばいい。ただ防ぐには足りない防御瞬間――防壁に魔弾が着弾した。

音はない。術式を為す魔力それ自体が、目の前の防壁に吸の意味を持つ《財産》のルーンが、単に防ぐだけの物理的なする防壁に書き換えていた。

やがて、一秒にも満たない時間のうちに、全ての魔弾が着ろなく吸収した防壁は、今や膨大な魔力を内部に秘めている力があったということだ。それだけ怪物の攻撃に、威

その全てを、俺は逆に解放する。貯め込まれた強大な魔力拡散してばら撒いたのだ。――ダメ押しであると言っていい。

俺はこの空間そのものに

ウェリウスとシャル。ふたりの攻撃が、それによって威力を魔術が完成した。ウェリウスは粉々になった胴体へ、シャルへ、それぞれ攻撃を撃ち放つ。

片や火炎。高熱の火炎が、肉片に纏わりつく氷ごと胴体を焼却 処分する。

片や岩石。強烈な勢いを持つ石塊が、生首の口から内部を貫き爆発した。

これでトドメだ。いかな再生能力を持つ怪物でも、再生する肉体そのものがこの世から消えては戻れなかった。

上手く運んだほうだろう。ロクに訓練していないにもかかわらず、驚くほどの連携を俺たちは可能としていた。その違和感はひとまず措くとしても、問題なのは、倒したその魔物のほうだった。はっきり言ってしまおう。

――強すぎる。

とてもではないが、十層程度に出て来る魔物ではない。異常な再生能力に加え、自力で魔術を使うほどとなると、どう弱く見積もっても三十層――オーステリア最下層レベルの魔物だった。こちらが無傷で済んだのは、その見積もり以上に味方が強かったからに過ぎない。ほかの学生なら、いや、プロの冒険者でも上位でなければ死んでいた。

「――どうやら、考えなきゃいけないことが出てきたみたいね」

レヴィが、ことさら明るく口を開いた。彼女も同じ考えらしい。
「どう？　一戦終えたことだし、ひとまず休憩にしましょう」
その提案に反対する者は、やはりこの場にはいなかった。

※

大部屋の先。通路の奥まった部分に結界を敷いて、そこを暫定の休憩所とする。地図を見たところ、いい具合に行き止まりになった場所が見つかったのだ。
ここなら索敵の方向が正面だけで済むため、そうそう気を張る必要もない。それは同時に逃げ場のない袋小路だという意味も持っているけれど、周囲に冒険者の気配も――感じられなかった。
何もいない。誰も。迷宮であるからこそ、何かがなければおかしいというのに。
「――どうなってるんだ、これ……？」
俺はぶつぶつと言葉を漏らす。考えを纏めるときは、口に出すべきだというのが持論だ。
何より、この場所には俺以外にも、優秀な頭脳が四つあるのだから。その力を借りない手はないだろう。

「……あれ、普通の魔物じゃないな」
しばし考えてから、そう呟いた。その意味がわからなかったのか、ピトスが首を傾げてこちらに向き直る。
「どういう意味です、それ……？」
「確かに。気づいたことがあるなら教えてほしいな」
ウェリウスはやはり笑顔。余裕のあることだ。
見れば全員がこちらに視線を向けている。その表情は様々だったが、どれも俺の言葉を待っているらしいことだけはわかる。俺だって正直、何もわかっていないのだが■
とはいえ情報は共有する必要がある。数秒だけ考えを纏めて、それから俺は口を開いた。
「さっきの魔物は、たぶん人間が――魔術師が創り出したものだ。おそらく合成獣の一種だろう。少なくとも自然発生したモノじゃないことは間違いない」
「どうしてわかるんです？」
端的に答える。「俺だって別に、魔物はいないからだよ」ピトスの問いに、
「あんな魔物はいないけどな。でも、あれはない。魔物は基本的に実在する生物か、もしくはなんらかの共通幻想を模す。つまりは元ネタがあるってことだ」
「そうだったんですか……」

狼や蝙蝠といった普通の生物から、スライムやゴーレムといった幻想の存在まで、魔物は様々な形を取って発生する。あんな歪で中途半端な魔物などに魔物がいないのは、たぶんそれが理由だろう」

「おそらく、誰かが迷宮の魔物を材料にして、新しい魔物を創り出したんだ。ほかの場所

つまり、正確にはいなかったわけじゃない。一か所に、一個の存在としていただけで。

「……誰が、そんなことを……」

俺が放った推測に、ピトスが肩を震わせる。

「わからない。ただ、かなり実力のある魔術師だってことは間違いないだろう。迷宮や魔物に関する造詣が深い、高位の魔物使いとか……」

「でも、それは――」

「――犯罪ね。それも、明確な犯罪である。いくら迷宮とはいえ、完全な無法地帯というわけじゃないのだから。ほかの冒険者を意図的に陥れる行為は、仮に発覚すれば重罪だ。それこそ極刑に処されてもおかしくない。そう、もしそれが事実ならね」

オーステリアの守護者たるレヴィとしては、見過ごせる問題じゃないだろう。

「ただ、そう……そんなことをする意味がわからない。それがいったいなんだ。何が起きている。誰が、なんの目的で魔物を集めたというのだろう。……俺には、あえて伏せている推測がある。あの合成獣はヒトを模していた。それは言い換えれば、ヒトを材料として創られた可能性があるということ。想定していた以上の事態が、この迷宮の奥で進行しているという証左だ。奥へ進むには、かなりの危険が伴うことだろう。俺たちは魔物だけではなく、悪意ある魔術師と敵対する可能性があるのだから――。

「……あの、アスタさん？」

と、考え込んでいたところで、隣に座るピトスから声がかかった。彼女の視線は俺の顔ではなく、少し下、右手の袖に向いている。

「血がついてます。それもまだ新しい……どこか怪我したんですか？」

「――――」

思わず舌打ちしそうになった。それを堪えて、頭の中で言い訳を考える。だが結局、それらしい理屈は浮かんでこなかった。

「まあ、少しな。理由があって、魔術を使いすぎると反動があるんだ」

仕方なく事実を言う。あまり言い触らしたいことではないのだが、仕方ないだろう。こ

の状況で、そういった事情を隠すのも不義理に思えた。
「――診せてください」
ピトスは立ち上がり、すぐさまこちらに近づいてくる。その険しさがあった。俺は咄嗟に手を振って、
「大丈夫。いつものことだ、大した怪我じゃない」
と言ったのだが、意外にもピトスは聞かなかった。
「駄目です。わたしは治癒魔術が使えますから、大した傷じゃなくても治せます」
初めて会ったそのときからは、想像もできないような強い口調。食い下がることはできそうもなかった。観念して口を閉ざすと、ピトスは俺の横に屈んで背中に手を触れる。
そして、驚いたように目を見開いた。
「……これは。どうして――」
直接触れたなら、それも治癒魔術に精通している彼女なら、気づかないはずもないだろう。俺の肉体が抱えている呪いに。
でも、それを口に出されると困る。困惑した視線を向けてくるピトスに、俺は小さく首を振ることで答えた。気づいたその事実を、口に出さないように、と。

「まあ、そういうこと。昔、迷宮で呪いを受けちゃってさ。その術は使えなくなってるんだよ。いや使えないこともないけど、少し反動がね」

代わりに自分から告げる。同じ事実でも、俺の口から告げたほうが軽く聞こえるだろうという皮算用だ。いずれにせよ、迷宮の呪いなど魔術師に解けるはずもないのだから。あまり大袈裟にされるのは嫌だった。

「……そう、だったんですか」

印刻以外は使えず、しかも魔力を制限されているなんて。あまり言いたくないだろう。

「ああ。そもそも学院に入学したのも、その呪いを解く方法を探すためだった」

迷宮の呪いだ。現代の魔術師が解呪するなんてほぼ不可能に等しい。

「……治療します。少し、じっとしていてください」

やがて、ピトスはそれだけを言った。俺の意を汲んでくれたらしい。

背中に触れた彼女の手から、温かく柔らかな魔力が、じんわり沁みるように流れ込んでくる。傷ついた器官が、ピトスの治癒魔術によってその傷を塞いでいくのがわかった。

それにしても素晴らしい手際だ。目に見える外傷ならともかく、目に見えない内側の傷を、彼女は高難易度の治癒魔術を、彼女は十全に使いこなしているよ

うだった。ここまでの腕があるのなら、どんな組織にも引く手数多だろう。
ピトスの治療を受ける傍ら、俺はふと視線を感じてそちらを向いた。見ればシャルが、無言のままじっとこちらを見据えている。俺からは微妙に離れた位置に腰を下ろし、絶妙に怪訝な表情をしながら、珍妙な視線を向けて。
「……ねえ。さっきのアレって？」
視線が合わさると、彼女はそれを逸らすようにしながら小さく言った。
「いや……さっきのアレ、なんだったの」
「さっき貴方が使ってた魔術のこと。あれも印刻なの？」
逸らした視線を、まっすぐ戻したシャルに問われる。俺は軽く溜息をつき、
「そうだよ。言っただろ、俺は印刻しか使えないんだよ」
「あんな魔術、聞いたことないんだけど」ほとんど詰問するような口調でシャルは言う。「ほかの人間が作った魔術を、あとから介入して書き換えるなんて。あり得ない」
「……まあ、そういう小技は得意分野でな」俺は軽く答える。「確かに出力は出せんけど、細かい術式の操作は、これでも結構上手いんだぜ？　一応、オーステリアの学生だ」
嘘ではない。そもそも印刻魔術は、術式の質において秀でた魔術なのだから。
魔術の術式を構築することは、俗に《書く》行為に比喩される。世界には決まり切った

法則、現実、運命とも呼ぶべき絶対が厳然と存在するが、それや想像を実現さえる行為こそを魔術と呼ぶ。いわば世界は一ているることが現実だ。魔術師は魔力というインクを使い、術書き方で、正しい文字を世界に書き込む。その正確な嘘で世現実に再現する技法が魔術ということ。

そしてルーン文字は、その世界の記述そのものの一部だとは答えそのものなのだ。書き込むことで、そのままの通りにもっともそれは理論上の話であり、現実にはそう上手くはずもないのだが。

「……そう」

シャルは小さく首肯を見せる。もっとも、納得してはいないレヴィが苦笑し、それから執り成すように言った。

「さーて、どうする？　進むか、それとも戻るのか」

「レヴィさんはいいのかい？　君個人としては進んでみたい微笑むウェリウス。どこか試すようでさえあった。そして実際、俺たちがそのどちらを選んだとしても、文句ひとつなく従いそうな風情が奴にはある。決して自己がないわけではなく、むしろ強い我を持ちながら、あえてそれを隠しているとでもいうような。

「……そうね。気にはなるけれど、でも十層にいた魔物は倒したわけだし。戻って報告するほうがいいかもしれない」

一方、レヴィは冷静だった。時間にはまだまだ猶予がある。ばならない理由はないし、むしろ危険の可能性は避けたほうがだが俺は、そこでレヴィの言葉に奇妙な引っかかりを感じた。

「……」

俺は思考を加速させる。何も今日中に攻略しなければ戻る、という選択自体に不満はない。というか帰るべきだ。勇者ではなく、臆病で慎重なのだから。熟達した冒険者のほうなのだから。

だから疑念を感じたのはそこじゃない。考えろ。一年に及ぶの勘が鈍ったわけじゃないだろう。ほぼ唯一の取り柄だ。考えろ。

――思考しろ。

自らにそう言い聞かせる。

奴らは魔物を集めて、合成させ、一体の強大な魔物として創り変えた。だが――本当にそれだけか？　目にした情報は、それを肯定しているのか？

いや、違う。確かにあの魔物は強かった。だが迷宮の魔物全てを集めたと仮定するなら、

今度は逆に弱すぎる。数千にも及ぶ魔物が合わさって、あのなまじ味方が強力すぎてだとするのなら、目が眩んでいたらしい。

「――まずい」

「アスタ……？」

口から零れたひと言へ、レヴィが即座に反応した。

そうだ。わざわざ創り出した魔物を、なぜあの場に放置しへの罠ということか。誰でもいいから通りかかった人間を、馬鹿げている。そもそも普通の冒険者は攻略ではなく、あく迷宮へと入るのだから。そういった連中は十層なんて深さま層がいいところだ。罠としては機能していない。

そもそもどうして放置する？　これだけ大掛かりな策を迷宮に仕掛けておいて、だ。

「……いらなくなった、から？　いや、失敗作だから遺棄したんだとしたら――」

成功作は、どこか別の場所に置いてあるのかもしれない。成した合成獣がいるのだとすれば。

その強さは、十層にいた怪物の比ではないだろう。

「……すぐに戻ろう。思ってたよりずっとまずい展開だ。場合によっては迷宮外にまで波及するかもしれない」
「緊急を要するの？」
「確証はない。ただ、そうだった場合はかなりまずい。この状況にヒトの手が加わってるという事実を、もっと重く捉えるべきだった」
「なら事情が変わったわね」
レヴィは僅かに瞳を閉じて、そう、小さく呟いた。
それが、彼女の責務なのだから。
わかっていたことだ。スタ、悪いけどみんなを地上まで。それから管理局と学院に事情を説明して、すぐ応援を送ってもらってほしい」
「――私は、進むわ。アラみんなを巻き込めないわよ。それが私の仕事だから」
「ひとりで行く気か？」
「危険なんでしょ？　なる者として、この街の迷宮で勝手な真似は許せない」
「……いいんだな、それで？」
「ええ。ガードナーに連絡が――お前らはどうする？」
「わかった。んじゃ進むって訊ねた。思わずといった風に、俺はほかの三人に向き直レヴィがきょとんした表情

を見せる。いつも気を張っている彼女にしては、実に珍しい顔だろう。

「ちょ、ちょっとアスタ……」

慌てて言い募るレヴィを手で制し、俺はあくまで二人に向けて問う。

「どうする？　俺とレヴィは先に進むが、お前らは」

「――僕は行くよ」

あっさりと答えるウェリスだった。なんとなく、そうでないかと思っていた。

「魔物どころか、より厄介なのがいるかもしれないぜ」

「それこそ望むところだろう？　元より僕は、ただ迷宮を突破できればいいってわけじゃないんだ。せっかく来たんだったら、自分の実力を試してみたいだろう？」

「後悔するぞ」

そうは言ったが、俺はすでに勘づいていた。この男が、たとえ理由で来たわけじゃないことくらいわかる。

「構わないさ。何より、仲間外れは許せないからね」

「……お前らも、それでいいのか？」

問うと、ピトスとシャルが互いに頷く。このふたりもまた意志は固いようだ。

正直、助かったと思う。下手な魔術師ならついて来られるほうが迷惑だが、この三人は

全員が揃って学生とは思えないほどの実力を持っている。きっと頼りになるだろう。

これで全員の意志は確認できた。

ならば行動は早いほうがいいだろう。俺たちは立ち上がり、埃を払って探索を再開しようとする――そのときだった。

突如として、足元の石畳が輝き始めた。

「な――、」

慌てて目を見開く俺だが、その瞳に光が突き刺さる。

無色の発光。暗い迷宮の中では、いっそ攻撃にも等しい光の波を受け、思わず俺はよろめいてしまう。

咄嗟に懐から、ルーンの刻まれた石を投げた。《保護》――霊的な守護や魔除けとしての効果を発揮する印刻だ。物理的な防御ではなく、魔術的な干渉を防ぐ文字。

だが、もはや致命的に遅かった。

足下の魔術陣は、すでにその効果を発揮し始めている。光り輝く図形と文字。その術式と同じ文様を、俺たちは迷宮の入り口で目にしている。

「まずい、手を伸ばせ――転移陣だ！」

咄嗟に叫んだ。全員、覚えはあるはずだ。通ってきたばかりなのだから。

響く声。つい数十分前に経験した、あの独特の転移の感覚。

手遅れだった。完全に術式へと捕らわれている。今さら抵抗することなんてできない。

位置を強制的に移そうとする魔術の光が、身体の動きさえ鈍くしていた。

――なぜだ。なぜ急に――？

その答えもわからぬまま、俺は薄れゆく視界の中で必死に手を伸ばしていた。

とにかく、誰かと触れ合っている必要がある。そうすれば同じ場所へ転移されるが――

触れていない相手とは、おそらく違う場所に飛ばされるだろう。そういう術式だ。

と浮遊感が身体を襲う。転移直前の感覚だ。もはやもがくように、藁でも掴もうと俺は腕を伸ばし続ける。

そしてその手が、誰かの手と触れ合った瞬間。

※

俺たちは――どこか違う場所へと強制転移させられてしまった。

「――驚いた。まさか術式起動の最中に抵抗を受けるとはね。ことになりそうだ……」

「なぜ殺さない？　奴らは隙だらけだっただろう」

「いやいや、見てなかったのかい？　彼らは並じゃないし、中にはバケモノまで交じってたからね。そもそも結界敷いてあったし、直接行ったらさすがにだろう。面倒になるぞ」

「かといって放置はできないだろう。直接手を下すより、迷宮そのものに手伝ってもらうほうが楽だろう――」

「だからだよ。直接手を下すより、迷宮そのものに手伝ってもらうほうが楽だろう――」

※

「づ、――っ」

浮遊感からの復帰とともに、俺は辺りを見回した。危険の有無は最優先で確認しなければならない。同時に、皆が付近にいるかどうかも。

迷宮に転移陣の罠は付き物だ。結界は時間を経て、魔力が腐っていくのと比例して、なぜかどんどんと《ヒトを殺すためのものに変わっていく。こういった転移系の罠の場合、

大抵は二度と出られない奈落の中だの、魔物溢れる場所の中だの。ある程度は《保護》が効いたのだろう。幸い、辺りにそういったキルゾーンの気配は感じられない。転移そのものを止められない以上、判断としては最善だったと思う。思いたい。

「見事にばらばらにされたな……」

俺は手を繋いだ相手に声をかけた。少女は「……そうみたいね」と小さく呟くと、俺の手をぱっと払い除けて鼻を鳴らす。それから魔術で光源を確保すると、

「しかも、まさか貴方とふたりきりになるなんて――ねえ、無論、そんな余裕なんて本当はないのだが。お義兄ちゃん？」

「さっそくそれかよ……まあ余裕があるならいいけど」

互いに軽口を零し合う。

シャルロット＝セイエルファウスト。

パーティで最も連携の取りにくいその女と、俺はふたりきりに分断されてしまっていた。

「しかし、マジでまずいな……」

と俺は呟く。この状況で争う気もないのだろう、シャルもまた同じように呟いた。

「そうね……まずい」

周囲の空間が――広い。

さて、果たして俺たちの現在位置はどこになるのだろう。

「せめてほかの三人が、同じ場所に飛ばされててくれるといいんだけどな」

特にピトスがひとりだと間違いなくやばい。彼女はあくまで戦闘能力には優れていはずなのだから。レヴィかウェリスか、せめてどちらかと組んでいてくれればいいのだが……そこまで確認はできなかった。

いずれにせよ、早急に合流しなければならない。俺たちは嵌められたのだ。

「……他人の心配とは余裕なことを言った。

皮肉げに、シャルがそんなことを言った。

だが俺には、彼女が怯えているようにしか見えない。突然の事態に恐慌してしまったのだろうか。先程までとは打って変わって、酷く弱々しく見えてしまう。

「悪いけど、許可証を確認してみてくれないか？」

俺の言葉に、シャルは首を傾げて言う。

「なぜ……？」

ということはおそらく、彼女はあまり迷宮に潜った経験はないのだろう。その割に戦い慣れているのは、さて、どういうことなのか。

「ここが何層かわかるかもしれない」

経験した最大の瘴気濃度を、許可証は自動で記録する。つまり、この場所が今まで到達した中で最も深い場所なら、その記録が位置を教えてくれるというわけだ。

「シャル、お前、今までの最深到達記録は？」

「……七層までだったけど」

「なら、今日ので更新されたわけだ。見てみてくれ」

「自分のを確認すればいいんじゃないの？」

当然の突っ込み。想定通りだったため、返答はすぐに出た。

「俺はお前より深く潜ったことがあるからな。お前のヤツのほうが正確にわかる」

「……」

若干、疑わしげな表情をしたシャル。俺は気づかない振りをした。かつては二十層より遥かに深くまで潜っていたなどと、言ったところで信じまい。

シャルが懐から許可証を取り出した。

そこに記された表記を見せて、彼女は「嘘……」と小さく呟いた。

だいたいのことは予感しながらも。

それでも俺は、彼女にこう訊ねた。

「最大到達階層は、何層になってた？」

震えた声音だった。

「……三十」

そう、彼女は言った。その絶望的な数字を。

「ここ、三十層だ。オーストリアのいちばん奥の階層だ……――今回ばかりは死ぬかもしれない。

覚悟を、今のうちに固めておく必要がありそうだった。

それが死ぬ覚悟なのか、それとも生き抜く覚悟なのかは別として。

第二話 十印刻使い

前方から近づいてくる足音に、レヴィは瞬間、足を止める。二足方向の足音――魔物ではなく、それは人間の歩く音だった。

隠れる場所はない。あるいは暗がりに潜めばやり過ごすこともできただろうが、移動するまでの間にどうやってもと気づかれてしまう。

何より、元から隠れるつもりなんてさらさらなかった。

迷宮区は治外法権だ。その内部で起きる犯罪を、立証することが難しいから。だが、だからといって無法者に好き放題させることなど許せない。

ガードナーは、ただ学院を統べる一族の姓ではない。この家系なのだ。

ステリア自体を代表する街を、この迷宮を抱えるオーその庭で勝手な行為に及ぶ者を見過ごすなど、彼女が《ガードナー》である以上あり得ない。

「――止まりなさい」

そう声をかける。どうせ相手も、すでにこちらへ感づいていて。それがレヴィの思考方法だ。

悪人だと半ば断定していても、自分から奇襲なんてしない。らに恥じる生き方は選ばない。冒険者というよりも、むしろ騎士としての在り方に近い、レ

「誰。名乗りなさい」

腰の小刀は、転移元に落としてきてしまっていた。

もちろん戦力は下がるが、そんなことはなんの言い訳にもならない。

「……僕だよ、レヴィさん」

暗がりから現れた人影が、小さな声音で名を告げた。

金糸の髪をなびかせて。現れたのは、ウェリウス＝ギルヴァージルだった。

「ウェリウス。無事だったのね」

ほっとひと息つくレヴィの矜持だった。早い段階で、仲間と再会できたことは幸運だ。

また安堵したように息を漏らす。

「まあ、なんとか。どうやら近い場所に飛ばされたらしいね」

「そうみたいね。ピトスたちは無事かしら」

「同じ階層に飛ばされたと思うけど。早く合流しないとね。――気づいたかい？」

「……どれのこと？」

問題とすべき事情は様々ある。それはウェリウスにもわかっていた。

「さっきライセンスを見てみたけど、ここ、三十層だよ」

「みたいね……私もさっき確認したわ」

――三十層は、まずい。非常にまずい。

このクラスの魔物となると、さしものレヴィとて楽勝とはいかない。まして連戦となれば、逃げ帰ることさえ難易度が高いだろう。

「その上、得物まで落としてきてちゃね……とんだ失態よ」

歯噛みするように呟くレヴィ。だが、その言葉にウェリウスが首を振る。

「あれ、気づいてなかったのかい？　そうか、ひとつしか持ってないから勘違いしたのか」

「……どういうこと？」

「転移のとき、魔術的な道具は全部、弾かれてたんだよ。君が落としたわけじゃない」

「……そうきたか」

「僕自身、持ってきた魔具の大半を、転移のときに取り残してる。落とさなかった魔具は許可証と、あとはこの指環くらいだね」

そう言ったウェリウスの右手には、翡翠色の宝石が嵌め込まれた指環が輝いていた。
先ほどまでは確かつけていなかったはず、とレヴィは思う。転移後に出したのだろうか。
「お守りのつもりで持ってきたはずだったんだけどね。まさかこんな理由で出す羽目になるとは考えてなかったよ」
嘯くでもなく零すウェリウスに、レヴィも納得して首肯を返した。
「ずいぶん強力な魔具みたいね」
「自分で手に入れたモノじゃないけどね。迷宮からの出土品を改造したものらしいよ」
「道理で」呟いてから、あああ、とレヴィは続ける。「なるほど、それが理由か」
「どういうことだい？」
先程のレヴィの言葉を、今度はウェリウスが口にする。
そのことにレヴィは苦笑しながら、
「――許可証も魔具でしょ。それでも転移に弾かれなかったのは」
「わかった。迷宮に由来する道具は、転移に弾かれなかったのか」
「でしょうね。――ま、その辺の考察はあとでいいか。重要なのはそこじゃない」
「そうだね……僕ら、たぶん嵌められた」
「ええ。不覚だわ、誰かに見られてたのに気づかなかったなんて」

悔しげに歯噛みするレヴィだが、それも仕方のない話だから。

休憩のために張った結界越しに、まさか外から観察されているなんて普通あり得ないのだから。

あの転移は、確実に《魔術師（にんげん）》の手によるものだった。

仮に迷宮の罠（トラップ）だとするなら、踏み込んだ時点で発動しているはずだからだ。何よりそんな罠の存在が、オーステリアの地図に載っていないはずがない。

何者かが、意図的に設置したはずだろう。

くなくなるなんて考えられないということだ。

嵌められたのだ。それも、かなり高位の魔術師に。

「転移、か。――《喪失魔術（ロストロジック）》わずかな諦念とともにレヴィは呟く。

転移魔術は、現代では失伝した技術だと言われている。それこそ迷宮の出土品などを除けば、今の時代に個人で転移魔術を行使できる魔術師など存在しない――はずだった。

だが現実はこれだ。転移魔術の復元に成功した魔術師が、この場所にはいるのだろう。

「ともあれ、早くみんなと合流しないといけないわね。行きましょうか」

「そうだね――ピトスさんは特に、早く捜し出さないと」

「いえ。ピトスはしばらく大丈夫だと思う。問題はむしろアスタね。本気で死にかねないわ」

「アスタが、かい？　こう言ってはなんだけど――」

――彼なら、心配する必要などないのではないだろうか？

ウェリウスはそう思う。それほどに、あの印刻使いは実力があるのだが、それを補って余りあるほど彼は経験に長けている。ウェリウスの見立てでは、少なくとも数年以上、迷宮の前線で冒険者として生きてきたと考えて間違いない。

だが、その判断には見落としがあった。

「忘れたの、あいつは印刻魔術師よ」

「……そうか」

「そう。――ルーンを刻んだ魔具がなければ、アスタはほとんど無力に近い」

そして魔具は今、全て転移の際に置き去りになってしまっている。ほとんど丸腰のアスタよりは、ピトスのほうがずっと長生きすることだろう。

彼女は別に、戦えないわけではないのだから――。

ともあれ二人を捜すため、レヴィとウェリウスは駆け出した。

全滅もあり得る。その事実を――ふたりは極力考えないようにして進んだ。

それ以外に、できることなんてなかったから。

※

迷宮の通路を進みながら、シャルロット＝クリスファウスその視線は、隣を歩くアスタ＝セイエルに注がれていた。

「――まっずい。やっぱいコレ、マジやっぱい」

アスタは頭を抱えていた。シャルは若干引きながらも、どうにか文句を口にする。

「うるさいな、ちょっと黙ってよ。なんか出てきたらどうすんの」

「出てきたら助けてくださいわけ……？」

「あんたさ、プライドとかぶりに、シャルは溜息とともに暴落しているのだから。

呆れてモノも言えないわけ……？」

だがアスタは本気だった。なぜなら彼の戦力は今、軒並み

「いや俺、マジでピンチなんだって。ルーン刻んだ護石や護符がひとつもない」

「……は？　あんた、何言って……」

「魔具の類いが全部ない。やばい。転移のとき外に弾かれたぶん、やばい」

冗談のようで、だが冗談にもならない事実だった。アスタたに等しい領域である。今なら低層の魔物にも余裕で負けられる。

《印刻魔術しか使えない》かつ《魔力がほとんど制限されて抱えている彼は、あらかじめルーン文字を小石や宝玉、あるおき、それを戦闘時に起動するという形で速度を補っている。戦う前の準備から、戦いは始まっている――とでも言えばの戦闘力は、そのほとんどを自作の魔具に頼っている。

それを失っては、戦う前から戦いが終わっている。何ひとつ笑えなかった。

「……その状態だと、魔術はまったく使えないわけ？」

さすがに不憫に思ったのか、少し声を震わせながらシャル

「いや、完全に使えないってわけじゃない。ルーンは使おうと思えば使える。模擬戦のとき、足で地面に刻んだみたいにすれば、だけど――」

「迷宮の床にルーン刻めるわけ……？」

「百パー無理」

それは迷宮の結界を破ることと同義だ。そんなことができる魔術師はいない。

――嘘だろ、マジでどうしよう……完全に想定外だ。

などと呟くアスタを尻目に、シャルは思索の海に沈んでいた。
この男が戦えない、などという言葉をシャルは微塵も信じていない。
のであれば、今の段階で戦えていること自体がすでにおかしい、と言うべきだろうか。
確かに彼の学院における成績は、少なくとも実技に関しては底辺だ。だが、それだけなら本来、普通に退学になっているはずだった。にもかかわらず学院に所属し続けることができている理由が、きっとどこかにあるのだとシャルは思っている。
だ。けれど、それをそう一に考えられるのは、彼が《魔法使いの弟子》であるという事実最悪の犯罪者とまで呼ばれたアーサー＝クリスファウストの関係者である事実は決して、簡単に言うとも考えられない。ほかの二名ならばともかく、史上プラスの方向には働かない。だからシャルだって隠しておく理由とは何か。
ならば、それ以外に学院がアスターセイエルを確保しておく理由とは何か。
「なあ。吸ってもいいか？」
そのときふと、アスタにそんなことを訊ねられた。煙草のことだろう。
「この状況で？　……まあ好きにすれば」
「そっか。ありがとう」
「人生最期の一服かもしれないし」

「いやいや、縁起でもないこと言うんじゃねえよ」
「そう？　それはごめんね、お義兄ちゃん」
「……うんまあ、別にいいけど……その《お義兄ちゃん》って呼び方やめてくれる？」
意図的に無視してシャルは黙った。
会話とも呼べない会話。
アスタは煙草を咥え、そのお互いに距離感が掴めない。
魔力が火に変換され、かすの先端を指ですっとなぞる。描かれたのは《火》のルーン文字。
「……使えんじゃん、魔術に煙草へと灯された。
ジト目でシャルは言った。一方のアスタは肩を竦め、
「だから、使えないとは言ってないだろ」
「そうだけど」シャルはアスタを睨む。「それだけじゃなかったでしょ」
「……なんだよ。気づいてたのか……？」
「ピトスの防壁を書き換えたとき、護石なんて使ってなかったじゃない」
アスタの実力は確かに低い。扱う魔力の量、出力で言えば、はっきりと話にならないレベルだった。にもかかわらず彼は強い。この五人の中ですら主力となるくらいに。
引っかかるのは、彼が元冒険者だったという事実だ。

アスタは呪いに侵されて、魔術があまり使えなくなったと言っていた。それは言い換えれば、呪われる前は十全に魔術が使えた、ということだ。そしてこうも言っていた。この学院に来たのは、呪いを解く方法を探すためだ、と。

それと近い時期に活動を休止した、ある冒険者のクランをシャルは知っている。いや、シャルだけではない。その集団の名前は、魔術師なら誰もが知っている――。

「……ねえ。もしかして――」

馬鹿げた発想だろうか。けれど、あの正体不明の旅団には、実際に印刻魔術師が所属していたと聞いたことがある。煙草を用いて文字を描き、ただその場に立ったままで戦場の全てを見通した、七星旅団の六番目――《紫煙の記述師》の二つ名を持つ魔術師が。

「なんだよ、どうかしたか？」

突然の思いつきに思考を揺さぶられ、思わず立ち止まったシャル。アスタはそこに怪訝な表情を見せて、何ごとかと首を傾げている。

「なあ――シャル」

アスタが、そんな風に口を開いた。シャルは今しがたの思いつきを忘れ、小さく言う。

「……何？」

「ひとつ、訊きたいんだけどさ」

「だから何？」
「お前、知ってるのか？」
そこまで言って、アスタは言いはわずかに言い淀んだ。その態度で、言いたいことならば概ね察した。何を気にしているのかと思えば、そんなことで悩んでいたのか、と。
「ああ」と、シャルは酷くつまらなそうに首を振る。なんだ、そんな話か。まるで興味がないかのように、ただあっさりと彼女は言った。
「わたしの父親が死んだ、ってことなら――もちろん知ってる」

※

「……そうか」
俺は淡々と、意図的に無感動に呟いた。その答えを貰ってから、なぜ訊ねたのか自分で疑問している。
もしかすると、俺は恐れているのかもしれない。シャルは弾する権利があるはずだ。それがばきっと彼女には、俺を糾アーサーの娘だという。ならば――この俺が。シャルの父の亡骸を、見つけた人間だったから。

「世間には、まだ出回ってない情報のはずなんだけどな。どこで知ったんだ？」
「別に知ってたわけじゃないんだろうって。ただそう思っただけだから」
「出て来ないんなら、死んでるんだろうって。ただそう思っただけだから」
「……それだけか？」
「それだけだよ。ほかに何かある？」
「……」
訊かないのだろうか。父の様を、俺に。
もちろん、答えられることなんて限られている。あの傍若無人を形にしたような、反則の塊（かたまり）みたいな魔術師がいったいなぜ命を落としたのか。俺はほとんど知らなかった。
ある日、突然あの男は死体となっていたのだから。
共に行動していた俺にとってさえ、それは青天の霹靂（へきれき）だった。
だことを受け入れられないでいるくらいだ。本当にまったく受け入れられていない。
それは感情的な理由からじゃなかった。あの怪物（かいぶつ）が、そう簡単にくたばるわけがないと信じているからだ。どこかで突然に顔を出してきても、俺はおそらく驚かないだろう。自分の死体程度、あの男ほどの魔術師ならば、いくらだって偽装できると確信している。
結局、俺は何も言うことができなかった。小さく溜息（ためいき）を零してから、

「悪かったな、妙な話を持ち出して」
「別に。気にしてないけど」
「――でもお前、俺が学院にいるって知ってたんだろ？」
「……」
途端、今度はシャルが押し黙る。俺は構わずに言葉を続けた。
「だからわざわざ、セイエルなんて偽名で学院に来た。そがいるって知ってたから被せた使ってた偽名だからな。俺……仮にそうだとして」
「いや」俺はシャルを見詰めていた。「別に、何もないな」
俺の存在を知っていたのだ。彼女は入学してからずっと院長室の前で俺を見て狼狽が、あの場に呼ばれているなどとは想像するまい。
そしてレヴィは、どこからのは、さすがに穿ちすぎだろうか。
――切り替えよう。
まずは、この状況を打破することが先決だ。ほかのことは生還してから考えればいい。

「端に寄ってくれ。現在位置を確認する」
俺は告げた。とにかく敵を避けることが肝要だ。戦闘は極力、減らしたい。
二十層ともなると出現する魔物の数は少なくなるが、代わりに強さは跳ね上がる。
「少し待ってくれ。地図出しといて、そしたら一旦明かり消して」
「……わかった」
しばし間があったものの、シャルは素直に頷いた。迷宮の中では、俺の判断に従うほうが生還しやすいと見込んでくれたのだろう。
まあ、そう思わせておかないと、俺のほうが見捨てられかねない気もするが。
「消すよ」
「了解」
シャルが合図とともに魔術の明かりを消し去る。光源は俺の持つ煙草の火だけになり、視界のほぼ全てが闇に沈んだ。
その火をインクに、煙草をペンに見立てて、俺は中空に印刻する。炎の軌跡でルーンを描き、魔術を発動させる行為。超高難度の印刻魔術。
「さて……《雹》はあまり使いたくないしな。まあ《保護》と《主神》に、あと《欠乏》でも重ねときゃどうにかなるだろ。《秘密》は……ケチるか、魔力もったいないし」

ぶつぶつと俺は独り言つ。どのルーンを使うかの選択は状況や魔力量、実力にも左右されるのだが、結局のところは本人の感覚による。

俺は《保護(アルジズ)》、《主神(アンサズ)》、《欠乏(ナウシズ)》のルーンを重ねて宙に印し結びつけた。合わさった意味が概念となり、術者に制御された結界へと変わる。

「よし……明かりつけてくれ」

シャルに告げて、再度明かりを戻してもらった。なぜか怪訝な表情のシャルが見える。

まあ、ルーンがわからなければ、何をしていたのかもわからないだろうが。俺は口頭で告げておく。

「結界を張った。光も漏れないし、体力の回復にもなる。まあ、多少の時間稼ぎにはなるだろ。たぶん」

「……なんでもできるんだね。ただルーンを使うだけで」

「そうか？　まあ、器用貧乏ってヤツだ」

自嘲するように呟いて、それからシャルの地図を借り受ける。幸い、というべきかここまで歩いてきた地形の記憶と、実際の地図を照らし合わせるとはわからないが、三十層と規模が広がった分、入り組んだ道は少なくなっている。現在位置はすぐにわかった。

確認のために感知や走査の魔術を使用したいところだが、魔力の匂いで近場の魔物を誘き寄せるのも馬鹿らしい。……いや、そもそもそれ以前の問題か。

俺は別のルーンを起動し、生物を感知する魔術を迷宮に巡らせた。

「そろそろ魔物の一体くらい、見つけてもいい頃だよな」

「そう、だね。たぶん――」

「――ああ。この階層からも魔物がいなくなってる」

そう考えたほうが自然だろう。

本当に、いったい何が起こっているのやら。さっぱりわからない。

これからどうするべきなのかも。

「とりあえず、まず外部との連絡を試してみるか」

俺は、この迷宮の攻略中に拾った魔晶をひとつ取り出した。

らか、転移の際に弾き出されることはなかったようだ。

煙草の火を揉み消し、俺は魔晶の改造に取り掛かる。

「姉貴ほど上手くは創れないけど。まあ、セルエならわかってくれるだろ」

しばし、俺は魔晶に向けて印刻を多く刻み込む。

それはいわば手紙だ。魔晶に秘められた魔力を起動すれば、俺たちの窮状を伝えてくれ

るだろう。さらに同じものをふたつ作って、それをお互いにリンクさせた。

あとはこれを地上まで運ぶことができればいいのだが。

「……なあ、シャル。使い魔創れるか？」

「使い魔？　……何目的の？」

「連絡用。戦えなくていいから足速いヤツ」

「……まあ、創れるけど」

「あ、創れるんだ」ダメ元で訊いたが僥倖だった。「んじゃ、そいつにこれ持たせて、地上まで送ってくれないか？」

「何これ……？」

「手紙」

「……あっそう」

シャルは露骨に疑いの視線を向けながらも、一応は言う通りにしてくれた。魔晶のひとつを手に取ると、そこに魔力を流し込んでいく。潤沢な魔力を持つ魔術師でなければ、使い魔に必要な分の魔力を流し込めて使役することなんてできない。つまり俺には無理だった。

しばらくすると、無色の魔晶が変貌を遂げる。生み出されたのは、黒い球体に手足がついたみたいな、見るからに謎の生物だ。

なんだろう。掌サイズの真っ黒なボール、とでもいった感じだろうか。

「……何これ？」

思わず問うと、シャルは真顔で答えた。

「《クロちゃん》よ」

……そっかー。クロちゃんかー。

「ずいぶん変わった見た目してるけど。シャルの趣味？」

「うるさいな。属性なしの魔晶を媒介に、生物を象らせるなんていや別に文句はないよ。むしろ充分。さすが優等生だ」

「何それ。褒めてんの？」

「もちろん」

俺は笑ったが、シャルはかなり不機嫌そうだった。感心しているのは本当なのだが。

使い魔とは、その《核》となるモノ――生物の死骸や、年月を経た道具、あるいは魔晶など――に主人となる魔術師の魔力を注ぎ、擬似的な生物として操る魔術であり、そうして生み出された疑似生命体の総称だ。

即席の使い魔では単純な目的行動しか取らせることはできないが、核の質と術式の手間によっては、第二の自分とも言うべき分身さえ作り出すことも不可能ではない。

「学院まで頼む。上手く運べば、助けが来るかもしれない」
「……わかった」
頷き、シャルがクロちゃんに命令を刻んでいく。
たとえるなら、それはロボットにプログラムを書き込むようなものだ。
しばしして、命令を受領したクロちゃんは身体を丸めると、そのままギュインッ！　と高速で転がっていった。魔物がいない今ならば、無事に上層まで着けるはずだ。
にしても、まさか転がっていくとは思わなかった……。
思わず心中で突っ込んだが、それ以上に俺は感心を覚えている。思っていたよりずっと速度があったから。外見は何かと思ったが、その割にレベルの高い使い魔だ。この分ならおそらく二十分程度で、地上まで辿り着くだろう。
ともすれば、シャルはこちらの分野を得意としていたのかもしれない。
「さて、どうする？　できればしばらく休憩したいところだけど」
「そうもいかないでしょう」俺の言葉に、シャルは小さく首を振った。「早くみんなと合流しないと。どうなってるかなんてわからない」
「……意外と優しいじゃん」
からかうように呟くと、シャルはわずかに頬を染めて俯いてしまう。

「そんなこと、言ってる場合じゃないと思うけど……」
「そうだな」
実際、それは事実だ。確かに魔物は見かけない。だが、ここは別に余裕というわけではないとは限らないのだが。
今だってずっと、はぐれた連中を捜し続けている。魔術を空間に伸ばして、魔力の感知網を広げ続けているのだからもう少し、捜索範囲を広げてみようか。あまり広げすぎるとせてしまいかねないから躊躇しているのだが、そろそろ思い切るべきだろう。
目の前で不機嫌に顔を背けるシャル。その様子を無言で観察した。
彼女はほとんど迷宮に入った経験がない。その事実が、どこかで落とし穴になる可能性もあったのだが、この分ならおそらく大丈夫だろう。もうあと少しくらいなら。
と。そこまで考えて、移動を再開しようとしたときだった。
――突如として、どこからか金切り声にも似た悲鳴が轟いてきた。
弾かれたように振り返る俺とシャル。そう複雑な構造ではないとはいえ、その声の方向

を一瞬で判断するのは反響のせいで難しい。
響きや音量からして、おそらく人間の声ではない。だが、そ
択肢などなかった。間違いなく何かが起きている。
「――走るぞ、シャル！」
叫び、返事は待たずに走り出す。シャルは後ろからすぐつい
「今の悲鳴は……」
「いや、たぶん人間の声じゃない！」
「……じゃあ魔物？」
「ああ。魔物同士が共食いしてるんじゃなけりゃ、誰かしら
型だろう、急ぐぞ！」
索敵を全開にして、薄暗い迷宮を走り抜ける。といっても自
魔具は、転移の際すでに紛失していた。魔術を使っている余裕
だから今、頼りにしているのは己の感覚だ。魔力の流れ、生
さえ逃さずに集め、これまでの経験と勘を総動員して、ただ前
地図なんて見ている余裕もない。
途中、足元の石畳がすっと沈み込む場所があった。この手の
感覚が何を意味するか、言

うまでもなくわかっている。
——トラップだ。迷宮に仕掛けられた、侵入者を拒むための罠。感覚からして、先ほど陥れられた人為的な罠ではない。おそらくは迷宮に自然発生したものだろう。
転移系か、それとも攻撃系のものか。判断している時間はない。なんだとしても知ったことか。その罠が発動する刹那——、
「——うぜえー」
と俺は、踏み抜いた足、そのもので、魔術をかけた。使った文字は《氷》。それを用いて、魔力の流動そのものを凍結させた。どんな種類の罠だったところで、発動しないのならどうだっていい。
先程のような不意打ちはともかく、いつか罠に行き当たると予期して走っていたのだ。準備までしておきながら、無様に食らったりはしない。
「……うそ。信じられない……」背後でシャルが何ごとか呟く。「足の動きだけでルーンを作……え、っていうか今、術式を無視して魔力の流れだけ止めた……？　ええ……？」
が、俺は全て無視した。驚いてもらったところ悪いが、こんなものは小技だ。迷宮以外では役に立たない。その程度で驚いているうちは、一流の冒険者には届かないだろう。
いや、シャルが冒険者志望なのかどうかは知らないけれど。

罠を文字通り踏み越えて、速度を落とさず駆けていく。するとのような空間に出た。学院の試術場並みに広く、そして天井のなぜか光源がある。青く仄暗い、火の玉じみた光が四方の壁その下に、ひとりの少女の姿がある。

「ピトスー　大丈夫か!?」

その少女――ピトスに向かって俺は叫んだ。彼女は壁に背をえて蹲っている。その左腕に、肩から血が滴っているのが見え呼吸は荒い。どうやら負傷している。シャルが慌てて駆け寄スの鋭い声が飛んだ。

ほぼ同時。俺も、そいつの存在を視認する。

「――来ちゃダメっ。上っ！」

普段の彼女からは想像もできないほど切羽詰まった声。それにそれを知ったのは、彼女が零した震える声のためだった。

「そん、な……嘘……っ!?　――」

迷宮で漏らすその言葉は、いっそ敗北宣言にも等しい。幻想ちのめされていては、その時点で死んだも同義だから。

を司る魔術師が、事実に打

そこにいたのは、羽ばたく炎の化身だった。
広すぎる空間の上空。全長にして一、三メートルほどはあるだろうか。巨大な鳥の魔物がいた。全身を青白い炎に包み、たゆたうように浮かんだまま、こちらを見下ろすのは堂々たる威容。あるいは神々しささえ感じさせる、それは永遠の象徴――。
――不死鳥（フェニックス）。

十層で遭遇した、醜悪（みにく）なヒトガタなどとは比較（ひかく）にさえならない位に位置する――《幻獣（げんじゅう）》と呼ばれる怪物なのだから。
位階（クラス）としては、間違（まちが）いなく最強種の一角。魔竜種（ドラゴン）や真狼種（ウールヴヘジン）、称される幻想の頂点。神話の怪物。それ自体がひとつの完成したその強さを階層で表すなら――実に千層クラスの強さを持つ――幻獣は、彼ら自体がひとつの魔術でありながら、同時に彼らは迷宮の最深部や、あるいは世界において《霊地》、《龍穴（りゅうけつ）》などと称される、神域とも呼ぶべき特別な場所にのみ現れるという。本来的に全身を魔力で構成されているからこそ、幻獣の魔術適正は人間のそれを遥（はる）かに凌駕（りょうが）しているのだ。肉体に縛られる人間とは

違い、魔物は魂魄の力をそのまま表に出すことができる。

つまり、人間如きが敵う相手じゃない。

これを相手取るならば、それこそ七星旅団を全員引っ張り出してきて、ようやく互角かどうかというレベルだろう。

――要するに。

こんなモノ、行き遭うこと自体が死と同義だ。

青の炎を、まるで雪のように散らせる空の幻獣。

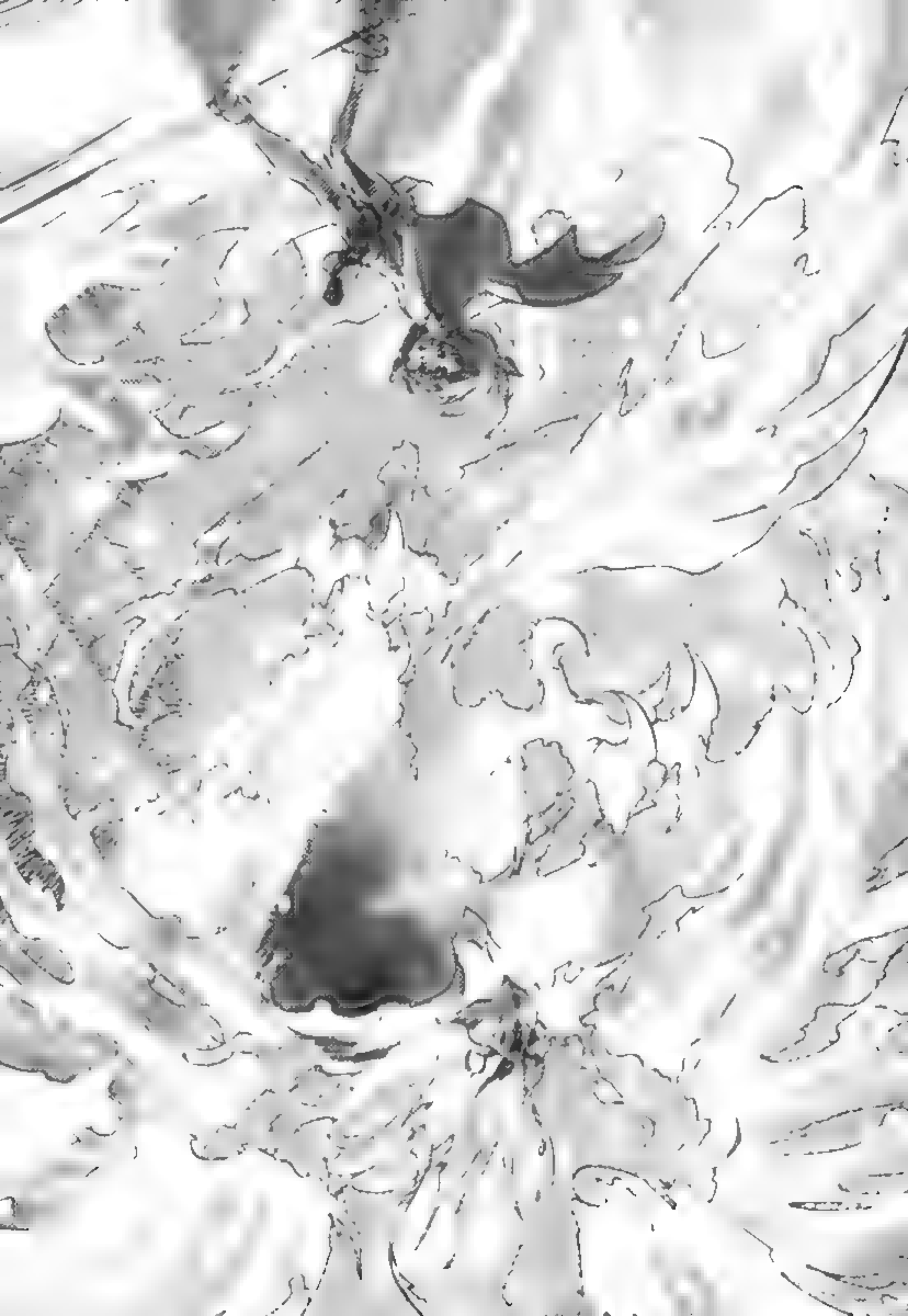
勝てるわけがない。

そんなことは初めからわかりきっていた。なぜ炎が赤ではなく青なのかは不明だが、目の前のそれが本物の不死鳥ならば勝ち目はゼロだ。そもそも戦いにすらならない。

――どうする。どう逃げればいい、どうすればふたりを助けられる……？

俺は全力で思考を回転させる。というか、なぜこんなところに不死鳥がいるんだ、そもそも。

オーステリアに幻獣がいるなんて、街どころか世界を揺るがすレベルの事件だ。街ひとつを瞬く間に壊滅させることだってできるレベルの、災害みたいな怪物だぞ。あり得ない。



……いや、待て。
それはおかしくないだろうか。俺はそのとき、奇妙な引っかかりに気がつく。
それは天啓であり光明だ。そうだ、絶望するにはまだ早い。
「もしかして、そういうことか……？」
「ちょっと、アスター！　何言ってんの!?」
背後からシャルの叱咤が飛んでくる。お義兄ちゃん、などと皮肉っぽい呼び方でなく、普通に名前で呼んできた辺り、こいつも余裕はないのかもしれない。
「いや。とりあえず襲ってこないみたいだな、こいつ」
「……みたいだけど。今、何考えて――」
「気にするな」
さらりと答えて誤魔化した。
幸いにして、青の不死鳥が動き出す様子はない。ただこちらを観察するように、高みから睥睨しているだけ。伝承に語られる不死の王鳥は温厚で争いを好まない性格だというが――さて、これはそういう問題だろうか。
思い浮かんだ答えを正解だと無理やり確信して、俺はピトスに駆け寄った。
「……ピトス。大丈夫か？」

彼女の身体を助け起こす。見たところ、命に関わるような傷はないようだが。
「だいじょうぶ……です。それよりも――」
「待て、頭から血が出てるな。ヤツにやられたのか？」
「……吹き飛ばされ、ましした。肩に少し傷を受けましたが、それは治癒したので平気です」
「頭の怪我は？」
「多少切れただけかと。今のところ支障はありませんから、ご心配なさらず」
立ち上がろうとするピトスを止める。俺の傷には過剰に反応した癖に、自分のことには無頓着すぎる気がした。
「待て、まず怪我を治してからだ」
「でも――」
存外、しっかりとした口調で言葉を返してくるピトス。彼女の言う通り、傷自体はそこまでの深手じゃないのだろう。
事実、彼女は左肩の傷をいとも容易く治癒させていた。その視線は不死鳥を見上げたまま。彼女にとって、この程度の治癒魔術は片手間で行える程度らしい。
「……ひとまずは大丈夫そうだな」
とりあえず胸を撫で下ろし、俺は改めて頭上の幻獣を眺めた。

ヤツは動かない。余裕なのか、そもそも俺たちを敵とさえ見做していないのか。あるいは――いや、とにかく理由は不明だが、こちらを襲ってこようとはしない。

できればこのまま、見逃してくれると嬉しいものだ。

「それより、聞いてくださいアスタさんー」

と、抱きかかえたピトスが、俺の腕の中で切羽詰まったように叫ぶ。

「どうした？」

「結界です！　この部屋は、結界に覆われてるんです！」

彼女の言葉に、俺は背後を振り返った。

見ると、この大部屋がある空間と通路のちょうど境目辺りに、わずかだが魔力の揺らめきが確認できた。それはこの開けた空間の全域を覆っているらしい。

「……あー。つまり」

「罠です。一度入ったら、魔力の供給元を断たない限り外へは出られません」

「なるほど……」

そう呟くほかにない。どうやら目の前の魔物を倒さない限り、逃げることさえ不可能なようだった。事態の詰みっぷりが完璧すぎる。

――だが、それはそれで妙な話ではないだろうか。

魔物が、それも幻獣ともあろう相手が、そんな狡い罠を張るだろうか。そんなことをする必要はないはずだ。人間なんて、幻獣からみれば羽虫に等しい。

やはり引っかかる。

俺はピトスへ向けて問うた。

「さっきまで、あの魔物とひとりで戦ってたのか」

「ええ……はい、そうなります」

「……どうだった？」

「あの青いフェニックスは、こちらから攻撃しない限り反撃してきません。それは助かったのですが、かといってひとりで勝てるような相手では……」

「俺たちは、悲鳴が聞こえたからここに来たんだ。あれ、ピトスの声じゃないよな？」

「そう……ですね」

ピトスの言葉はなぜか歯切れが悪い。何か奥歯にモノが挟まっているかのようだ。

ただ、彼女の都合を斟酌できるほどの余裕が今の俺にはなかった。重ねて問い続ける。

「一撃与えたのか、アレに」

「……そうなります。もっとも、すぐ再生されてしまいましたが」

そういうことか、と俺は口に出さず納得する。

先ほどからの違和感に、確信を貰ったような気分だ。
「なるほど。……どう思う？」
俺は、さきほどから背後で黙り込んでいるシャルに訊ねた。
口元に手をやり、難しい表情で考え込んでいたシャルは、
「……そういうこと。なるほど、確かにおかしい」
「ああ。たぶん――アレは幻獣じゃない」
「だと思う。問題は、ならなんなのかって話だけど――」
魔物が襲ってこないのをいいことに、考え込む俺とシャルとは一瞬、きょとんとした表情になって、それから驚ピトスは一瞬、きょとんとした表情になって、それから驚
「え、えっと、ちょっと待ってください。あれ、不死鳥じゃ
目を丸くするピトスに、不死鳥っつったら普通は赤だろ
「だって青いじゃん、あれ。不死鳥っつったら普通は赤だろ
「……いや、そうかもしれませんけど。でも幻獣種なんて、そもそも確認した人間がほとんどいないわけで……」
「でも、アレに一撃与えたんでしょ？　ならピトスがいちばんわかってるはず」
と、これはシャルが言った。

その言葉に、ようやくピトスも思い至ったようだ。
「あ――ああ、そういうことですか。わたしにもわかりました。んなこと」
「そういうこと」
そう、普通に考えてそれはあり得ない。
それが本物の幻獣ならば、魔術師に勝ち目など存在しないのだ。ある学生如きが相手取れるような存在なら、伝説などとは呼ばれなまじ見た目が幻獣のイメージそのもので、命を賭して必死に抗っていたからこそ、ピトスは逆に気づかなかったのだろう。
――本物の幻獣が、そこまで弱いわけがないということに。
曲がりなりにも戦いになるという時点で、相手が幻獣である可能性はほぼ零だろう。
そもそも、やはりこんなところに幻獣がいるわけがないのだ。いくら魔物だからって、
地下深い迷宮の中に空を往く鳥がいるものか。
そのことに思い至れば、自ずとこの罠のような結界の存在にも
動に及ばない理由にも想像がついてくる。
俺は言った。
反撃以外の能動的な行

「……合成獣だな。それ、ということですね」
「十層にいたアレと同じ
「ああ。もっとも、強さは比べ物にならないだろうが。おそ
要するに、魔物を核として創り変えられた使い魔の一種と
シャルの創ったクロちゃんも、原理的には一種の合成獣に
ではなく魔晶と術者の魔力を掛け合わせたものだが、二種類
れた使い魔は、定義的に全て合成獣と呼ばれる。
これは本来、弱い使い魔の強化などに用いる手法だが、問
生み出す》というその作成方法にある。
「……読めてきたな。要するに、アレは自然発生の魔物とい
に近い。あらかじめ術者に命令された動作しか行えず、だか
使えない。勝手に暴れても困るからだろう」
そして辺りの結界は、おそらくこの合成獣を創り出した術
ろか。もしくはほかに協力者がいるのかもしれないが、いず
「でも、再生能力持ちで鳥型の合成獣なんて聞いたことが……」
力なく首を振るピトス。それを言うなら、単一の迷宮規模で魔物を掛け合わせる魔術師

自体が異常な存在だ。よほど位階の高い魔術師か、あるいは一点特化型の奇才か……いずれにせよ、こうして目の前に存在する以上は認めるしかない。

「実際、上層にも似たようなのがいたしな。そう考えるのが妥当だろ」

「それは、そうですが……」

「確か合成獣は、素体となった魔物の能力を引き継ぐんだったか。魔物が材料になってるんだろう」

本来、使い魔としても扱いの相当に難しい種類である合成獣を、ましてこんな風に使役できる魔術師なんて聞いたこともないが。

ここから戻ったら、全てを学院と管理局に話し、早急な対応に出てもらう必要があるだろう。それこそ、何か途轍もない計画が進行している可能性が高い。

「アレが何かなんて今はいいでしょ」

と、シャルが嘯く。上空の偽フェニックスを睨みつけ、

「問題は、これからアレをどうやって倒すかでしょ。アレが幻獣じゃないのは朗報だろうけど、どっちにしろ倒すまで出られないことに変わりはない」

「そうだが、まあ幻獣じゃないなら勝ちの目もあるだろ……たぶん」

「どうだかね」とシャルは鼻を鳴らした。見た目によらず意外と好戦的というか、まあ、

負けるつもりはないらしい。作戦の立てようもあるだろう。

それだけ強気なら、戦うのに問題はあるまい。

ピトスもまた治癒を終えたらしく、自力で立ち上がって宣言するように俺へ告げた。

「わたしも、戦います」

「ああ。悪いけど頼らせてもらう。派手にやってれば、そのうちレヴィやウェリウスも気づいてくれるだろ」

それはほとんど希望的観測というか、もはや願望に近い言葉だったけれど。

とはいえ、このパーティならば戦いを成立させることも不可能ではないはずだった。

――ただ俺には、あえてふたりに告げなかったことがある。

相対する魔物の強さを、この辺り、知り合いの《天災》なら凄まじい精度で対象の強さを測るのだが、俺はその手の感覚には鈍感だった。戦闘慣れた冒険者なら経験でだいたい判別できるものだったりする。

ら避けるのが主義だ。戦闘病ゆえに気配には鋭敏だったが、基本的に避けられる戦いなだが今、その貧弱な勘が不可避の状態に、そもそもならないように生きている。

れを幻獣と見間違えてしまった弱気は、きっとその辺りが原因だろう。

確かに、幻獣よりは遥かに警鐘を鳴らしていた。少し考えればわかったのに、こまでマシだろう。だが、それはあくまで比較としてだ。言うなれ

ば無理ゲーが難ゲーに、裏ボスがラスボスに変わった程度の違いでしかない。

正味な話、俺の勘が告げるところを言うのなら。

この合成獣でさえ、たぶん八十層近いクラスの強さがある。

「――さて、役割を分けておこう」

俺は言った。戦うのなら、初手から全力を出さなければ、俺ろう。目の前の魔獣が、それほどの相手であることは認識して

「俺が前衛に回る。囮役になかくデカいのを叩き込んでくってヤツの注意を引きつけるから

「……大丈夫なの？」

シャルは眉根を寄せて言う。だがまあ、この面子で誰が前に以外にないと思うのだ。

単なる消去法であって、別に好きでやるわけじゃない。レヴィがいれば全部投げてた。

「なんだよ、心配してくれんのか？」

冗談めかしてそう訊ねると、シャルは心外とばかりに鼻を鳴らす。

「前衛が落ちたら後衛も終わりでしょ。私は私の心配しかしてない」

「あっそ。まあ、任せておけ。これでも生存力には定評がある」

「何よ、それ」
「戯言だよ。つーか、お前こそ攻撃の要なんだ。通じなかったとか言わせねえからな」
「それは大丈夫」シャルは自信ありげに笑う。「誰の娘だと思ってるの」
「……頼りにしてるよ」
実際、彼女の火力ならば合成獣にも通用するはずだ。その一端を、俺は十層での戦いで目の当たりにしている。互いの思惑はともかくとして、今は信頼し合うしかない。
翻って、俺はピトスにも指示を告げた。
「ピトスは中衛で、特に指示とか出さないけど、状況見て援護頼む」
「……わかりました。やってみます」
「頼んだぜ？　生憎と俺にできるのは小細工だけだ、この戦いはふたりにかかってる」
弱気そうでいて、いざという事態に躊躇いを持たないピトスは戦力として信頼できる。
彼女の状況判断力の高さは迷宮でも幾度か見せてもらっていたし、何より単身で合成獣に一撃を与えた、という実績があるのだ。
というか、どうやってダメージを与えたのだろう。直接戦闘は苦手だと聞いていたのだが、天井が低いとはいえ、空を飛ぶ魔物に攻撃を届かせる能力があったのは意外だ。
まあ、できるというのならば頼りにしよう。

――目下のところ、いちばん不安なのは俺自身なわけだし。

頬を叩き、俺は気合いを入れ直す。たまには全力を出さなければ腐ってしまう。

最低でも彼女たちから失望されない程度には、とりあえずがんばってみるとしよう――。

「さて――」

呟き、懐から煙草を取り出した。それに火をつけ、俺は合成獣の元まで歩く。

術式の命令に縛られた魔獣は、たとえ至近距離にまで近づこうと自ら攻撃してくるということがない。強大な魔力を持ちながら、それを限定されてしまっている。

規模がだいぶ異なるが、それは俺と似たような状況だと言えるだろう。

俺もまた《呪い》で魔力を制限されている身だ。使い魔に堕とした、いや、そうして産み落とされた存在に対して、どこか憐憫のような思いを抱かないとはいえ、そんな感傷に身を委ねようとまでは考えなかったこともない。

いのは、ほんの一部の強者だけである。俺にそんな余裕はない。そういう余分を考えていい初手を譲ってくれるというのなら、遠慮なく貰っていくことにしよう。

「――行くぜ」

言葉とともに吐き出した紫煙を、そのまま開戦の狼煙（のろし）とする。魔力を滲ませた煙（けむり）が、自ら文字の形を取って暗い迷宮に漂った。

――刻むルーンは天災を意味する一字。

数あるルーンの中でも特に強力な意味を持つモノだ。

無論、強力な分だけ扱（あつか）いは難しい。だが今回、俺には初めから制御しようという気がなかった。むしろ暴れて弾けて、暴虐を辺りに撒き散らせ。ヒトの手に余るからこそ天災だ。

イメージするのは不可避の災害。予測不可能で理不尽な、抗いようのない破壊の象徴。

農作物にダメージを与え、日々の実りを無に帰す、甚大な破滅と破壊の力。

思い出すのは、かつて同じクランに所属していたひとりの冒険者だ。俺にとって、天災のイメージといえば彼女になる。突発的に発生する避けようもない暴虐。埒外（らちがい）の異常。

――その幻想を形にしよう。

現状の俺に使い得る、これが最強の攻撃魔術（こうげきまじゅつ）――。

「――《雹（Hagelaz）》――！」

その瞬間（しゅんかん）。

幾重にも重なる巨大な氷塊が、渦を巻いて魔獣に襲いかかった。

※

「――――!!」

耳をつんざくような音。

現状、俺にとって最大の鳥型の合成獣（キメラ）が、不快に嘶（いなな）きを轟（とどろ）かせた。

を覆（おお）う羽毛の如き炎（ほのお）に融（と）かされて、見た目ほどのダメージになっていない。

それでも合成獣（キメラ）が纏（まと）う炎の鎧（よろい）を、剥ぎ取る程度の役には立った。その全身を魔力で構成される魔物は、だからこそ魔術に対する抵抗力（ていこうりょく）が高く、にもかわらず魔力でなければ傷をつけられない。青炎の防御（ぼうぎょ）を貫けなければ、ヤツの身体に攻撃は届かないだろう。

「――、っ」

ふと身体がよろめいた。

快な感覚。その無茶は直後に反動となって、身体の内部に痛みを与（あた）える。

「ぐ――ぶっ、」

口元から血が流れ出た。

内臓（なかみ）に影響（えいきょう）が出たかもしれない。だが、そんなものを気にしている余裕はない。今の俺がこの程度の反動で魔術を使えるのならば、むしろ幸運だ。

体内で暴れる魔力と、それで傷つけられていく肉体。その痛みをふたりに悟（さと）られないよ

うに、俺は背後へと大声で叫んだ。
「援護は頼むぜ、ふたりとも！」
そして返事は待たずして、次の魔術を準備する。こちらの攻撃に反応して、敵も同時に動き出した。
天災の小規模再現たる《雹(ハガラズ)》を嫌(きら)い、魔獣は全身を振るって炎を撒き散らす。それは単体ですでにひとつの攻撃魔術に等しい規模だ。余波のひとつでも軽く死ねるほどの火力が舞い、近場の俺は回避(かいひ)に専念するしかない。
と、直後、高質な迷宮の床(ゆか)から、巨大な茨が生えてくるのが見えた。
術者はピトス。柔(やわ)らかな魔力の感覚でそれを知る。魔獣の行動を阻害(そがい)する、拘束魔術の一種だろう。
魔力で創られた無色の茨は、動きだけでなく魔力の流れそのものを阻害していた。全身それ自体を魔力で構成されているからこそ、魔獣には厄介(やっかい)な術式だ。魔力の流れは魔物にとって、いわば血流にも等しい。
降り注ぐ火の粉さえ散らして、ピトスの拘束魔術が合成獣の身体を締め上げる。また、その横ではシャルが圧縮詠唱(えいしょう)による魔弾(まだん)を連射していた。
「――《魔弾の射手(フライクーゲル)》」

概念を省略し、本来なら長い詠唱を必要とする魔術を、ただの威力の魔弾が間断なく殺到した。合成獣の身体を削いでいた。無は、もはや機関銃の域だ。一発一発が確実に、魔獣の体力を失わる。

本当に。頼りになる仲間だった。

――とはいえ、この程度では決定打に至らない。

炎を削がれた合成獣は、まるで粘性魔獣のようにぬらぬらとした光沢を放っていそれがダメージを受ける先から気味悪く増殖して、その肉体を再生していく。

幻獣を思わせる神聖さなど、このバケモノは持ち合わせていない。所詮は不細工な劣化再現でしかなく、もしこの様子を見ていれば、勘違いなどしなかっただろう。

「シャルー　いちばんデカいヤツ、何秒あれば撃てる!?」

俺は訊ねた。隙を作り、決定打になる一撃をシャルに放っても破することはできない。俺の仕事は、そのための時間を稼ぐことだ。

を成立させるには、相応の時間が必要となる。

「詠唱から十五秒あれば、確実に落としてみせる！　ただ――」

「ほかは全部こっちでなんとかする！」

「大丈夫なの!?」
「信じろ！」
俺は叫んだ。無責任な言葉だとは思わない。俺はシャルを信じている。それを押しつけで終わらせず、形にするのが俺の仕事だ。それくらいができずして、冒険者を、魔術師を名乗る資格などない。
「……わかった！　動きさえ止めてくれれば、確実に落としてみせる！」
「了解――ピトスはシャルの防御！　全部任した！」
「了解ですっ！」
直後、合成獣がついに拘束魔術を突破したのだ。やはり、そう上手くは運ばないようなものだったが、威力はもはや爆撃にも等しかった。
その足下にいる俺が、もし受ければ間違いなく死ぬだろう合成獣が身体をよじるだけで、火の粉が飛び散って降り注ぐ。まるで羽毛が抜けるかのピトスとシャルの番だが――それでもふたりは、俺を助けようとはしない。こちらを無視してくれている。
詠唱を始めるシャル。ここからしばらく彼女は無防備になってしまう。

俺は攻撃でさえない炎の余波を、掻い潜りながら前へ進む。この程度なら、ウェリウスの魔弾のほうがずっと悪辣だ。何より魔力は極力、温存しておきたかった。

あらかじめ用意する魔具と違い、煙草を媒介にする魔術には、それを制限されている俺は、使いどころを考える必要がある。

魔力自体は、まだ充分に残っている。だが俺の場合、それを外に放出する出口のほうが壊れているのだ。無理に捻って魔力を流せば、肉体のほうが壊れてしまう。

「……ま、そんなことはどうでもいい――」

ふたりの信頼には必ず応える。精神論で構わない。元より魔術めたことならば、為せない理由は何もない。それが魔術師という――己の意志するところを為せ――。

そんな魔術の根本理念を、強く激しく意識する。煙で《駿馬》を加速させた。立ち止まるな。考えることを死ぬまでやめるな。

必要なのは戒めだ。合成獣が空へと逃げる前に、なんとか足止めしなければならない。

いくら巨大といってもせいぜい二、三メートルの合成獣に対し、迷宮の最深部たるこの広間は数百メートル四方はある。当然、天井も高く、逃げに徹されては厄介だった。

舞い散る青い火の粉を躱しながら、俺は合成獣へと肉薄する。茨を断ち切り空へ逃げよ

うとする魔獣へ向けて、二重の文字を作り出す。それは数本の氷の棘に変わり、魔獣の身体へ直撃した。炎の翼が、氷の杭に貫かれていく――。

「――《氷》(Isa)、《巨人》(Thurisaz)！」

煙草の火で描く軌跡が、だが、そこまでだ。貫かれた先から再生し、氷は溶かされて意味を失くす。

「……くそ、回復力がありすぎる……っ」

苛立ちまじりに叫ぶ。その程度の効果なら、俺の魔術にもあったらしい。

認識したようだ。合成獣はよろめくことさえなく、まっすぐこちらを見据えていた。完全に俺を敵としてその青白い嘴が、俺の目の前ですっと開かれる。――刹那、怪物も同じらしい。

「――《防御》(Ehwaz)、《保護》(Algiz)、《水》(Laguz)、《栄光》(Sowilo)――！」

俺は持てる魔力の全てを、全力で防御に傾けた。

物理、魔術の両面に水の属性を加え、かつ成果を満たす喜びのルーンで術の綻びを強引に覆う――咄嗟に使う防御としては、俺はこれ以上を持っていない。

直後、身体を覆うように創り出した防壁が、盛大な衝撃に包まれた。合成獣の巨大な翼から、青白い炎の波が押し寄せる。羽ばたきが作る空気の揺らめき――その全てが火炎に

変わって俺を襲った。

視界が青に染められる。びきり、びきり――防壁にひびが入っていく。いくら術式を緻密に作っても、そもそもの魔力が俺には足りない。

水の加護が軋み、たわみを作っていた。威力が高い。魔術師の一軍を容易に全滅させるほどの破壊力。俺ひとりに対する攻撃としては、いっそ不効率なくらいだろう。

防御にどんどんと魔力を吸われ、肉体が悲鳴を漏らしている。

「ご――ふっ」

喀血。致命傷を防ぐために、自ら傷を負うという矛盾。それでも、魔力を注ぐことをやめるわけにはいかなかった。

体感で実に一分近く――実際にはほんの数秒後だろう。

みしり、とついに防壁の一部が欠損した。

――だが、それでいい。俺がいちばん前で耐えている間、シャトスが防ぐ。そして俺は、シャルが魔術を完成させるまで、こうして堪えていれば勝てる――。

などと考えているようでは、魔術師なんて名乗れまい。

攻めろ。

吐き出した血が、無色の防壁を赤く汚していた。その血液の上から文字を刻む。印刻使いはあくまでも書く魔術だ。本来なら不可能な完成した魔術への干渉すら、印刻使いは可能とする。

防壁の強度は限界だ。なら逆に、自分から壊してしまえばいい。

――反応起爆。

防壁が、いくつもの破片へと分かれて弾け飛ぶ。それは飛来する炎を巻き込んで、逆に自らの力に変えると、合成獣を目がけて飛んでいく。相手の魔力さえ利用した、炎を纏った硝子の散弾。俺もまた反動で後ろに弾き飛ばされたが、視線は敵から離さない。合成獣は躱そうとさえしなかった。高い再生能力を持つからこそ、この魔獣は攻撃を回避するという思考を根本的に持っていないらしい。幻獣とは比較にならない、それは命令を為すだけの使い魔ゆえの特徴。知能がなく、つまりはそれがつけ入る隙だ。

合成獣は今や宙にいる。高い天井のすぐ近くを、浮かぶように飛翔していた。

その位置からならば、こちらへ一方的に攻撃できるだろう。逃げたのではなく、あくまでこちらを殲滅するための移動。元が魔物であるからこそ、ヤツは殺戮しか考えない。

そして。天井を舞う合成獣の背後に、巨大な円が浮かび上がった。魔術を構成する術式だ。円と線と文字が複雑に絡み合いながら、世界の法則を歪ませていく。

それは魔弾を意味していた。ウェリウスやシャルも使っていた、攻撃魔術としては最もメジャーで簡単なもの。

だが、それもこのクラスの魔物が使えばもはや兵器だ。

ぼつぼつぼつ――と、揺らめく炎の塊が、暗い天井を埋めていく。十、二十、三十と。

炎弾は次第にその数を増やし、見上げる空間を青く明るく照らしていく。

まるで都会の地面から、高い摩天楼の電飾を見上げているかのような光景だった。

きっと不死鳥には及ばない、それでも合成獣に可能な最大の火力。ヒトの領域を超えた魔術。だが魔術師なんて、そもそもがヒトを超えようとする大馬鹿の集まりなのだから。

絶望するにはまるで足りない。

空気を震わせる熱量が、肌をじりじり焦がしている。その暑さに汗が吹き出ていた。

青く輝く焔の塊。それは神話に語られる、炎の雨の魔術だ。開闢の時代、天から地にへと降り注いだ、命を絶やす流星群。

そんな奇跡を幻視した。

――魔獣が嘶く。最後通牒を示すように。

俺はもはや動かなかった。劣化しているとはいえど、仮にも神話領域の魔術を目の当たりにして、けれど俺は感動さえ覚えない。むしろ憐れみを感じてしまう。

これほどの魔獣が。ただ使役され、狭い迷宮に閉じ込められているという事実に。

「――アスタくんっ!!」

声が聞こえた。ピトスだろう。いかに彼女でも、さすがにこれは厳しい。焦りの混じった声のほうに、俺は静かに視線を向けた。

どうしてか、泣きそうな表情のピトスが見える。彼女はきっとと……していない。会ったばかりの俺の身だけを、案じているのだとすれば、自分のことなんて心配

一方、シャルは未だに詠唱をやめていない。その蒼い双眸が、ぐわかった。

これまで見てきた、感情を押し殺した瞳ではない。一瞬だけ俺と交錯する。

だから、俺もふたりに笑みを見せる。ただ前だけを見据える意志がある。

そして――煙草の煙を、ふう、と吐き出した。

「――《氷》、《軍神》、《一日》」

直後。炎の雨が、迷宮へと一斉に降り注いだ。

それをたとえるのなら、空爆という表現が相応しいと思う。いっそ皮肉なまでに美しい青の炎が、無差別に地上へ落下する。狙いなどつけずとも、絨毯爆撃で空間を飽和すれば逃げ場はない。合成獣は、あまりにも無造作に俺たち三人を攻撃していた。

まるでこちらの命になど、なんの価値も見出していないと言わんばかりに。

「――――……っ！」

ピトスは息を呑みながら、それでも防御の術式を展開した。

魔術の成否は精神的な状態に強く影響される。命のかかった状況下で、それでも冷静に魔術を発動できるだけ、ピトスの精神力は称賛に値するだろう。

透明な、半球状の防壁がふたりを包む。

その間もシャルは、途切れさせることなく詠唱を続けている。

俺もまた魔術を起動した。

すでに炉心は悲鳴をあげている。

過剰な魔力使用が、肉体に強いフィードバックとなって影響している。

内臓に負荷がかかり、口の端からは血が漏れている。

一撃も食らっていないのにこの有様だ。我ながら自嘲の笑みを禁じ得ない。

「――でも」

刹那。こちらへ降り注ぐはずだった火炎が、空中でそのまま凍りついた。

「な……っ!?」

背後からは息を呑むピトスの声。俺は答えず、煙草を握った手を軽く横へと振るった。

途端、凍りついた火炎が、まるで時間を巻き戻されたかのように魔獣の元へと戻ってい

く。俺たちを襲うはずだった爆撃は、逆に魔獣を襲って串刺しにする。

「――――――!」

魔獣が金切り声で嘶く。先端の鋭い氷の棘が、合成獣の翼を貫いて、そのまま天井へと磔にしたからだ。その氷は同時に炎であり、魔獣を灼くことでその再生を阻害する。

そう。俺はあくまで印刻使いだ。量で劣るなら質で上回る。自身の魔力では足りないのなら、相手の魔力を利用してやればいい。魔術とは、いかに自分の理屈を通せるかの測り合いだ。結果を上書きする記述合戦なら――印刻使いに負けはない。

ここから逃げ出すのは、いかにこの合成獣でも難しかろう。さすがに滅ぼすことまではできないが、自らの魔術をそのまま利用されたのだ。しばらくは拘束し続けられる。

再生し、再生する先から肉体を破壊される合成獣。その繰り返しから逃れようとして暴れる魔獣は今、きっと生まれて初めて死の恐怖を感じていることだろう。

「……嘘」

どこかぽかんとした表情でピトスが呟いた。こちらに視線を向け、心底から驚いたような表情で彼女は告げる。

「今の、これ、アスタさんが……？」

「そうだけど」あっさり頷いておく。「それよりシャル、準備はいいか？」

「……オーケー。完璧」
シャルが瞳を細めながら、柔らかな笑みをこちらに向ける。
こいつでも、そんな表情ができるのか。それに驚きながらも俺は告げた。
「じゃあ――あとは任せた、シャルロット」
「うん。後は任せて――アスタ」
俺は叫び、そして彼女が答えた。高く腕を掲げて、宙を舞う魔獣に差し向けるシャル。
その掌から――そして、豪炎の竜巻が発射された。
「――――!!」
うねりを上げ、強大な破壊の力を撒き散らしながら進む炎の渦が、合成獣の身体に直撃する。青の炎を、赤の炎が上から灼いていた。破壊力では負けているが、その熱量は合成獣さえ上回る圧倒的な火力を秘めている。量に対し、そのまま量で対抗する魔術だ。
全身を火炎に焦がされて、魔獣は為すすべもなく地へと墜ちた。
シャルの魔術は、それほどに圧倒的だった。
元素魔術と儀式魔術の複合術式。明らかに学生レベルを超えたそれは、さすが魔法使いの娘を名乗るだけのことはある威力を持っていた。
焼け爛れ、融解し、魔獣は全身が崩壊している。

青の炎が剥がれ落ち、粘性の肌を剥き出しにした合成獣は、を留める力さえないのだろう。再生力を失い、どころか自身のなっていた。――つまりは、その命の終わりだ。
魔物は遺骸を遺さない。それはこの合成獣も例外ではなく、に還り、あとには核となる魔晶だけが、かつん、と床に落ちて音を立てる。

――俺たちの、勝利だった。

※

合成獣の撃墜を見届けてから俺は、そのまま前のめりに地面へと倒れ込んだ。

「――ちょ、アスタ!?」

「アスタさんっ!?」

ふたりが慌てて俺に駆け寄ってくる。

どうも心配させたようだ。俺はふらつきながらも立ち上がり、

「いや……大丈夫だぶっ」
「口から血を吐きながら言われても信じられませんけど!?」
ピトスがそう突っ込んだ。いや、別にボケたつもりはない。
身体を支えてくれるピトスに、俺は左手で掴まった。ルーンを刻んだ右腕は、すでにほとんど使い物にならない。筋繊維がずたずたにやられ、おそらく骨にもひびが入った。
「ぼ、ぼろぼろじゃないですか、アスタさん！　いったいどうして……」
「……あー、魔術の反動。ぼろぼろ俺、魔力を制限されてるじゃん？」
「そ、そんな状態であんな大規模魔術使ったら、下手したら死んでますよ！」
叫ぶピトス。それはそうだろう。先ほど治療してくれたとき、彼女は俺の肉体の状態を知ったのだから。普通に考えれば自殺行為だ。少しでも制御を誤れば俺自身が消し飛ぶ。
とはいえ、まあ、この程度なら。術式の制御力だけが、誇れる唯一の取り柄なのだ。
「……それにしても、さっきのあれ、何？」
呆れた表情でシャルが問う。ピトスも頷き、
「そ、そうです。魔物が使った攻撃魔術にそのまま介入するなんて、そんな魔術聞いたことが――」
「……いやまあ、ちょっとした小細工だよ。もう二度とやりたくない」

実際、そのせいで全身ほろほろなのだから。俺が普段、魔術をあまり使わないのは、肉体への反動が大きすぎるというせいもある。

「……はあ。とにかく治癒しますので、怪我してるところ出してください」

ピトスにまで呆れた表情を見せられてしまった。

いや、俺だって別に、好きで怪我しているわけじゃないのだが……。

ともあれ、治癒してもらえるのはありがたい。稀少な治癒魔術師がパーティにいると、こういうときに嬉しかった。ずたずたになった右腕をピトスに委ねる――、

「――……」

その前に、口に咥えた煙草を手に取った。

そしてその手を、広間の奥の暗闇に向けて振るう――。

※

「……おっと、驚いたな。まさかばれるなんて。はは、さすがに二度目はなかったか」

俺の放った攻撃魔術。結果的に、それは不発に終わったらしい。

暗がりの先から、嫌に明るい声が聞こえてきた。

酷く場違いに明るい、奇妙に爽やかな響きの声だった。

「酷いじゃないか、いきなり攻撃するなんて。僕じゃなかったら大怪我だ」

「……」

「まあ、さすがに合成獣を斃しただけはあるよ。――いや本当、こんな早くに気づかれるなんて、予定にはなかったんだけどなあ」

「だ、誰……です、か……!?」

ピトスの声が震えていた。シャルもまた身体を硬くしている。

突然現れた男の気配に、まるで気づかなかったからだろう。

「誰と訊かれてもね。この段階で出てきたんだ、そんなことは決まっているだろう?」

愉快げに笑う、気味の悪い男。そいつは迷宮の奥から静かに歩いてきた。

ウェリウスと同じ、だが明らかに色のくすんだ金髪。表情の中で、切れ長の金眼だけが笑っていない。年齢は二十代前半程度だろうか。痩せ細った枯れ木のような、それでいて強い存在感を纏う奇妙な男が。

「――僕は、君たちの敵だよ」

怖気を揺き立てる表情で嗤っていた。
「あー……っと」
酷く余裕げに構える男へ、俺はとりあえず声をかけた。
といっても、この状況で何を話せばいいのやら。わからなかった。
不吉な男だった。
表情は笑みなのに、それが酷く歪だった。纏っているくたびれた草色の外套も、その印象を強めている。生命力に溢れた枯れ木とでもいうような、矛盾した印象。
「よくわかんないんだけど、今回の件を仕組んだのはアンタってことでいいのか？」
「はは」
枯れ草色の外套の男は、死んだような眼で笑っていた。
その深さに思わず、ぞっとする。
顔だけで言うのなら、ウェリウスにも匹敵する美男子だろうが、感情の気配がまるでない。
えている。笑っているのに。実際に手足として動いたのは僕だけど、ちゃちな下っ端さ」
「仕組んだのは僕じゃない。
「組織なのか、アンタらはやるのは、実際かなり手間だろう？
「個人でここまでのコトを

「……それは確かに」

素直に首肯する。事実その通りだ。

迷宮ひとつ分の魔物全てを一か所に集め、それを合成獣へと変貌させ、俺たち五人の誰ひとりに気づかれることなく忍び寄り、魔術で強制的に転移させる――。

操作、形成、隠蔽、転移。そのどれもが、魔術師としてひとつの到達点に至っている。

それを単独で成し遂げるなんて、もはや魔術師ではなく魔法使いの所業だ。

そしてもちろん、目の前の男は魔法使いではない。単なるひとりの魔術師に過ぎない。

ならば当然、奴には仲間がいるのだろう。

「――で、アンタらは何が目的か、とか訊いたら教えてくれんのかね？」

一応のつもりで訊ねてみる。駄目で元々だし、仮に答えがあっても事実とは限らない。

まあ単なる引き延ばしというか、時間を稼いでわずかでも情報を得ようという足掻きみたいなものだ。

視線をさりげなくシャルとピトスに向ける。いざというときのために、警戒だけはしておいてくれ、と。あるいはこの時間稼ぎが、上手い方向に働くかもしれない。

奴が――いや、おそらくは奴らが、なんのつもりで俺たちのことを陰から観察していたのかはわからない。それ以前、そもそも迷宮の最下層に、合成獣を創り出した理由からし

て不明だ。

確実に理解できることは、決して真っ当な理由ではないということだけだろう。なんらかの実験のつもりだった、というのが妥当なところだろうか。

俺たちは、絶妙のタイミングで、その真っ最中に訪れてしまった、と。

「うーん……別に答えてもいいんだけどね」

問いに、男は意外な返答をした。大仰に両腕を広げ、舞台役者のように言う。

「その代わり、こっちの質問にもひとつ答えてほしいなあ」

一瞬だけ逡巡して、それから俺は頷いた。

「……まあ、聞くだけ聞こう」

「じゃあ言うだけ言うね。――なぜ僕の存在に気がついた？」

含みなく、ただ心底から不思議だというように男は首を傾げる。

俺は軽く肩を揺らした。それもちろん表情には出さない。

「なぜ、と訊かれてもな。索敵だけで全身が軋みを上げるが、それだけで全身が軋みを上げるが、

「そういうことじゃなくてさ。気を払うのは、冒険者なら当然だろう」

信があるんだよね」

「それは気が合いそうだな」

「僕、これでも《逃げる》コトと《隠れる》コトにだけは自

枯れ草の男は軽口に取り合わない。
「実際、君ら最初のときは気づかなかっただろう？　だから簡単に転移させることができた」
最初のとき、とはおそらく俺たち五人が分断されたときのことだろう。
やはり見られていたらしい。
「まあ、そうだな」
「ならどうして二度目は気づいたのかな。カマをかけた、ってわけじゃないみたいだし。参考までに教えてほしいんだけど」
「……別に、大したことじゃないんだがな」
なぜなら二度目は、《こちらが感知できない誰かがいる》ということはわかっていたのだ。
要するにアプローチを変えればいい。
「アンタを感知できなくても、アンタを隠してる術式のほうなら感知できるだろ」
「何……？」
「人間の気配を、魔力の気配を隠しているなら、その隠している動きの気配だけを探ればいいってだけの話だ。誰かがキメラ合成獣、途中から明らかに能動的に攻撃するようになったし。誰かが設定を変えたからだと考えるのが普通だろ」

矛盾するようなことを言うようだが、それが真実だ。
この手の技能など、結局はこの子たちごっこでしかないのだから。
「……なるほど。聞いてた通り、メチャクチャだ」
呆れ半分、感心半分という感じで謎の男は嘆息していた。
「何？　お前、俺のこと知ってるのか？」
「もちろん。君のことはよく知っているさ」
「……そうかい。
下手なことを言って、後ろのふたりに聞かれるのも馬鹿らしいし、それよりも、今度はこちらが質問をする番だろう。
「んで、あんたら何者？　なんで俺らに攻撃した？」
俺は男にそう訊ねた。男は苦笑して、「またいきなりだなあ」
「もう少し駆け引きを楽しもうとは思わない？」
「何言ってんだ、お前。犯罪者との駆け引きなんか楽しまねえな？　まさか迷宮で攻撃したことを言ってるわけじゃないよね？」
「迷宮でほかのパーティに干渉するのは普通に犯罪だろ」

「おいおい、笑わせないでくれ。そんな建前上の法律、誰も守ってやしないだろう？　迷宮の中でのことは全て自己責任だ。それが冒険者の流儀ってモノじゃないか」

これは、男の言葉のほうが事実だった。

――迷宮の内部でも、《人類》を魔術で攻撃することは法律に反する。

だが迷宮の中で何が起こったかなんて、そんなことは基本的に証明できない。

死人に口なし。冒険帰りのパーティを皆殺しにして、宝を横取りするという事件は、歴史を紐解けば何度となくあったことだ。この条文に建前以上の価値などない。

無論、オーステリア周辺の冒険者たちのように、確固としたコミュニティを築けている地区は話も変わってくる。冒険者という人種は総じて、仲間意識が強いのだ。

度を越した無法者は、この街で暮らしていけなくなるだろう。悪評はすぐに知れ渡る。

ただまあ、その辺りの是非など今はどうでもよかった。

重要な言葉なら、男はほかにも漏らしていた。俺は口角を歪めて訊ねる。

「そうか――冒険者か、お前。所属はどこだ？」

「……どうも、喋りすぎたみたいだね」

張りつけたような男の笑みに、初めて亀裂らしきものを見た気がした。

冒険者の流儀を語るのは冒険者だけだ。のらりくらりとしているようで、重要なことは

話すまいとしていた男の油断を突いた。
一瞬だけ表情を崩した男だったが、すぐに取り繕って俺に言う。
「まあ、とにかくご協力に感謝するよ」
「なんの話だ？」
「あの失敗作の合成獣の話さ。結局は望むモノに至らなかったけれど、処分するのも手間だったから。君らが処理してくれて助かったよ」
「負け惜しみのつもりか？　俺らを殺す気だったんじゃないのかよ」
「違うよ。君らが奥まで降りてこなければ、実験の邪魔さえしなければそれでよかった。ああ、別に見つかったからって口封じしようなんて考えてないから、心配しないでいい。どうせ管理局じゃ、僕たちには何もできないよ」
「最下層まで飛ばしておいてよく言う」
「ま、死んだら死んだで構わなかったしね。正直、どっちでもいいんだ。目的も果たした以上はね。そう、君とは一度、話してみたいと思っていた」
「俺と……？　俺はお前なんて知らねえぞ」
「悲しいね。でも僕は君を――僕の敵を知っている」
「……」

「そして、それも終わったからね。あとはもう帰るだけさ」
「……帰すと思ってるのか？」
気になる台詞はあったが、今はそれよりも、この男をどうにかするほうが先だ。俺は煙草に魔力を込めて、その照準を枯れ草色の男に合わせる。
もちろんただのはったりだ。今の俺にはもう、戦う力なんてほとんど残っていない。これ以上に魔力を使う場合、そして、それは男にも筒抜けだった。
「無茶はしないほうがいいよ。いくら君らが強くったって、あの連戦なんてできないだろう？　見逃すと言っているんだから、素直に受け取りなよ」
「いや、そうしたいのはやまやまなんだけどね。俺もオーステリアの善良なる一市民として、明らかに怪しい連中を放っておくのもどうかと思うんだ」
「……そこまで状況が判断できていないのかい？　買い被りだったかな、今の君じゃ僕には勝てないよ」
「いやいや。お前はまだ俺を買い被ってるよ――」
意味深に告げて、俺は薄く微笑んだ。隠れることだけ考えるから、相手もまた隠れるということに思い至らない。

男はわずかに眉根を寄せ、それからはっとしたように目を見開いた。
奴もようやく気がついたらしい。
だが――もう遅い。俺は、せいぜい憎たらしく見えるような笑みで言う。
「――誰も、俺が自分で戦うなんて言ってないけど」
刹那。亜麻色の稲妻のように躍り出た。
「く――!?」
枯れ草色の男が、咄嗟に魔術を試みる。
だが、亜麻色の稲妻は止まらない。振り被った長刀を、目にも留まらぬ速さで下ろす。
――袈裟懸けに一閃。
刃が、男の身体を断ち斬った。
通路からの距離を一瞬でゼロに戻し、瞬くうちに男を屠った。
の両手に握る長い剣は、彼女の持つ切り札のひとつだ。あの魔取り出すことができる。
俺は片手をひらひらと振って、彼女に明るく声をかける。
「よう、レヴィ。これは、ちょいと遅刻が過ぎるんじゃないの？」
レヴィは、小さく微笑んで俺に答えた。

「あら、アスタ。女を待つのは男の甲斐性でしょう？」

※

彼女はウェリウスも引き連れていた。

ウチのトップツーが、どうやら共に行動していたらしい。

「……なんだい、それ？」

開口一番、ウェリウスがそう疑問した。

その視線は今、レヴィが斬り飛ばした男に注がれている。

正確には、男だったモノ、と称すべきだろうか。

「……見ての通り、と言うほかないな。使い魔か何かじゃないのか」

俺は言う。そう、枯れ草色のローブの男は、人間ではなかった。斬られた瞬間に身体が溶け、どろりとした粘性の物質に変貌したのだ。とはいえ、初めからではないだろう。

「さっきまで話してたの、あれ絶対に人間だったよな」

「斬られる直前に入れ替わったんでしょうね。逃した感覚はあったわ」

俺の言葉に、レヴィが頷いて同意する。

少し悔しげだが、あれで逃げられるなら俺たちにはもうどうもない。逃げること と隠れることは得意だと。本人が自己申告していた通りらしい。

「結局、わけのわからないまま、そう簡単に真相を掴めると思うほうが間違いか。俺は肩を竦めて呟いた。俺たちは探偵でも警官でもない。ただの学生なのだから。あの奴らに、わけのわからないまま襲われただけって感じだな」

しよう。もっとも、ここから生きて帰れればの話だが。

と、ウェリウスが言った。ピトスも再会を喜んで、

「ともあれ、みんな無事でよかったよ」

「はい！　もう一時はどうなることかと思いましたよ……」

「つーかお前ら、どこで何やってたんだよ？　こっち大変だったんですけど」

俺はレヴィとウェリウスを睨めつける。

もちろん冗談だが、合成獣と戦うとき、このふたりがいればどれだけ楽だっただろうかと思うと、あながち冗談でもないかもしれない。

レヴィはしかし、少し怒ったような風を装って答えた。

「うるさいわね――仕方ないでしょ、合成獣に襲われたんだから」

「そ、そちらにも合成獣がいたんですかっ!?」

「そちらにも、ってことは、こっちにもいたのね？」
「ええ……幻獣、不死鳥（フェニックス）を象った合成獣（キメラ）でした。正直もう駄目かと……」
ピトスの言葉に、レヴィは口元へ手をやって考え込む。
「偽の幻獣……こっちもよ。もっとも種類は鬼種（オウガ）だったけど」
「なんだ、そっちにも出てたのか」
「そうよ？　心配した？」
からかうように言うレヴィに俺はひと言、
「別に。お前がいればどうとでもなるだろ」
「……そうね。そっちも、あんたがどうにかしたんでしょ？」
なら、それで充分ということにしておくべきだろう。
今も魔術の反動であちこちが痛む。うやむやになってしまってピトスへ送ると、
癒魔術（まじゅつ）を使ってもらいたいところだ。そんな心境を視線に込めてすごかったですよ？　いや、よくわからないこといっぱいしてましたけどっ」
「で、でもアスタさん、本当
何を思ったのか、俺のことを庇（かば）うようにピトスは言った。
違う、そういうフォローが欲しいんじゃない。

しかも《よくわからないことしてた》では結局、なんのフォローにもなっていない。

「まあでも、ふたりが無事でよかったわ」

レヴィはほっとしたように胸を撫で下ろす。

「今、意図的に誰かひとり抜かれてなかった？」

「はいはい。アスタもがんばったわね」

「だからそういうフォローいらねーんだよ、がんばったけどなっ！」

「アンタ、あの手の力押しがいちばん苦手だもんね」

「そういうお前らは得意だろうな……」

口角を引き攣らせて俺は言った。基本、小技と搦め手に終始する俺は、純粋な高魔力生命とは酷く相性が悪い。なまじ性能が高く、こちらから術式干渉しづらい相手など俺にとっては鬼門に等しかった。魔術という土俵で、格上に挑んだのだから仕方ないとは思いたいが。

一方、単純に隙がなく、個人として戦闘能力の高い魔術師であるレヴィやウェリウスは、あの手の大技で倒し切れる相手とは相性がよかった。せめてどちらかでもいてくれれば、あそこまで合成獣に苦労することはなかっただろう。アレは確かに脅威だったが、その実力をほとんど発揮し切れていなかった。

こちらにシャルがいたのが不幸中の幸いだったと言えようか。

「――あ、そうだ。アスタ、これの意味わかる？」

言うなりレヴィが、ひょいっ、と俺に何かを投げてきた。幅数センチほどの、陶器か何かの欠片のようなモノだ。

「なんだよ、これ？」

投げられたそれを片手で受け止める。

「私たちが倒した鬼の、核になってた魔晶っていうか……まあ言われ、俺はその灰色の破片を目にする。

――瞬間。

息が止まった、ような気がした。

「……これ、合成獣の核だったのか？」

「うん。アスタも一応は文字使いの一角だし、読めるかなって。石版の欠片じみた灰色の破片。

そこには、こんな文字が記されていた。

曰く、――《大江山酒呑童子》。

と、そんな言葉が、漢字で、刻み込まれていたのだ。この世界には存在しないはずの、俺

がいた地球の文字であるはずの漢字でだ。

俺は慌てて、不死鳥が消えた辺りへ向かう。

だが捜してみてもそれらしきものは見つからない。どうやら、あの枯れ草色の外套の男に回収されてしまったらしい。

「どういうことだ……」

この世界に《漢字》が存在しないことを、俺はすでに確認している。

歴史書や魔術書を腐るほど漁ったのだ。見落としがあったとは思えない。少なくとも、一般に認知されていないことは間違いないはずだ。

この世界と地球では、当然ながら言語が違う。

西洋っぽい言語だとは思うが、その程度の認識でしかなかった。少なくとも俺はこちらの世界に来てから——魔術の補助を借りてとはいえ——言語を一から習得し直している。

いや、地球と異世界の文化に、共通点がないわけではない。

たとえば俺の使う、ルーン文字自体がまずそうだ。地球でも、小説や何かで聞いたことは何度かあった。さすがに文字そのものなんて覚えていなかったため、本当に地球のそれと同じ文字なのかは定かじゃないが、名前自体は聞いたことがある。

ただ、その程度の偶然なら——いや、もはや《偶然》なのかどうかも怪しいが——いく

つも存在した。俺はそれを、なんとなくそういうものなのだと思っていた。

地球でだって、まったく異なる国同士が奇妙に共通した文化を持っていることはある。

その延長なのだろうと考えていたのだ。

でも、これはそれとは違いすぎる。

大江山は、どう考えても日本の地名だ。この世界にはない。

の異世界にあるわけがない。

この世界で語られている鬼種の神話とは根本的に出自が違う。

いったい――いったいどうなっているのだろう。

「……いや」

俺はかぶりを振った。思索の坩堝から意識を浮かせる。今はそれより、一刻も早く迷宮を抜けたほうがよさそうだった。

「行こう。合成獣を倒した以上、迷宮の魔物が近いうちに復活して酒呑童子の伝説がこ

「……そっか。抜けたわね、確かにそれはまずいわ。急ぎましょう」

合成獣に勝てたから、それより弱い魔物には負けない――なんて理屈は迷宮じゃ通用しない。その理由なんて、それこそいくらでも挙げられるだろう。

魔術師はその火力に比して、肉体の防御力が非常に貧弱だ。もちろん魔力に対する抵抗

は持っているため、見た目には致命的な魔術でも、意外と軽症で済むことはあるが、あくまでも人間の範疇を超えてはいない。

それはつまり、どんなに強い魔術師でも、死ぬときは不意打ち一発であっさり死ぬということである。早いところ、逃げ出しておくべきだろう。

俺たちは地上に戻るため、迷宮を逆向きに駆け戻り始めた――。

第四話　後日談

オーステリア迷宮での事件から数日が経った頃、俺はレヴィと向いていた。つい先日もふたりで立ち寄ったあの店だ。もはやいきつけとなりつつある。たいていの場合、自分の金で飲む酒より、誰かから奢ってもらうほうが美味いものだ。ともあれ、今日のところはまだ飲酒する気分になれないでいる。まだ午前中だというのもあるし、何よりこのあと、もうひとつ約束もあるのだ。

迷宮区にほど近いこの店は、午前中から暇な冒険者で溢れている。あの事件以来、オーステリア迷宮は立ち入り禁止の命令が管理局から下されていた。計三体の合成獣を一度に殺した——つまり迷宮中の魔物を一度に殺したのだ。結果、オーステリア迷宮での活動が一時的に禁じられてしまったのだ。力のバランスが崩れ、一時的に魔物の数が増えてしまったのだ。

そんな人波の中においても、レヴィはやはり目立つ客だ。彼女の亜麻色の長髪は、むさ

くるしい野郎が多い客層の中で明らかに浮いている。
俺はいつかのように、何も言わずに彼女の対面へと座る。
とりあえずのように店員を呼んだ。
いくつかの食事と、それから水を注文する。酒の代わりに
店にはせいぜい檸檬水くらいのものだった。スライスした檸檬を投げ込んだだけの井戸水
に金を払うのも癪なのだが、たまには酒を断ってもいいだろう。
一方、レヴィは赤の葡萄酒を注文していた。この国の人間にとっては葡萄酒など水に等
しいという。その感覚は理解できなかったのだが、かつてまだ地球にいた頃、父が晩酌に
徳利を傾けながら『銘酒は水だ』と嘯いていたのと、感覚的には似たようなものだろうか。
――地球に残した家族や友人と会うことは、おそらくもう一生ないだろうけれど。
その手の感傷に浸るには、俺はもはや、この世界に慣れすぎていた。

「――とりあえず、お疲れ様」
レヴィが杯を傾けてくる。俺は水で乾杯に応じて、
「お疲れ。昨日は打ち上げだったんだろ、みんなとはどうだった？」
みんなとはもちろん、迷宮で組んだパーティのことだ。どこぞの料理屋で宴会し、酒を

酌み交わしたらしい。

「もちろん楽しかったわよ？　お酒って結局、社交の道具よね」

「そんな考えは酒に失礼だ。もっと純粋に酒を楽しめ」

「だから、楽しかったって言ったじゃない」

苦笑するレヴィ。葡萄酒（ワイン）をひとくち喉に流すと、

「あんたも来ればよかったのに」

そんな風に小さく呟（つぶや）いた。

彼女の言う通り、実は打ち上げの宴会には俺も誘われていたのだが俺は、あくまで外部の人間だ。あの冒険は彼（かれ）ら四人に課せられた試験であって、俺はその手伝いに過ぎなかったのだから。そこに顔を出そうとは、あまり思えない。

実際には目標を遥（はる）かに超えて、なんだかとんでもない事態になってしまったけれど。本来の目的はあくまで、今度の大会におけるシードの権利を得ることだった。

「……ま、いろいろと忙しかったからな」

言い訳じみた口調になったが、これは事実である。

なにせこの数日、俺は事件の後始末に忙殺されていたのだから。

今から思い返してみれば、むしろ迷宮から生還したあとのほうが大変だったという気が

する。

少なくとも、忙しさという部分に限って言えば。

※

――あの日。合成獣（キメラ）を倒し、黒幕の一味らしき男と接触したあと。

俺たちは全速力で迷宮を逆走した。地図で罠（トラップ）を回避（かいひ）し、とにかく使っての迷宮内マラソンだ。速度だけで言えば、歴史上でも最速だったんじゃないかとさえ思う。まあ無論のこと、そこにはタネがあるのだが。

実際、迷宮からの脱出には地図にない抜け道までもちろんあの枯れ草色の魔物が一体も現れなかったからこそ、俺たちはただ走り抜けたが、奴らとて現状の迷宮全体の魔力バランスに長く留まることを選ぶのはリスクが高いはずだ。

それでも、その不調が現実に影響（えいきょう）を持ち始めるまでには少し害がほぼ完全にゼロだったことができたのだ。

あの男の言葉を信じるのなら、俺たち個人に対し因縁があるわけでもないようだし。所詮は学生である俺たちにかかずらうことを選ぶよりは、早々に逃げることを選択したようだ。

――いや。それも違うか。

少なくとも奴は、俺という個人に関して、何か思うところがありそうだった。恨みなんてきたけれど、しかしあの男に覚えはない。

て、これまで幾度となく買ってだが結局、なんの問題もなく迷宮の入り口を外に出ることができた。

途端、眩いばかりの光に目が眩む。外はまだ明るかった。考えてもみれば、俺たちが迷宮に入ってからまだ四時間も経っていないのだ。

「――アスター！」

と、外に出た瞬間、不意に前方から名前を呼ばれた。

先頭を走っていた俺は立ち止まる。止まり切れず「むぎゅっ」と背中にぶつかってきたピトスが呻いていたが、意図的に無視しておく。背中は痛かったが。

「セルエか。――連絡は、ちゃんと届いてたみたいだな」

「みんないるね……よかった、びっくりしたよ、もう」

そう呟いて、ほっと胸を撫で下ろすセルエ。その橙色の短髪の上には、

「――？」

何もわかっていない様子の使い魔――クロちゃんが、ちょこんと大人しく座っていた。

小さな腕に魔晶を抱え、いわゆる体育座りに似た形で、団子みたいにセルエの頭の上へ腰かけているクロちゃんだが、相当シュールな絵面である。

「昔の暗号まで使って呼ぶから、いったい何ごとかと思ったけど……とりあえず、無事でよかったよ」

そう言って笑うセルエ。

彼女とは昔、同じ冒険者パーティに所属していた。そのときに持たせたのだが、どうやら上手いこと伝わったみたいだ。

「それで、何があったの？」

「俺たちも正直よくわかってないんだが――そうだな、管理局も交えて話したい。都合つけられるか？」

「……あまり、愉快な話じゃなさそうだね」

明るく優しい教師の表情を変え、すっと目を細くするセルエ。

学生は滅多に見ることがないだろう、それは冒険者としての彼女の顔だ。

俺は首肯を返す。

「そうだな。レヴィも、できれば学院長に話を通したい。俺を借りたほうが当局にも通りがいいだろ」
「そうね。それじゃあ、私から連絡しておくわ」
「頼む。でもまあ、まずは戻ろう」
セルエと一緒に転移陣を踏んで、局の本部まで戻る。
彼女を通じて窓口に話をつけてもらい、レヴィには学院長を呼び出してもらった。
そして、コトの顛末を報告する。
学生だけならともかく、セルエや学院長から告げてもらえれば管理局の動きも迅速だ。
すぐさま調査の魔術師隊が結成され、オーステリア迷宮はその日のうちに一時封鎖されることとなった。

※

「あのあと、セルエと一緒に調査部隊のほうに回されてな」
運ばれてきた食事を掻き込みながら俺は言う。
長いこと冒険者なんて仕事をやってきたせいで、今ではもう意識していないと「味わっ

て食事をする」ということができなくなってしまっているのだ。

長期間を迷宮で過ごすことが多いため、運び込める食糧には限りがあるし、当然ながら悠長に食事していられる時間もない。美味くもない携帯用の流し込む――迷宮での食事なんて多くがその程度だったためていた。

せめて地上にいるときくらい、美味しい料理をゆっくりと

「実は割と迷宮に潜りっぱだったんだよ」

肩を竦めて言った俺に、レヴィは呆れてこめかみを押さえた。

「見ないと思ってたら、裏でそんなことしてたのか……」

「まあ、お前は表のほうで働いてたわけだし。お互い様だろ《ガードナー》としての役割を果たしていたのだから。

俺は言う。レヴィもまた。

だからこそ、忙しくて打ち上げに行けなかった、なんて言い訳も通用しそうにないが。

「まあ、情報なんてほとんど集まらなかったんだけどね」

レヴィは視線を落として言う。もちろん、枯れ草色の外套の男の話である。

結局、奴は手がかりさえほとんど残さずに逃げ切ったのだ。

「あの日、迷宮に入ってた魔術師の名簿は確認したんだろ？」

「うん。全員、身元は確認した。結果は全部シロね。管理局も、まさか受付を通さずに迷宮へ侵入されるとは思ってなかったらしくて、ようやく重い腰を上げそうよ」

「ま、転移なんて術式使われちゃあ仕方ないわな」

本人が転移できるのなら、わざわざ局を通らなくても迷宮に入れる。前提が崩れるということだ。

そんな事実を、曲がりなりにも《管理》を謳う局が見過ごせるわけがない。王の威信にも関わってくる事態だ。

「一応、近隣の冒険者をしらみ潰しに当たってるけど……望み薄ね」

「身元はともかく、奴らの目的は何か掴めないのか？」

「それもまったく不明。現状、被害というほどの被害も出てないから、これ以上のところは難しいかもしれない」

俺には充分に被害が出ているのだが。

そういう話でもなかった。

「ったく、厄介ごとだけ残しやがって……」

「言っとくけど、報酬なんて出ないわよ？」

「初めから求めてねえよ。つーかセルエが関わってんだ、俺だけ嫌とか言えなかっただけ」

「……セルエ＝マテノ先生か」
ぽつり、と。なんらかの意思を込めてレヴィは呟く。
「できれば一回、戦ってるところを見たいのよね」
「……まあ、少なくともこの街には、セルエ以上の冒険者はいないだろうな」
俺は小さく呟いた。
まあ正直、普通の教師はセルエと比べ物にならないのも仕方がないだろう。
学院の教師は、その大半が一線を退いた老齢の魔術師か、もしくは若手なら初めから研究畑に属している魔術師だ。彼女のように、今もなお現役の冒険者が学院にいるなど。
——まして冒険者と比較してさえ、最強の領域にいる魔術師が学院にいるなど。
普通は考えないだろう。
誰がやっても同じだ。それあのセルエが動いてなお手がかりを掴めなかったのなら、もう
「……セルエ先生とアスタが戦ったらどっちが強いわけ？」
唐突に、レヴィがそんなことを訊ねてきた。
意外というか、俗っぽくて彼女らしくない問いだ。興味本位なのだろう。
俺は自嘲するように笑ってから答えた。
「セルエに決まってるだろ。比較にもならない」

「それは、アンタの《呪い》がなくても？」
「……妙なこと訊くな。言っとくけど、セルエはマジで強いぞ？　あの合成獣くらいなら、たぶん一秒で沈める」
ワンパンだ、ワンパン。俺今回の調査のときも、彼女は現れる魔物全てを一撃で殴り倒わけだし。俺はただ後ろをついて行っただけである。
彼女がいなければ、調査は軽く数倍の時間を費やしたことセルエはあれで、かなり好戦的な性格だ。本気で戦っているき、俺の感想が『誰だ、こいつ』だったくらいの二面性を持っレヴィと違って、別に猫を被っているわけじゃない。
セルエの場合は両面が本性だ。どちらが表か裏かなど断ずる「当たり前だけど。お前がやっても勝ち目なんてないぜ？」
もしかして対抗意識でもあるのか、などと考えながら俺は言レヴィもまた年齢を考えれば実力を持っているが、さすがにセルエ相手では荷が勝ちすぎるだろう。
両者とも同じ近接タイプの魔術師ゆえに、経験の差でセルエ軍配が上がると思われる。

もっとも才能で言えば同格だろう。数年以内には、おそらくレヴィはセルエに並ぶ。

――本当に、魔術師の世界は才能に左右されるものなのだ。

「じゃあちなみに、前のパーティでふたりは何番目に強かったの？」

なぜかさらにレヴィは訊ねてくる。どうしたのだろうか。

なんだか、彼女の様子が少し変だという気がする。

そんなことは一概に言えないし、そもそも誰が強いとか弱いとか、そういった瑣末（さまつ）をいちいち気にする性格では絶対にない。

「どうしたレヴィ。まさか、その程度で酔（よ）ったなんて言わないだろうな」

「どうかしらね」レヴィは微笑（びしょう）を湛（たた）えた。「いいから教えなさいよ」

「……ま、いちばん弱かったのは俺だ。これは満場一致だと思う」

「セルエ先生は？」

「どうだろうな。正直、誰が勝ってもおかしくない。強さなんてものに一定の基準なんかないし、相性の問題もあるからな。まあ俺以外は、だけど……そうだな、事前準備なしで一対一の近距離戦って条件なら、二番か三番くらいじゃないか。まあ、なんでもアリアリなら逆に下のほうに行きそうだけど、セルエは」

「一位にはなれないんだ？」

「一位だけは決まってたからな。まあ戦闘においては、だけど」
「ふうん……なるほど。ま、だいたい一緒か」
と、俺の言葉にレヴィはそんな言葉を呟くように漏らした。
「何が？」
意味がわからず訊き返す俺に、彼女は苦笑して言う。
「質問の答えが。……この質問ね、前にセルエ先生にもしたことあるのよ」
「……それで？」
「いやほら、そのとき私、あんたのこと知ったばっかりの頃だったから。いろいろあって」
「ああ。お前あのとき荒れてたもんな」
レヴィと初めて会ったのも、このオーステリア迷宮でのことだった。
もちろん同じ学院生だし、それ以前にも顔を見たことくらいはあっただろうが、正確に互いを認識し始めたのはそのときである。
あの頃のレヴィは、今より少し余裕に欠けていた。
「うるさい掘り返すな」
きっと睨みつけてくるレヴィに、諸手を挙げて降参を示す。
そのポーズに彼女は失笑して、「まあ仕方ないけど」と言葉を続ける。

「あの頃は必死だったから、お前」
「年寄りみてえなこと言うな、お前」
「まだ若いっつの」
「さいで」
「……はあ。アンタと話してると、ほんとに調子狂うわ。なんの頭痛を押さえるようなポーズでレヴィは言う。俺からしても、てばかりなのだが。いいこ、おあいこだと思う。
「まあ、アンタがどれくらい強かったのか、みたいな話を聞きたわけ」
「そりゃ残念だったな」
「そうね。先生も、『対での決闘ならアスタはいちばん弱い』」
「そうだろうな」
今さら特に傷つきもしないからだ。
だがそこで話は終わりじゃなかった。レヴィは苦笑して言葉を続ける。
「だから私はこう訊いたわけ。――『それなら、どんな条件なら冒険者などやっていないのか』って」
「……どんな条件でも弱奴は弱いと思うが。ちなみに、セルエはなんて？」

レヴィは、少し楽しそうに笑ってこう言った。
「『もし仮に全員で殺し合いをすれば、最後に生き残るのはアスタです』――だってさ」
「なんじゃそりゃ……」
「さあ。でも、誇っていいことなんじゃないの？　そうでしょう――？」
レヴィは悪戯っぽい笑みを見せながら、俺に向かってこう告げた。
うげ、と俺は顔を顰める。何を言い始めるのかなんて、聞く前からもうわかっていた。
「ここで言うなよ……聞かれたらどうする？」
「誰も聞いてないでしょう」
確かにそうだが、そういう問題でもない。
レヴィはさらに微笑を深め、「それに――」と重ねて口にする。
「誰も信じないでしょう？　あんたが、アスタ＝プレイアスが、あの《七星旅団（セブンスターズ）》の一員であり――《紫煙の記述師》の二つ名を持つ伝説の魔術師だったなんて」

※

「などと言われたのですが」
と、俺は本人に直接、文句を告げた。もちろんそのために出向いたわけじゃなく、初めから会う予定だったのだが。
ちょうどいいというか、これ褒め言葉じゃないよね？」
「ええー……？　でも本当まあ渡りに船なので、ついでだ。
セルエが唇を尖らせて言うのことでしょ？」
まあ、年齢もほとんど離れていないのだから、そんなものだろう。教師というには威厳のない姿だとは思うが。
「お陰でレヴィに笑われたよ。褒めるなら、もう少し格好よくしてから、およそ一時間くらい
「いや……それはちょっと難しいっていうか」
「どいつもこいつも。俺が相手なら何言ってもいいと思ってないか？」
そう、部屋の床を眺めながらぼやいた。レヴィと酒場で別れてから、およそ一時間くらいが経過している。
――今いるのは、学院にある教職員用の研究室のひとつだった。
セルエに与えられたこの部屋を、彼女は研究室というより、もっぱら私室として生活用に改造していた。そもそも、彼女は別に研究が専門というわけじゃない。
学院の教室ひとつを、自分の部屋にしてしまうとは。なんとも贅沢な話だと思う。

「まあいいや。それで、渡したいものってのは？」

セルエに問う。彼女に呼び出されたのは、何か渡すものがあるからという理由だったわけだ。

「もしかして調べ物の結果が出たとか？」

訊ねると、しかしセルエは首を横へと振った。

「ごめん、それはまだ。っていうか魔法使いの情報なんて、そう簡単に集まらないって」

そう言って苦笑するセルエだった。まったく頭が上がらない。迷惑のかけ通しだ。

彼女には、魔法使いアーサー＝クリスファウストの血縁関係に関する調査を依頼した。これで顔の広い彼女のことだから、きっとどこからか情報を集めてくれるだろう。

無論、シャルロット＝セイエルの申告を受けてのことである。別に問題ないとは思うが、何か引っかかりを感じるのだ。

ちなみに、シャルのことは、セルエに伏せてある。

迷ったのだが、なんとなく言わないでおこうと思ったのだ。

彼女にはただ『理由は聞かずに魔法使いのことを調べてほしい』とだけ伝えてあった。

それで請け負ってくれるのだから、本当にありがたい話である。

「本当は、マイア先輩に訊ければ楽なんだけど」

セルエはそう言って笑った。
「絶対に嫌だ。何があっても俺は顔を暗くして首を振る。
俺の――本名アスタ＝プレイアスの、義理の姉貴には気づかれないようにして
突如として異世界に落とされた俺を拾い上げてくれた恩人で
めていた、この国で最も名高い錬金魔術師――マイア＝プレイ
しかしてその性格は、傍若無人という概念が具現化したかの
「って言われちゃったら仕方ないような奴なのだ。
「いや……うん、ごめん」
でもこれだけは譲れない。
いるかもしれない。
だが俺は学院に所属している期間中は、極力あの女と関わり、七星旅団の団長を務
なにせ我が親愛なるお義姉さまは、どんな平凡なことでさえ
変えてしまうという迷惑極まりない能力を持っているのだから
関わると絶対ロクなことにならない。
もっとも、そもそもその義姉の紹介でこの学院に来たのだ。
「あ、それで思い出した。渡したいものってのはこれなんだよ今さらではあろう。
ね」

と、セルエが俺に小さな封筒をひとつ手渡した。中に手紙が入っているらしい。差出人の名前はない。どころか宛名さえない真っ白な便箋だった。

俺はセルエに向けて訊ねる。

「……誰からだ？」

「んー……ま、開ければわかるよ。あ、でもここでは開けないでね？」

「なんでまた……」

「たぶん、驚くと思うから」

「……」

なぜだろう。不吉な予感しかしない。

思わず身震いしながらも、俺は便箋を外套にしまった。

「えっと、話はこれだけかな？」

「んー……。えっと。実はもうひとつ手紙があってね」

セルエは机の上に置かれていた、俺に渡したものとは別の便箋を手に取った。

ひと目でわかるのは、そちらの便箋には魔術的な処理が施されているということだ。

特定の人間でなければ開けられないという封印の術式。

それだけで、差出人には察しがついた。

「……姉貴からか」
「そう、マイア先輩から。つい昨日届いたばっかりなんだけど」
「そっか。……なんて言ってた？」
訊ねると、彼女は困ったような表情になって。
それでも言った。
「――いずれ近いうちに、《七星旅団（セブンスターズ）》を再結集する、って」
俺は。俺は――何も答えない。
確かにそれは、普通の手紙で送れる内容じゃないだろう。
どこの誰とも知られていない、伝説となった冒険者の集団（パーティ）、
その一角が今、俺の目の前にいるセルエだということを知っているのは、この街でも俺とレヴィ、そして学院長くらいのものだった。
セルエ＝マテノ。七星旅団（セブンスターズ）の五番目。
世間において《日向の狼藉者（ひなたのろうぜきもの）》の二つ名で呼ばれる、最強の七人のうちの一角。
「……そりゃまた。理由は？」

「さあ？　マイア先輩の考えてることなんてわからないけど要なことなんだと思うよ」

信頼しているのか諦めてるのか。セルエと姉貴の関係もよくわからない。

「アスタは、どうするの？」

セルエに問われる。俺は肩を竦めて、

「どうするも何もないだろう。俺が呼ばれたわけじゃない」

「でも、迷宮で会ったって魔術師は、アスタのことを知ってたんでしょう？」

「……だからってな。今の俺じゃ、七星に戻っても足手纏いにしかならない」

「呪われてるから？」

「……まあ、それも含めてでも、先輩が言うなら必

「学生になってまで、解呪の方法を探してるのに？」

「別に、冒険者に復帰したいから、呪いを解こうとしてるわけでもない」

元から足手纏いだったのに。ましてそこから、さらに力を失くした俺が。

――今さら旅団に戻れるものか。

「話がそれだけなら、もう行くけど――」

「――七星旅団（セブンスターズ）の六番目は」

セルエが言う。その口調は静かで、まるで教え子を諭す教師のよう。
俺は、立ち止まることなく扉を開ける。
「ずっと、アスタの番号だよ。それは絶対に変わらない」
「――それを、言うなら……！」
思わず激しかけ、それが八つ当たり以外の何物でもないことを悟ってやめる。
弁えろ。俺はセルエに何かを言える立場じゃない。だがセルエは、きっと俺に、何かを告げる資格がある。
だから彼女は、強引に俺を今回の件に関わらせたのだ。それを余計なお世話だと、否定する資格なんて俺にはない。はけれど――甘んじて受け入れることもできない。
「……悪い。なんでもない」
「そうやって、なんでもかんでも自分の責任にしようとするの、いや、強欲なのかな、アスタは。どっちにしろ悪い癖だよ」
「そんなつもりはない。別に腐ってるわけでもねえよ。呪われてるんだ、仕方ないだろ。解呪のほうも手詰まりだしな」
「そうかな？　アスタが本気で探せば、呪いくらい解けると私は思うけど。だからマイア先輩も、アスタをこの学院に送ったんじゃないのかな」

「……買い被りだよ。それにあの馬鹿姉貴が、そこまで考えてるとは思えない」

結局それ以上は何も答えずに、俺は部屋をあとにした。

その背に、セルエの言葉が届いていた。

「――アスタには、何かを諦めるなんてこと、絶対にできるわけないんだから」

※

部屋を出ると、窓の外が暗くなっていた。

どうやらオーステリアの街に、久々の雨が降るらしい。早いところ帰らないと濡れてしまう。

それでも、どうしてか急ぐ気にはなれなくて。俺は煙草を取り出すと、燐寸を使って火をつける。

ひと息、紫煙を肺に溜め込み、気取るようにして空へと吐き出す。立ち上る煙は灰色の空に溶け込んで、すぐに見えなくなっていた。

その光景に、なんとなく、俺は火葬場を思い出す。

「……ったく。あの姉貴も、今度は何を考えてるやら……」

再結集するという七星旅団。だがそこに、きっと俺の居場所はない。いや、違う。ただ俺が許せないだけだ。自分の価値を、自分で認められないだけだった。

異世界に投げ出され、死ぬ寸前のところを拾われた。この世界で生き抜いていくためには、強くなるしかないのだと思い知らされた。だから――それこそ血反吐を散らしながら、俺は生き抜くために足掻いて足掻いて足掻き続けた。

俺に魔術の才能はなかった。使えるのはただひとつ、印刻を用いた魔術だけ。けれど、それでよかった。そのひとつを極めさえすれば、きっと、どこか別のところに立てるのだと――いつか憧れた背中に追いつけるのだと、俺は信じていたのだから。

強い魔術師にさえなれば。きっと、なんでもできるのだと錯覚していた。

そして、ただ魔術の研鑽を続けた俺は、やがて義姉が結成した七星旅団に入り、いつしか伝説の冒険者のひとりとまで言われるようになっていた。

けれど。かつて俺がいた七星旅団は、もう二度と存在することがない。

ほかならぬ、この俺が壊してしまったのだから。

「――――……」

六番目が俺だけだと言うのなら。四番目だって、彼女だけの数字だった。

だからこそ俺には資格がない。
七星を、その星のひとつを壊した俺に、許される言葉なんて存在しない。
そう、俺はいつだって最後まで生き残る。誰かが言う通りどこまでも生き汚い男だから。知り合いなんていない、言葉さえ通じない異世界に投げ出されたって死ななかったのだ。その醜さには反吐が出る。
だ——生きることを諦めなかったのだ。
そう。俺は、仲間を犠牲にして生きた。
——四番目の彼女を殺して、それでも、それでも俺は生き残った。
そんな俺が、今さらどの面を下げて旅団に戻れるというのだろうか。誰も咎めてくれないのに。誰も責めてはくれないのに。それに甘えて、のこのこ居座れるわけがない。
たとえどれほど願っても。
どんな魔術(まじゅつ)を使(つか)っても——彼女は二度と、笑わない。
「——そういえば」
立ち上る煙を見ながら、ふと俺は、地球の文化を思い出していた。
この世界には確か、線香の文化はなかったな——と。
立ち上る煙を眺めながら、いつまでもひとり、そんな風に考え続けていた——。

あとがき

昔から、あとがきを書くのが夢でした。

というといささか正確ではなくて、もちろん僕は作家になるのが夢だったわけですが、ではもし作家になれたら何をしたいのか、いわば野望のようなものはないのか。中学生の僕が考えたところ、そのひとつとして思い浮かんだのが《あとがきを書くこと》でした。

作家にならずとも小説は書けます。ですが、あとがきを書くことはできません。いえ、もちろん書くだけだったら可能ですけれど、それはなんか違う。実際書いてみて、奇妙な違和感と言い知れない虚しさに包まれた経験を持つ中学生の頃の僕がそう言っています。

その野望を今、こうして叶えることができました。

想像の中での僕は、すごく楽しそうに、嬉しそうに、大きな達成感に包まれながらあとがきを書いていたのですが、現実の僕は意外にもそうではない。というよりも、現実感をあまり感じられていない。なんだか、ふわふわとしています。

上手いこと進めば、この文章が巻末に載って、きっと多くの方の目に触れることになる

とは思うのですが。そのときの気持ちも、やはり想像とは違うものになるのでしょう。

何事も、体験してみなければわからないということですね。

その証拠に中学生の頃の僕は、こんな風にあとがきでいい感じの話を書こうとして滑るなんてこと、予想だにしていなかったのですから。なんでこうなったかな。

てなわけで、改めまして初めまして。涼暮皐（すずくれこう）と申します。

あるいはウェブ連載版から引き続きご覧になってくださっている皆様には、白河黒船（しらかわくろふね）と名乗るべきかもしれませんが。とりあえずここでは涼暮です。

さて、本書『セブンスターズの印刻使い』はもともとネット上の小説投稿サイトである『小説家になろう』様において連載していた作品です。それが光栄にも編集者さんの目に留まり、こうして書籍化という形で皆様のお手許に届けられることとなりました。当然、文庫という形となるに当たり、連載版からはかなり改稿してあります。物語の大筋は変更せず、けれど全体的なクオリティは向上させ、より物語として親しみやすいものに、と。

具体的にはシャルの出番とかシャルの出番とかシャルの出番とか！

……ウェブ版の連載も引き続けておりますので、書籍版と揃ってお楽しみいただければ嬉しいです。お願いします。

うむ。ここらでひとつ内容にも触れておきましょう。

もしあとがきから立ち読み派、という方がいらっしゃるようでしたら、お財布を片手にまずはレジまで。あなたの本棚を素晴らしいイラストが飾ります。

……まだ立ち読みですか？　では販促です。

本書『セブスタ』は、ジャンルとしてはいわゆる《異世界ファンタジー》に相当します。主人公であるアスタは、ある日突然、剣と魔術の異世界に転移させられ、厳しくも危険な世界を冒険していくことになる……のですが。

この作品では、その過程がもう終わっています。アスタはすでにひとつの物語（エンディング）の終わりまで到達しています。伝説と評される《七星旅団（セブンスターズ）》の一角として名を馳せ、そのときに受けた呪いから冒険者を引退するところまで行っています。

いわば古傷が痛む歴戦の勇士です。

とはいえ、そうは言ってもまだ若いアスタの物語は続きます。周りの学生たちは《これから》を生きますし、人生の数だけ物語がある。どこの誰が、なんのために起こしたのかさえ不明な事件に巻き込まれたりもするでしょう。何が起こるのかなんて、わからない。

あるいは、体験したのだとしても。

この作品はそんな物語です。誰かの人生を物語にたとえるなら、その一部を切り取ったところで終わらない。あるいはその誰かの人生が終わっても、別の誰かに引き継がれて、先へ先へと続いていく。それはきっと、世界が滅ぶまで。

とまあ長々と書きましたが、作品としてはあくまでもエンターテイメントです。読んだそのとき楽しんでもらえれば構わない。あとは忘れられてしまったとしても、ともすれば何年かしたあとに、たとえば本棚を整理しているときに見つけて思い出し、「そういえば、こんな本もあったなあ」と、読者様の人生（ものがたり）の一片になることができるかもしれない。それだけで作者は幸せです。

……よし。今ものすごく格好いいこと言えた。これだよ、これが書きたかったんだ。

最後で割と台無しにしつつも続きます。ここからは謝辞をば。

まずは広大なネットの海から『セブスタ』を見出して、声をかけてくださったイケメン担当編集のKさん。初めてお話しした第一声で「この敵めっちゃ強いですね、これ本当に勝てるんですか!?」と作品の話を振ってくださった時点で僕はもう落ちてました。いやん。

イラストを引き受けてくださった四季童子先生。編集Kさんからお名前を伺ったとき、たまたまいた焼き肉店で天高くガッツポーズをかましました。それまで作者の脳内では棒

人間のレベルだった登場人物たちに、ひと目見て「これだ」と確信できるほど素晴らしいヴィジュアルをつけてくださいました。みんな格好いいし、すごい！

そのほかにも編集部の皆様を始め、本書に関わってくださった全ての皆様。また若造の僕に様々な助言をくださった先輩作家さんたち。

そして何より、ウェブ時代から応援してくださった全ての読者様に。

お会いできるだろう、まだ見ぬ全ての読者様に。

最大の感謝を申し上げます。本当に、ありがとうございました。

またお会いできる日を心から祈っております。

末筆代わりに。

ずいぶん昔から僕の作品を読んだり読まなかったりしてくれた友人たちとの会話。

「俺、作家としてデビューするよ」

「焼き肉」

「いや寿司」

「つーか高けりゃなんでもいいちょっと待っておかしくね？

……うん。いや、あの、

二〇一五年文月　涼暮皐

ファンレターのあて先　ご意見、ご感想をお寄せください

〒151－0053　東京都渋谷区代々木2－15－8
(株)ホビージャパン　HJ文庫編集部
涼暮 皐 先生／四季童子 先生

HJ文庫
598
http://www.hobbyjapan.co.jp/hjbunko/

セブンスターズの印刻使い1

2015年9月1日　初版発行

著者――涼暮 皐

発行者―松下大介
発行所―株式会社ホビージャパン

〒151-0053
東京都渋谷区代々木2－15－8
電話　03(5304)7604（編集）
03(5304)9112（営業）

印刷所――大日本印刷株式会社
装丁――coil／株式会社エストール

乱丁・落丁（本のページの順序の間違いや抜け落ち）は購入された店舗名を明記して
当社パブリッシングサービス課までお送りください。送料は当社負担でお取り替えいたします。
但し、古書店で購入したものについてはお取り替えできません。

禁無断転載・複製

定価はカバーに明記してあります。

©Koh Suzukure

Printed in Japan

ISBN978-4-7986-1073-3　C0193

ガンマニアの青年は異世界でどうやって神になったのか!?

蒼鋼の冒流者

ブルースチール・ブラスフェマ

著者／榊 一郎　イラスト／赤井てら

平凡なガンマニアだった天野行成は、ある事故で死亡し、異世界で造られた人造生命体へと転生する事になった。恩人を殺した＜教会＞から出奔した行成は、その体に宿った神をも冒涜するがごとき能力と、自身の銃知識を組み合わせ、恩人の妹ダーシャと共に神へと逆襲することを誓う—!!

シリーズ既刊好評発売中

ブルースチール・ブラスフェマ
蒼鋼の冒流者1

最新巻

ブルースチール・ブラスフェマ
蒼鋼の冒流者2

HJ文庫毎月1日発売　発行：株式会社ホビージャパン

パン屋を始めた退役軍人の元に現れた美少女の正体は!?

戦うパン屋と機械じかけの看板娘（オートマタンウェイトレス）

著者／SOW　イラスト／ザザ

人型強襲兵器――猟兵機を駆り「白銀の狼」と呼ばれた英雄ルート・ランガートの夢はパン屋を開くこと。戦争が終わり、無事パン屋を始めた彼だったが、その強面が災いしてさっぱり売れない。そこで窮余の策として募集したウェイトレスとしてやってきたのは白銀の髪と赤い瞳を持つ美少女だった。

シリーズ既刊好評発売中

戦うパン屋と機械じかけの看板娘（オートマタンウェイトレス）

最新巻　戦うパン屋と機械じかけの看板娘（オートマタンウェイトレス）2

HJ文庫毎月1日発売　発行：株式会社ホビージャパン

第10回

HJ文庫大賞

作品募集中！

HJ文庫大賞では、中高生からの架空物語ファンをメインターゲットとするエンターテインメント（娯楽）小説、キャラクター小説を募集いたします。学園ラブコメ、ファンタジー、ホラー、ギャグなどジャンルを問いません！

【応募資格】 プロ、アマ、年齢、性別、国籍問わず。
【賞の種類】 大　賞：賞金100万円
金　賞：賞金50万円
銀　賞：賞金10万円
読者グランプリ：デビュー確約
【締　　切】 2015年10月末日（当日消印有効）
【発　　表】 当社刊行物、HP等にて発表
公式HP　http://www.hobbyjapan.co.jp/hjbunko/
一次審査通過者は2015年1月上旬発表予定
【応募宛先】 〒151-0053　東京都渋谷区代々木2-15-8
株式会社ホビージャパン　第10回HJ文庫大賞 係

<応募規定>

●未発表のオリジナル作品に限ります。
●応募原稿に加えて、以下の2点をつけてください。
【別紙1】 作品タイトル、ペンネーム、本名、年齢、郵便番号、住所、電話番号、メールアドレス、原稿の形式（プリントアウトかデータか）を明記したもの（ペンネーム、本名にはフリガナをつけてください）。また、作品に合うと思うイラストレーターがいるならば、順に3名挙げて下さい（※必須ではありません）。
【別紙2】 タイトル及び、800字以内でまとめた梗概。 梗概は、作品の最初から最後までを明瞭に記述してください。
※記載の応募規定が守られていない作品は、選考の対象外となりますので、ご注意ください。

原稿をプリントアウトする場合

●応募原稿は必ずワープロまたはパソコンで作成し、プリンター用紙に出力してください。手書きでの応募はできません。
●応募原稿は、日本語の縦書きでA4横使用の紙に40文字×32行の書式で印字し、右上をWクリップなどで綴じてください。原稿の枚数は80枚以上120枚まで。
●応募原稿には必ず通し番号を付けてください。

データでのご応募の場合

●応募原稿は必ずワープロまたはパソコンで作成し、記憶媒体（CD-R、DVD-R、USBメモリのいずれか）に保存したデータファイル（テキストファイルまたはワードファイル。拡張子が.txtまたは.docまたは.docxのもの）をお送りください。ファイル名は作品のタイトル名にしてください。
●応募原稿が規定に則っているかは、40文字×32行の書式に変換して80枚以上120枚までを満たしているかどうかで判断させていただきます。
●データでご応募の場合「別紙1はプリントアウトした紙」で、「別紙2は原稿とは別ファイルで原稿と同じ記憶媒体に保存」し、送ってください。

<注意事項>

●営利を目的とせず運営される個人のウェブサイトや、同人誌で発表されたものは、未発表とみなし応募を受け付けます。（ただし、掲載したサイト名または同人誌名を明記のこと）
●他の文学賞との二重投稿などが確認された場合は、その段階で選考対象外とします。
●応募原稿の返却はいたしません。また審査および評価シートに関する　お問い合わせには、一切お答えできません。
●応募の際に提供いただいた個人情報は、選考および本賞に関する結果通知などの大賞選考業務に限って使用いたします。それ以外での使用はいたしません。
●受賞作（大賞およびその他の賞を含む）の出版権、雑誌・Webなどへの掲載権、映像化権、その他二次的利用権などの諸権利は主催者である株式会社ホビージャパンに帰属します。賞金は権利譲渡の対価といたしますが、株式会社ホビージャパンからの書籍刊行時には、別途所定の印税をお支払いします。
※応募の際には、HJ文庫ホームページおよび、弊社雑誌などの告知にて詳細をご確認ください。

<評価シートの送付について>

●希望される方には、作品の評価をまとめた書面を審査後に郵送いたします。
希望される方は【別紙1】 に「評価シート希望」と明記し、別途、返送先の"郵便番号・住所・氏名"を明記し"切手82円分を貼付"した"定型封筒（長形3号または長形4号）"を応募作に同封してください。返信用封筒に不備があった場合、評価シートの送付はいたしません。
●評価シートは選考が終了した作品から順次発送いたします。封筒は一作品につき一枚必要です。

※読者グランプリの詳細に関しましては、公式HPをご参照ください。